

伊藤鶴之助氏

川崎市南河原九九四



小學校教員勤続二十一年餘現川崎市神職會副會長
幸町小學校教
育後援會特別
會員帝國在郷
軍人會川崎市
御幸分會名譽
會員の公職を
帯び女體大神社掌補命外七社を兼補す伊藤鶴之助氏
の奉仕せる女體大神は伊弉册尊、伊弉諾尊、天照大
神、譽田別尊、大地主神、豐受比賣神を祭神とし當
南河原一圓の總鎮守永錄年間の建立に係り指定村社
に列格し神饌幣帛供進使の參向あり現社殿は工費三
萬六千餘圓を以て昭和三年七月に竣工し同年十月正
遷宮祭執行せられたり。

伊藤氏は明治二十年八月十六日伊藤源次郎氏の長
男に生る伊藤家は遠く伊東祐親に發し世代當南河原
に永住し曾祖父三右衛門氏私塾を開き近郷の子弟に
學を授く先代源次郎氏女體大神に奉仕し兼務神社七
社の社掌たり晩年二等司業中教正に昇進し昭和二年
一月四十五年間神明奉仕の生涯を終られ歸幽せらる
氏即ち其職を繼ぐ氏は明治四十四年神奈川縣師範學
校卒業同年陸軍六週間現役兵幹部適任證受領大正元
年神職祭式祝詞作文檢定合格は八年國學院大學國文
修業同十三年大講義補命同十四年權少教正補命昭和
二年地方長官より小學校訓導兼職認可同年女體大神
社掌補命川崎市塚越御嶽神社、小向指定神社八幡神
社、古川神明大神、戸手神明大神、横濱市下末吉町
愛宕熊野兩社、北寺尾神八幡神社社掌に兼補せられ
昭和三年神奈川賜饗場に饗養を賜り大禮記念章を授
與せらる。
近詠に「宮殿も新に成りて氏子等がつくす誠は神や
知るらん」又た「軍人は神に詣で、健かにみなみか
はらぬ幸や祈らん」

山野井惠助氏

戸塚町矢部七七



山野井家は戸塚町の舊家なり代々舊左衛門と稱す
祖父舊左衛門
氏は同地の最
舊家河原家よ
り入り天保八
年創て醬油釀
造業を營み今
日の大を成すの因を造れり當主惠助氏安政二年十一
月十日戸塚町鈴木家より先代舊左衛門氏の長女もせ
氏の掣養子として其家を繼げり幼にして齋藤鐘助氏
に就て螢雪六年漢學を修む明治二十二於家督を繼ぎ
町村制發布せらるゝや第一期町會議員に推され職選
十回に及び自治の爲に盡瘁せらるゝ甚だ多く就中戸
塚矢部兩町の合併小學校の建築等衆議を排して合理

的に行動し其他水道の設置町道の改造等一として參
與せざるなく殊に水源地に苦み第一水源地宮ヶ谷
を求むるに至りし辛酸は言語に絶せし者ありと云
ふ。
氏の帯ぶる公職甚だ多く戸部町消防組々頭、神奈
川縣物産共進會審査員、縣下教育品展覽會委員、營
業稅審査委員、所得稅調査委員、戸塚小學校建築委員
等に擧げられ大正四年鎌倉郡會議員に當選し同年其
議長に撰ばれ同十年再選せられて郡制廢止に至つて
止む其他役場建築委員、水道布設委員、避病院建築
委員、高座鎌倉兩郡醬油釀造組合副組長等凡百の要
職に在り殊に三大戰役と大震災に當つては殆んど獻
身的努力を拂ひ震災當時杉山町長の歴死により町政
に指揮者を失するに際し氏は奮然起つて難局に奔走
し日夜寢食を忘れたり氏の醬油釀造上の賞牌は數る
に逸なく其公共奉仕の功勞に依り或は縣知事より或
は自治議會より賞品賞狀等は机上に堆積せるに至
る。

長谷川嘉兵衛氏

三浦郡三崎町



長谷川家の祖は久良岐郡金澤宿野島村に住す三浦安針事ウイリアム、アダムの初年三浦より輸送の鮮魚を以て日本河岸に肴市場を開き後三代家光の時日本橋材木町に新市場を設く長谷川家は當時より三崎田浦肴御用役を命ぜらる台命により當地に居を移し野島屋と號す三崎田浦の生たる魚は民間に買ふを許さざりしなり長谷川家荒井養寸に屬し苗字御免の家格を許さる。維新の初め江戸の新市場を廢止せらる氏は此地の魚類を東京に送り魚商を營む明治十五年東京より三

崎に遷り四品市場を開く後町營の市場開設に當り小峰町長の要望に由り市場を閉鎖し新市場の名譽役に推さる明治十七年私設消防組を起し氏は其頭取たり同二十七年消防規則發布に基き同年三月三崎町の公認消防成るや同小頭となり三十六年同組頭に擧げられ同組合に盡瘁今日に至る公認とは殆名義上のみ町費節減の結果は私設に異なるなきの状態にあり氏は一切の犠牲を拂ひ此事に盡す縣及町は爲に賞品賞状を與ふる一再ならず氏消防事績に於て最も能く露れたるは大正の震災當時に在り土風を冒し火燼を泳り東奔西走晝夜を捨てず消防に救護に警戒に整理に身心の全部を盡して間然する所なく他の各團體の有せざる特種賞状は氏の率ゆる消防隊に降されたり爾後或は消防器具完備の爲め或は火災豫防宣傳の爲め或は全國組頭大會に議案提出の爲め文久元年誕生以來七十年の後半生は殆んど町消防の爲に盡されたり。

森島孝之助氏

横濱市中區鶴町三ノ一二



山城國相樂郡は國內南極の大郡なるも地勢概ね峻峻山嶺魁嶸として平夷の地に乏し然れども舊蹟名勝に至つては諸郡と共に甚だ多し就中笠置村は彼の元弘の亂に後醍醐天皇御行在所として知られたる笠置山のある所副しも宏壯を極めたる鹿鷲山笠置寺も諸堂災上の際盡く煙滅して今は何物の微す可きなく唯だ老杉古松の空しく響音を送るのみ森島氏は此の歴史的舊地に於て一郷の舊家に生れたり。父君森島治三郎氏の長男にして明治七年斯る山村

に呱呱第一聲を挙げられたり明治二十九年青雲の志を抱きて横濱に出て身を伯父築山孫左衛門氏に寄す同家は榮町に於て柴山漆器貿易商を營む氏其業を見習ふ事十五年天來の商才と積年の習練は其道に精通し自ら人後に落つるなきを認むるに至り明治四十三年齡三十七歳にして始めて獨立の旗幟を市内不老町に掲ぐるに至りたり其用意の周到なる概ね此の如く又以て氏の資性を察す可し。氏既に業を開く山城人士の粘り強き天稟と獨特の商才は遺憾なく發揮せられ創業幾何もなく堂々の商陣を齊へ不老町の商舖狹隘なりとして長者町九丁目に新築移轉して益々商勢を伸張し大正の震災に逢ふも尙且つ毅然として立ち直ちに死灰の上に店舖を開き復興の氣運に順應して盛に海外貿易界に進出を繼げつゝあり然れども悼むらくは震災に最愛にして最賢の夫人を失し唯だ長息長之助氏を遺す氏は商大出身の秀才にして現に日本綿花株式會社チキナス支店に在り。

井上良齋氏

横濱市中區大岡町通り町六一四



井上家は陶器界の名家なり世々良齋と號し埴俣堂治兵衛と稱す
尾張國瀬戸村に住し尾州侯の御用窯師たり嘉永元年一族井上良吉松平侯の聘に應じ江戸に移り侯の邸内に陶窯を設け専ら磁器を造る是れ江戸に於ける初世良齋なり後明治初年に至り自ら窯を墨田河畔橋場町に築き好んで雅品を造り雅名大に擧がる。

初代良齋翁老ひて嗣子なく即ち埴俣堂治兵衛氏を尾州より呼び養嗣子として其業を繼がしむ之を二世井上治兵衛氏と稱し又た妙神に入るの技能を有し明

治十年第一回内國勸業博覽會に出品し受賞せるを始めとし續いて内外各博覽會に入賞し且つ宮内省の御用命を拜する事十回に及ぶ明治三十三年佛國に萬國博覽會の開設ある哉我國委員と共に渡佛し東洋技術の真髓を發揮し名譽金賞を受け名を海外に博す歸朝後不幸病魔の犯す處となりて起たず三世良齋氏は先考の長男にして明治二十一年九月四日橋場町の邸に生る通稱を良太郎氏と謂ふ先考歿後其業を繼ぎ後窯を横濱に移し頻りに逸品を出す日本美術協會、平博美術館、農商務省工藝展覽會、彩壺會現代陶工展覽會、佛國巴里萬國美術博覽會、文部省美術院展覽會、聖徳大師奉讃美術展覽會等に入選し擧ぐも明治天皇陛下 大正天皇陛下 今上天皇陛下の御買上の光榮を擔ひ猶逐年宮内省の御用命を蒙れり又貿易品としては能く外人の嗜好に投じ今や我邦陶器界の權威者として盛名鏘々たり母堂かね刀自七十二歳にして健在せられ夫人キン子氏至孝至貞の賢婦人たり。

大貫忠一氏

横濱市神奈川區青木町四五四



大貫家は代々越前武生の藩士なり武生は古の府中に越前國廳のありし所前田氏此地に築き後本田氏の城邑に歸す總社大神龍泉寺國分寺妙法寺趾臺攝寺等皆其周圍を遶りて淨化せり其勝景掬すべき所あり。

氏は明治十二年十月十八日神嘗祭の翌日を以て生る祖父を傳氏と稱し父君を長次郎氏と謂ふ共に武士的教育を受け剛毅純真の人なり氏既に其の血脈を享く加るに風光の淨化を受け頭腦明晰意志剛健にして玲瓏玉の如き人格は國産白羽二重を觀ると感と同じ

くせり父君三十九歳の壯年を以て歿せられし時氏僅かに九歳の幼年なり五人の弟妹と共に賢母たけ刀自の養育に長じ幼時既に神童の稱を博せり。福井中學卒業後遠く笈を東京に負ひ一ツ橋高等商業學校に入り明治三十五年七月優秀なる卒業證を母堂の膝下に呈し直ちに實業界の登龍門三井物産會社に入り東京本店詰會計課勤務たり同三十七年北米合衆國紐育支店詰に轉じ在米八年同四十四年横濱支店會計課に復歸し大正八年更にロンドン支店に赴任し大正十年歸朝横濱支店長代理に補せられ今日に及ぶ氏の經濟學に對する研究は甚だ深く殊に理濟に於ては一個の權威者にして又外國語に至ては特種の技能を有する稀有の人士なりと聞く氏の今日ある素因を完成せしめたる母堂は今健在せられて福井の大貫家に靜養せられ夫人千代子氏は東京所澤倉橋家より入らる一息三嬢あり靜江嬢は大阪島田氏に嫁し敦代嬢は櫻真女學校卒業後家庭にあらる正氏尙幼なり。

松坂省輔氏

横濱市中區本牧町二七五



長門の西遙かに壹州に對し玄海灘の激浪岸を洗ふの所安岡町あり是地は今日水産鑛詰界の權威者松坂省輔氏の出生地なり豊浦郡は元鹽と紙と水産物に富む安岡は清酒を以て名あり松坂家は累世の酒釀家にして豪富の聞へ近郷に高し氏は明治十五年七月二日父君彌勝氏の長男に生る。夙に水産の事に志し豊浦中學卒業後東京水産講習所を出て直に山口水産試験所に入り後聘せられて福井縣立水産學校に教諭として教鞭を執る事三年職を辭して郷に歸り更に周防の名邑三田尻に於て輸

出向蟹鑛詰製造業を始めしは大正二年に在り當時新の器械を應用せしも天運利あらず遂に失敗に歸し再び起つ能はざるに至る。

東京の鑛詰出張所の設置あるや其支配人となり大いに鑛詰事業の發展に盡瘁する所あり。大正五年横濱野崎商店に入り専ら蟹鑛詰の輸出事務を掌る由來水産物鑛詰業は氏の最も得意とせる専門的技術なれば蟹鑛詰流行の技運に乗じ日本品を世界各國に普及せしめ就中野崎商店をして本邦第一の同品輸出商たらしめしは氏の力與て最も大なるものあると同時に日本海産物を海外に紹介したる有功者の一人なり眞に横濱水産物輸出業界の權威者なり。

氏は資性活達にして趣味としても運動を好み殊に山岳登山の豪壯快活なる氣分に親しむに於て然り而して夫人よし氏横濱の人二男二嬢あり長男省吾君次男次郎君長女正枝嬢次女はる枝嬢等なり。

山本泰正氏

横濱市中區本牧町二六一



山本氏の生地播州姫路は中國の名市にして元酒井氏の城市なり城は英傑秀吉の築きたる名高き白鷺城五層の天主閣屹として半空に聳ゆ家は代々藩士として酒井氏に仕ふ播州藩は古來尙武の風に富み意氣を以て聞へたり氏は此郷土の産みたる氣宇宏濶意思強固にして我が横濱市建築用鐵材商中の偉商なり。

明治二十五年壬辰春三月三十一日五軒町の邸に生る先考運吉氏の次男なり幼時穎悟學を好み童にして五歩の才あり明治四十四年姫路中學を出て關西大學

法學部に入り大正五年其業を了へ同年直ちに神戸鈴木商店の本店に勤務す謹恪精勵にして才氣充溢忽ち出錐の譽を博し多士濟々たる當時の鈴木王國に於て濟衆を抜き横濱支店鐵材部主任に擢んでられ縦横に敏腕を揮ふ五年氏の美名は實業界に稱讃せらるゝに至る不幸は偶然に來れり流石に旺盛を極め一世の豪商鈴木商店の破綻に會し氏此に於て獨立鐵材の販賣業を開始したり。

鈴木商店在職中小田原急行鐵道橋梁及横濱稅關四號棧橋倉庫横須賀海軍工廠神奈川縣廳等大建築物の鐵材料は盡く氏の手依つて納められたり其獨立するや東京橋區松屋町に事務所を置き大林組及横濱ドック會社を主として各方面に進出し今年四月横濱市住吉町に八幡回漕店を開き同出張所を東京深川繩手町に設け盛に活躍を試みられつゝあり特に記す可きは祖來傳承の武士的念慮を忘れず所謂士魂商才を目的となし商戰場裡正道を進みて敢て奇策を用ひざる所に氏の本領を存す。

落合亥作氏

横浜市神奈川區神奈川町一八七



落合亥作氏は埼玉縣秩父郡野上村長壽の人先考落合梅作氏の長男にて明治十年元旦一月一日に生る此年の暴徒南洲を擁し亂を起したるの月なり氏其の初頭に生る生涯の波瀾重疊にして一幅の活劇史其物なるは偶然ならざるの感あらしむる者あり氏は秩父中學を卒へ明治法律學校に學ぶ時偶々先考横濱に於て生糸商に慘敗し家勢急に衰ふ氏は茲に變學の己むなきに至る。氏生來剛膽偉力衆に秀て幼時不羈勁行人を壓するの概を有す長じて其性増々露る日露戰役直後臺灣の

匪徒各地に起り一時收拾す可からざるの狀あり政府此に於て鎮壓の爲め警防の士を募る氏之を聞き欣然募に應じて出征し瘴癘酷熱の中各地に轉戦奮闘し其數數十回に及ぶ就中該事變に有名なる唯片年に於て土匪軍最後の主領枋大競を倒したるは實に氏が偉勳中の殊勳なり此間特別奇襲隊長となり警部補として阿候街辨務署勤務となり遂に脚部に貫通銃創を受け功を以て勳八等に叙せられ瑞寶章を賜はる後内地に歸り茲に實業に従ふ。

再び朝鮮に渡り製造工業を興す、明治四十年の大洪水に覆滅せられ刻苦の後明大魚の買占に大敗し、在鮮幾年多く企て多く敗れ更に横濱に歸り土木請負業を創め始めて成功の域に達し震災後更に材木商を營み今や個人營業者中の白眉と稱せられ氏の生涯は眞に詩劇の一編にして血あり涙あり活劇あり喜劇あり九死一生七轉八起ある面白き歴史を有す而して長男福壽氏日大卒業後警視廳警部たり。

中村八五郎氏

横浜市神奈川區小傳馬町五〇四



古語の「正直は成功の秘訣なり」とは甚だ俗にして又言ひ古びたるも是れぞ千古不拔の金言にて如何なる千萬言も之の眞諦を動かす能はざる可し然れども此を實得し得るの人は千萬人中に一人を求めも稀ならん殊に現代日本の上下唯だ偽善の巧拙を以て賢愚を評する時に於て然り若し斯の如き人ありとすれば蓋し偉人として恥ぢざるなり今中村八五郎氏にして之を信條とし成功したるの人を見る。氏は明治八年六月四日傳教大師忌たる六月會の日

を以つて生る幼時より隱忍耐苦資性正直にして獨立の意義に富む稍長じて弱冠に至る偶々日清戰役の起るに會し即ち撮抄の資を以て魚問屋を創め「八を商號とし奮闘能く有力なる競争者に伍し遜色を示さず後十年日露戰役の際に盛んに飛躍を試み遂に強固なる基礎を作り爾來更に發展の行程を歩し現在に於ては千葉、北海道、東京、京城、岩手、静岡方面より輸入して當地の市場に供し取引範圍殆んど全國に及ぶ實に神奈川魚商中隨一の成功者なりと稱せらる殊に此間終始正直を以て一貫し一點何等の偽善を試みざる所に氏の本性を存せり。

氏に又同情の念に豊かなり大正八年十月二ツ谷大洪水に際し人命救護の爲め一家を擧げて出動したるが如き事例は枚擧に暇あらず而して氏の家庭甚だ賑ふ夫人とめ氏に四男七女あり長男千代藏君近衛二聯隊に入り除隊後父君の業を繼ぎ次男代次君甲府第九聯隊にあり長嬢次嬢共に他に嫁し三男常三四男幹男三女よね子四女もと子以下夏子かつ子たま君あり。

細田喜助氏

横濱市神奈川區神奈川町一九三〇



氏は長野縣諏訪郡永明村の人材は信濃第一の名神
諏訪の兩神社
に近く光景邦
内に冠たる諏
訪の湖程遠か
らざる地なり
明治十五年六
月七日河合文藏氏の二男に生る氏生來巨膽にして獨
立心強く幼時より商家たらんと志す此地古來蠶糸と
織物を以て名あり隨て氏も亦此方面に深き趣味と研
究を有す明治二十九年同村の細田家に養れ後養父與
七郎氏の女現夫人せい氏と婚し細田氏を冒す。
明治二十九年横濱に出て當時盛名全市に聞えたる
山田商店に入り屠物方面の事を擔任し同商店屠糸部

主任として只管らに其の發展に揮身の努力を盡す此
間は氏が最も苦心を要せし時代に屬す大正十年店主
と謀り同店屠糸部を合名組織となし別個獨立せる一
會社として山下町一九番地に經營し氏は其の代表
社員たり屠糸商としては横濱に於ける屈指の大商店
たり昭和三年蠶糸合名會社と名義を變更し以て今日
に至る蓋し會社の前身山田商店屠糸部より順潮の發
達を辿り遂に今の盛大に達する迄星霜二十五年の間
殆んど氏一人の經營方針に成り唯だ堅實一方の羅針
盤に依り來りしなり。
父君與七郎氏及母堂さく子氏猶ほ健在せられ郷里
永明村の細田家に靜安なる生涯を送らる家庭には長
女きよゑ氏に養子泰助氏を配し横濱の邸宅にはせい
夫人と長男與君次女千代枝嬢あり夫人は令名ある賢
夫人にして殊に子女の教育に力を盡され與氏は目下
慶應大學經濟科に在學中千代枝嬢は横濱高女出身の
才媛にして女子技藝に興味を有せらる。

大西友太氏

横濱市中區本牧町八王子



氏は愛媛縣伊豫國宇摩郡中曾根村の産たる教育界
の大家なり明
治十四年辛巳
春四月六日歴
史ある大西家
の邸に於て父
君伊勢吉氏の
長男に生る大西家は元龜天政の交阿波國三好城主と
して三好一部を領有せし大西備中守より出づ備中守
長曾我部氏に亡され逃れて伊豫に走り此地に於て遂
に自刃す備中守正義の士にして其自刃するは郷民を
戦禍の塗炭より救はんとするの意に出づ依て里人此
を祀る今中曾根村附近四個村の總鎮守として崇敬深
き大西神社即ち是れなり。

氏は其血系を享け資性高雅純情にして夙に君子の
風あり文學を好む師範學校を卒へ第二高等學校を經
て京都帝國大學哲學科を卒業し直ちに高野大學林に
教鞭を執る事多年頗る令名あり大正十二年横濱高等
工業學校教授に轉じ今日に至り學徳愈々著る。
氏は縣下教育學界の權威者にして教育會の重鎮な
り我横濱工業學校に於ては現校長と共に功績者なり
と稱するよりも大恩人なりと唱ふ可し同校の日本教
育界に投じたる最も進歩せる教育機關として驚異の
的となり着々其の効果を現實に著はし新時代に適應
せる人材を輩出し來りしは一に氏の薰育の結果なり
と謂ふは獨り吾人耳己にあらず苟も横濱の教育を語
る者にして此を否定する者あらざる可し氏は常に云
ふ教育は眞の優秀なる技能を養成し以て國家社會の
奉仕運用を第一の目的とせざる可らずとなす而して
榮夫人にきよ子嬢あや子嬢の二嬢あり。

山崎寅吉氏

横濱市平尾前二七六三



羅馬の古賢謂ふ「忍苦力行は人世の常道にして男子の本懐なり」と世の立志傳を通觀するに皆此の一言の現實に超ゆる者なきなり我山崎寅吉氏又其一人なり家は世々堀田氏の武臣にて先考に至る維新中興の大變革に會し勤行にして世に阿るを知らざる先考忽ちに社會の落伍者となりて爲す可き途なき境遇に沈みたり氏は之の資格のみありて一物なき家に生れ僅かに小學校を出でしのみ身を有りと凡ゆる勞役に服し以て家計の資に供したれば孝順の美名は一郷に聞へたり幼き頃より家運再

興家運再興の語を連續して耳にするの氏は稍々長じて家政を實弟高藏君に託し挺身身を波浪荒き人生海に投じ此に拔手を切て目的の彼岸に猛進を始めたり後神奈川に於て運送業を經營せる養家の業を繼ぎ自己の才氣に任して八方に快腕を揮ひ斯業界の飛將軍を以て自認せしも時に霸氣に災せられ蹉跌なきにあらざりしが強健なる意思は毎に此を打破し歐洲戦時の好況に乗じ大に家業を起し震災を一期として更に牛馬商を始め供給を秋田地方に仰ぎ以て四方に販賣し大に巨利を博し又自動車運輸の事を起して盛に活動を試み此處成功の基礎を造り尙ほ進展の方策を企てつゝあり氏の事業的負擔力は眞に驚くに足るものあり氏は又異常なる克己力に富み生來豪酒家にして斗酒猶ほ辭せざるの概ありしが一朝感ずる所あり全然禁酒禁煙の自制を守り現存に至りし一事の如きは氏の歴史中枚擧に違あらざる也。

新田直作氏

横濱市中區扇町二ノ五〇



輸出絹物は我邦海外貿易場輸出品中主要の位置を占む今此の代表的研究者たる新田直作氏は福島縣の人は同州磐梯山大噴火せる明治二十一年六月三日田村郡中郷村の邸に於て呱呱の聲を擧ぐ家は代々農を業とす祖父を源藏氏先考を源八氏と云ふ共に篤實の人なり氏は其四男に生る福島の地は蠶糸及其織物を以て聞ゆ氏は幼時より其事に携はり趣味も亦隨て此に存す三春小學校卒業後縣立福島工業學校織物部を出て直に國立織物検査所の先驅たる縣織物検査所検査官として入所し居る一年餘官

吏生活をなすには餘りに霸氣に富む氏は將來ある官職を放擲し恩師岡野足吉氏の福島羽二重株式會社の創立に伴ひ其社に入り此處師弟相容るゝ龍雲相合するの觀あり遂に明治四十一年より大正十三年に至る十八年間及び技師兼營業部長として自由に快腕を振ひ同社の爲盡瘁甚だ努むと共に斯業の研究を積む甚だ深し震後後進開路の爲め勇退して横濱の現地に輸出絹物商を開業せるは此より先福島羽二重株式會社横濱出張所の設立に當り其主任として兩地間を往復經營するの緣因ありしに依る氏既に獨立して開業するや工業的知識と經營上の經驗により漸々大を加へ絹織物研究界の重鎮にして曾て北海道樺太滿洲に涉り資料調査の爲めに赴き今や學界の古老先輩より其功を歎賞せられつゝあり隨て絹業者及學者界に知人頗る多しと聞く而して令夫人をかね氏と云ひ賢婦人の稱あり長女安子嬢長男源一君次男英次郎君あり。

石渡好文氏

横須賀市旭町三五



逗子の景勝は天下に鳴る旅客鎌倉を出て徳昔の觀未だ目を去らざるに磯馴松の間波光潮影の明滅する即ち逗子の新宿濱なり鳴鶴崎小坪の岬左右に突出し清麗繪の如き弓形の一小灣を成す豆相の峰層は淡靄の間に延び江の島の翠螺近く指呼の中に在り而して富嶽の清容淡く雲表に秀でて全景を整ふ信に名手も刷毛を投ず可き絶景なり。明治十七年若葉薫る五月二十一日眞眞大師降誕會の日を以て石渡五郎右衛門氏の三男として逗子町の邸に生る石渡家元水戸領の名主なり來て此地に農を

業とし名望あり氏は夙に商業に志し大實業を理想するの霸氣を有し十七歳奮然父母の膝下を辭し横須賀に出づ先づ伯父の家に入り商業を見習ふ傍ら店丁の務に服し三年の間大略商機に通ず二十一歳堀田梅吉氏經營せる酒店堀田本店の店員に聘せられ主人深く氏の人物を愛し氏も亦主人眷顧に感じ相倚り相倚り名は主従なるも情は父子の如し先代梅吉氏死亡後當代梅吉氏年若く體弱し氏は茲に其事業を繼承するも堀田商店の暖簾を變ゆるに忍びず堀田の名を冠し堀田商店石渡好文と刻稱して今日に及ぶ此一事氏の人格を語つて遺憾なし眞に當代稀に見る人士也。自家醸造の外大日本ビール株式会社月桂冠の特約店として東奔西走日を盡して足らず正に横須賀市に於ける酒類問屋の覇者と謂ふ可し現に市學務委員、横須賀所得稅調査委員に推され篤實の半面に銳氣を存し常に新味を營業上加るを忘れずキツ夫人に好子嬢あり。

美川鹿次郎氏

横須賀市沙留町三一



伊勢の名を聞けば直に高崇森嚴襟を正さしむるの感を曳ひ居ながらにして淨閑幽玄の境に在りて身は無垢の神前に額づくの想あらしむるは神州日本人にあらざれば通有する能はざる至誠至純の心念なり彼の聖地エルサレムに對し赤髮綠眼の客果して此の感念あるや否やを知らず況んや風光明媚風俗淳厚學止穩雅なるは神祖の鎮座ましますに相應しき淨地なり氏は明治八年六月此國三重縣那賀郡依那古村辻家の邸に生る。辻家は世々農を業とす先考新三郎氏篤實銳才の人

能く村人の敬を受く氏は其三男に生れ最も父君の性を亭け加ふるに大志あり商才に富む永く農村に住む能はず十八歳の時陽關の詩を唱して郷門を出て未來の大實家の夢を載せ單身横濱に出で更に横須賀に來り遂に浦賀に留る此間九年驚く可き刻苦と精勵を續け凡ゆる迫害凡ゆる支障と闘ひつゝ而も心長く消長起伏を忍び一路當年青雲の彼岸に努力を盡し 明治大帝の「取る棹のこころ長くぞ漕ぎ寄せて蘆間の小舟さはりありとも」御製かしこし美川米酒店に入り店主の認むる所となり二十六歳遂に美川家の養子となり其家を繼ぐ。

大正六年酒店を店員の一人に譲り横須賀に米穀商を開き漸次隆昌を致し現に横須賀米穀界の中堅となり横須賀米穀仲買商組合副組合長、大日本米穀會神奈川縣副支部長たる信望あり夫人しげ氏克く内助の功を積まれ長男一郎氏早大商業科にあり愛子嬢歌子嬢已に嫁し正子澄子都久江知津子四嬢あり。

西 信太郎氏

横浜市神奈川区青木町二二八四



山陰本線京都より走り城ヶ崎に向ふ中途播但線の合する所和田山を出づれば車窓一帯の平野を視る城ヶ崎郡即ち是れなり鶴の名所鶴山に近く八鹿驛の北名邑あり日高町と云ふ此地西信太郎氏の出生地なり氏は明治七年八月二十日町の舊家にして篤望家の譽高き西嘉平次氏長男に生れ父母鐘愛の中に長ず幼時より兒戯するに商價の事を娛ぶ商才あるの萌既に此處に見ゆ長ずるに従ひ其性愈々著はれ少年の頃豊岡町の商家に入り生糸屑物の研究をなし二十三

年出店町に於て獨立して其業を營み日清戦後の反動好況に乗じ一時繁盛を致したるも其の後不況に因り一敗地に墜り神戸に出て佐野商店に居る四年更に横濱に至り森野川合名會社に入りて外國商館賣込の事に當ること年あり。

明治三十九年野々垣商會を設立し大に横濱蠶糸界に雄飛し當時氏の鬼才は斯界の認むる所たり業務大に振ひたりしも大正四年世界大戰の爲め副蠶糸賣込不可能となりしより其年三月解散して山下町に獨立したる店舗を開きたり大正十年シーエマル商會買入方に招聘せられ精勵二年の後十二年の震災を機として同商店を退き爾來専力を自己の副蠶業に傾注して今日の巨をなすに至る氏は横濱副蠶糸業界の先輩たるは普く人の許す所にして大膽放思時に蹉跌を來す事あるも常に驚く可き反撥力を以て此を轉開する所に本領あり。夫人てい子氏先に歿せられ長男圭一氏次男達次氏あり他の二嬢共に嫁せらる。

大久保榮太郎氏

横須賀市中里町一四一



元治元年は徳川幕府愈々衰亡に近き將軍の勢權全く地に墜ち國歩正に多端の絶頂に在り家茂再度の參朝あり尊王佐幕の兩派連日連夜京師に衝突相殺傷し四國の外艦下ノ關を砲撃し幕府長州再征の令を發し薩長の聯合共同に成る等大小の事變連出して走馬燈の感あらしめ殊に武藏は柳營のある所騷擾の中に緊張満々たるものあり氏は此歳孟春一月所謂る兵馬忽々の裡に生れたり氏の平穩なる農村に老ゆる能はず波瀾重疊の行程に上りたるは蓋し生時の感應の然らしむる所ならん。

氏は多摩川中流の西涯武藏國南多摩郡稻城村の出身にして農家の長男に生れ耕耘を事とせざる可からざる境涯に在りしも幼時より勇心勃々斷ゆなし毎に壯學の期を窺ふ明治の中年一家を擧げて東京に移り天性潑灑たる才氣を以て二三の商業を營み奮闘十數年の歲月を閱し初めて横須賀に到りはま子夫人の名の許に質屋業を營ましめ氏は或時は企業會社を起し或時は物産會社を創め元より消長ありしも概して成功を得たり大正七年質業を廢し現在相模運輸會社の重役及株式會社介立社長たり尙東京海上火災、横濱海上火災、帝國海上火災、大同生命の各保險會社の代理をなし會社の信望又漸次に加はり會て横須賀市會議員に擧げられ令名今尙市民の記憶する所たり長男孝氏は慶應義塾商科出身にして石炭部を創め世人をして大久保氏に後ありと稱せしめ若武者委勇しく横須賀實業界に入り雄吉君恒吉君共に高等の學府を出で他に二息あり。

西岡英吉氏

横浜市神奈川區青木町上反町五〇二



將來世界の接觸は東洋にある可し東洋は必ず支那にある可し日支關係殊に日支貿易は現在と將來を問はず重且つ大なる者に屬す支那の地理に精しく支那の事情に通じ支那語を識り支那人を識らざれば共に貿易の事を語るに足らざるなり我西岡英吉氏は世の所謂支那通にして三井王國中有數の支那を知り支那を解するの人なる可し。明治十七年甲申九月二十三日秋季皇靈祭の佳節に於て金風黍の葉鏗に鳴るの秋皇國の聖地伊勢國三重縣多季郡大淀町の豪商西岡兼七氏の三男に生る穎智

俊英學を好み大志ありて群童と伍するを耻ぢ郷土の學程を卒へて遙に東京に笈を負ひ遂に高等の學府を卒へ支那語を専攻し明治三十四年三井物産會社東京本社に入社し茲に登龍門の双扉を開き同三十七年香港出張所、廣東出張所を経て廈門出張所長に命ぜられ約十五年間支那にあり毎に在留民の主腦部として同胞の爲に盡瘁せられ更に奔走して日支合辦の財團法人廈門博愛會を創立し氏は其會長となりて發展大いに勉めらる。大正七年より同十四年迄八年間名古屋支店長代理勤務同十四年五月横濱三井物産會社支店長代理として今日に至る氏の才幹技量知識人格は三井物産の如き天下の雄才を蒐集せる所謂多士濟々の裡に於て斯かる異數の發達を輝かざるゝの事以上蛇足を加ふるに及ばざるべし氏の趣味は甚だ多岐多能なり令夫人たつ子氏は伊勢の駒田氏より入られ敏君順子嬢次夫君好子嬢信子嬢達雄君の三息三嬢あり。

村田勝次郎氏

横浜市中西區不老町二ノ一三六



村田家は往時より江戸の名門なり中祖村田徳次郎氏氣概あり一刀流の達人として特に拔んでられて旗下の列に入る此れ當時にあつては蓋し異數の中に屬す以て氏の才幹技量の程知るに足るべし明治の初年其子村田鋼平氏幕府亡びて尙ほ士族に列するを快とせず決然士籍を奉還して商に歸し柴山漆器製造を開きたるも横濱の尙ほ發展すべき將來あるを察し明治二十三年家を擧げて市内北仲通に移り茲に店舗を設け傑出せる技量を以て多數の名品を製出し外人間に好評を博せり。

當主勝次郎氏は滋賀縣近江國高島郡今津村の舊家にして素封家として聞えたる寺井庄三氏の三男にて明治六年三月二十九日呱呱の聲を擧げ風光明媚の郷土に明晰なる氏の頭腦は保育せられ稍長じて大志を抱き天下の豪商を以て任ぜんと夢み平安朝以來千百年の舊都たる京都に出で三條通に名高き丸太呉服店に入り苦心六ヶ年の後横濱に出で郵船會社其他の船舶會社の海上生活に従ふこと七ヶ年此間稍海外の事情に通じ後米國に渡り桑港に在り更に辛酸を嘗め彼地に於て快腕縱横大いに在留人の爲に氣焰を吐き約八年にして歸朝せり。其後村田家に望れて養嗣子となり其姓を冒す柴山漆器製造に従事し爾來研磨効を積み遂に名手と稱せらるゝに及び家運漸次に繁盛に趣き動かさる基礎此處に完成せり。夫人ノブ子氏能く内助の功を盡し氏の今日ある裏面には夫人の隱忍與つて大なり貞良君保郎君晴郎君の三息あり。

山岡勤之助氏

横濱市神奈川區青木町三六一



氏は明治七年甲戌春四月十八日千葉縣印幡郡久住村の名望家山岡兵右衛門氏の次男に生る山岡家は代々の豪農にして兵右衛門氏純真篤行の人として一郷に名高し氏は青年二十一歳の時單身大志を抱いて横濱に來り先づ外人に倚り貿易の事に馴れんと欲しドッドウエル商會に入り輸出貿易の事に當り素志の第一階段に歩を進むるを得たり。ドッドウエル商會はハチソン商會の後身なり其前身ハチソン商會は英國人ハチソン氏の經營せる横濱

開港當初の貿易商館にして横濱貿易に於ける重鎮にてありしなり氏は世人の知る如く横濱ドック會社を興し又山下消防隊の建設者として名あり横濱恩人の一なりと謂ふ可きの人氏は其當時より該商會の人となり主人ハチソン氏の信用頗る厚く同商會のドッドウエル商會に移業せるに際し氏も又隨て新商館に入りしなり。

氏の資性純直にして敏俊事に當りて明決少しの遲滯を見ざる所大に外人間に名聲を馳せ一面本邦取引店に對し丁重懇篤を極めたればドッドウエル商會の山岡氏と謂へば先づ好感を以て迎ふるに至りたり大正の震災により同商會の東京に移轉せるに及び氏は此の三十餘年の永き外館生活を退き全く身を貿易界より引き五十七歳にして悠々自適の境涯にあり。

震災前夫人さと子氏を失ひ家庭には愛嬢一人のみありて喜久子嬢と謂ふ芳紀十五歳の才色共に備り今や總州の宗家にあり成田高等女學校在學中たり。

増山周三郎氏

川崎市土手一八



煉瓦製造界の大家にして地方自治上の貢献者として社會に信望聲名共に隆き増山周三郎氏は千葉縣東葛飾郡關宿の人明治十一年一月

らる長ずる及び頭腦愈々牙へ機を見るに甚だ鋭敏毎に人に先て企て人に先て行ひ所謂の機先人を制するの人なり加ふるに地は異數なる新物興の川崎にあり環境の發展と氏の敏腕は相俟つて三日刮目の成功を呈せり此間幾星霜曾て土地會社を興し亦煉瓦製造を研究し經營頗る巧妙を極め能く我邦經濟界の順凶に棹して針路を誤るなく遂に今日の彼岸に達す大正十二年初て御幸村會議員に擧げられしを振出しに永く自治體の爲めに貢献せり。

學務委員、川崎鶴見用水代議員、稻毛川崎二ヶ領用水議員、各常設委員、橋郡會議員、市制準備委員、土地貸借價格調査委員、國勢調査委員等に推薦せられ適く所として擧績あらざる無く現に川崎市會議員市參事會員、川崎市聯合青年團副團長、御幸教育後援會長等に擧げらる昭和三年大典執行に際し特に地方興宴に招かれ町大禮記念章を受け又赤十字社特別社員たり。

本多 亮 造 氏

川崎市南河原町幸町二丁目



近世の政治史はデモクラシーを以つて骨子としデモクラシーとは民衆の政治を意味するものなり即ち権力の強制的命令にあらざりて、民衆夫れ自身の相互扶助による盟約を云ふなりデモクラシーは自治觀念と一致し、自治發展に努めずして、徒らに憲政有終の美を説くは、木に依つて魚を求むると同様愚かしき事なり。かく思索して専心自治觀念の助長に努めつゝある人に吾が本多亮造氏あり。氏の家は祖先より川崎土着の舊家として知られ、連綿と醫を業とし、養父も亦春奄と號して同

地醫界の先覺者たると共に、自治觀念頗る著しく、村會議員、學務委員等の名譽職を兼ね、其の老齡七十三歳に至る迄、自治政への貢獻は枚舉に遑あらず氏は養父の死後、多年の宿志たる實業界に身を投じ手廣く米穀商を營むと共に養父の遺志を繼ぎ政界淨化の大旗を高く掲げ、腐敗紊亂の爲政者を一蹴すべく立ち、自治に盡瘁して寧日なく、衆望を得て町會議員に當選する事三期、市制施行せられるや、最初の市會議員の椅子を占め、尙市參事會員の重職を兼ね、其他市學務委員、徴兵議會支部長、青年團支部長、市教育會幹事、市衛生副組長、水道常設委員等の名譽職にあげられ、今や氏の名望は川崎のみに止まらず近郊に喧傳されつゝあり。當市が市制施行後尙ほ短日月にして諸施設の整然とせるは氏等の不斷の努力に負ふ所が甚大であると聞く。資性謹嚴にして質實、而かも一片稜々の氣骨を存し、政界に馳驅して既に三十星霜常に一貫したる主張を持続し、一度と雖自己の節を曲げたる事無きは稱するに足れり。

水 尾 孝 信 氏

横浜市中央区元町二丁目



日常生活の根底をなす食糧品の製造販賣を爲し、顧客本位をモットーとする吾が水尾孝信氏は、海外奮闘家傳の一言を飾るに相應しき人物なり。氏は寒風荒ぶ北日本富山縣東礪波郡廣塚村の産、代々農を以て家業とせしも、性來、雄心勃々たる氏は明治三十九年福野農學校を卒へるや、廣漠たるアメリカ平原に於て農場經營を目論見、勇躍して渡米したるも、氏の好學心は簡單にそれを許さず、州立カリフォルニア・ポリテクニク學校農科に入

り、文字通り苦學力行涙ぐましく奮闘を續け三ヶ年にして同校を卒業、其後は肥料商を振り出しに凡ゆる辛酸を嘗めつゝ在米する事十有星霜、よくノスタルヂアと寂寥さに堪え遂に努力の結晶として農業組合幹事等になり、尙後益々自己の天地を開拓せんと勇躍せしが、大正十一年十二月實父俊久氏の病篤しとの報に接し、此處に功半ばにして萬事を斷念し久々に懐しき搖籃の地たる廣塚村に歸り、農業に従事せり。間もなく大震災後、上京して銀座十字屋樂器店に勤務し、外國レコード部を擔當せしも、固く意を決めて退店し、當時食料問題の盛んに論議されるに鑑み、令弟正雄氏が農林省千葉試験場にありし關係より、ハム、ベーコン、ソーセイヂ等の製造販賣と生肉販賣を企畫し、獨逸人アクストローマイヤ氏と提携し西銀座五丁目店舖を開き、文化食料品として一般市民の好評を博し、需要日に増すや昭和四年九月横濱元町に販賣所を増設し、新に船舶に食料品の供給をもなし愈々盛況を極めつゝあり。

渡邊寅吉氏

川崎市南河原町七四一



時勢の進運に伴ひ生存競争は益々激しく、射利輕薄の風潮は滔々として社會に浸潤し、人情紙より薄き今日、己れを捨て、人を救ひ、社會を濟ふことを一念とし唯ひたすら社會教化運動に精進せる吾が渡邊寅吉氏の如きは、蓋し近來稀れに見る人格者ならん。氏は幼時より渡邊家の人と成り、長ずるに及び養父八郎兵衛氏の跡を繼ぎ煙草商を業とせり。然し養父は性來身體虛弱にて常に床中に在り、凡ゆる醫藥を試みたるも功績なく、長年灰色の憂鬱に閉ざれり

こゝに於て日蓮信者たりし氏は、最早養父の不幸なる生活を救ふものは精神療法の外に途なしと心中深く期する所あり。自から率先して熱心なる日蓮宗信者に歸依し、偉大なる信仰の力をもつて健康體に還元さすべく一念精進を續けり。斯かる涙ぐまじき氏の念力は徐々にこの不幸な一家に明るき曙光を見出し養父も健康の喜びに浸るを得たりと謂ふ。其後氏の日蓮宗に歸依することは愈々深厚となり自己一生を犠牲として社會教化事業に盡瘁するを以て本願とし町内委員等の公職を辭し、爾來引き續き川崎延命院の社會教化事業に携はり、世人に齊しく慈父の如く仰がれ、その徳を讃へられり。資性溫和にして高潔、美はしい謙讓さを有し、家庭には二男二女ありて、先年夫人を亡くしたるも和氣溢れ滿つ。

原田直道氏

横濱市神奈川區青木町上反町四八一



明治二十一年七月十二日三重縣津市に於て辯護士を業とし曾ては板垣伯の門下に在て政治上に活動せられたる父君の一子として三重縣一志郡久居町東鷹跡町に生る原田家は代々津藩藤堂家の士なり氏の津中學校在學中父君を失ひ中學校卒業に際し恰も日露戰役終結せる時にあり工業大に勃興したるも窓硝子は全部を輸入品に仰ぐを慨し茲に硝子工業研究の目的を以て大阪高等工業學校窓業科に入り同四十三年卒業後岩崎家により計畫せられ輸入防止を目的とせる日本最初の窓硝子製造會社

たる旭硝子の創立に當り直に入社して白國人の下に就き指導を受け後病を以て同社を退き吳瓦斯會社工務部長兼營業課長として聘せらる大正五年日本硝子株式會社の創立に際し保土ヶ谷工場設計建設に従事し完成の後同工場長として勤務す大正九年歐米硝子業視察の爲め約一箇年出張歸朝後同社の大日本麥酒株式會社と合併せしに就き尼ヶ崎工場長として勤務す大正十年製壘術研究の爲め再び歐米各國に出張し在英中宇内第一と稱せらる、自働製壘器の未だ氏の満足する所にあらざるを遺憾とし其改善を始め二年後世界唯一の然かも一頭地を抜く最優の製壘を完成しキリンビール製壘工場として建設し現に同工場長たり。氏は世界に於ける自働製壘機械の權威者たると同時に氏は一面嶄新警世的社會改造家として知らる日本窓硝子工業界の先進人士として斯界屈指の工業家たり公職としては日本窓業協合理事として邦内工業界に寄與する者多し、夫人歌子氏に一嬢あり千鶴子嬢と云ふ。

木全健次郎氏

横濱市中區不老町一ノ一九



横濱に於て輸出向美術品商の飛將軍として名ある

木全健次郎氏は尾州の人昔安房里見氏の重臣に木全大膳正完あり里見家衰ふるや

其子孫尾張に流ると當木全家の祖も此が一族の末流ならんか久しく名古屋中區東橋町に住み門地家として開ゆ父君木全又兵衛氏温厚篤實の人甚だ郷黨に真く徳望ありし人なり。

氏は又兵衛氏の四男にて明治十七年甲申十一月金鯨城頭秋暉耀やぐの下大谷派本願寺別院門畔の家に於て呱呱高く生を此世に享く幼時より商貨熱鬧の中

京に長じ商人を以て人の本職なる如く感ぜる氏は十四五歳の時貿易商を志し神戸に出でて江戸町のウインケレン商會に入り専ら貿易の事を見修す機略ありて商才に富める才能は大に商館の信任を博したり。

後上海に渡り此地に於て爲すあらんと準備中不幸麻刺利亞病の襲ふ所となり病軀を提げて歸り病癒ゆるの後横濱に來り不老町三丁目店舖を構へ艦船賣込商を開けり此處に於て氏の才能は遺憾なく發揮せられ創業幾何もなく商勢の進展大に見る可きあり遂に美術品商館賣込と一般貿易商を兼ぬるに至り爾來奮闘の限り努力の限りを盡し苦辛十年の功茲に空しからず今日の大成を來せり。

氏は斯くの如く活躍の人にして日々繁忙を極むるも一面には多命多趣の士にて就中競馬撞球に深き興味を有し且つ其道に造詣深かしく聞く唯だ遺憾なるは家庭の寂寥にあり賢夫人にして精練の妻たる令夫人昨四年病歿せられ一女子嬢名古屋の生家にあ

渡邊彌一氏

横濱市杉田町門前



刀圭家中篤行家として知られたる渡邊醫院主渡邊

彌一氏は千葉縣印幡郡佐倉町の人佐倉は下總の舊邑なり歴史的に將も秘史的に古

來著明なる事績を存す印幡沼の南にあり成田不動の西にあり築鷲將門の城趾遠からず義民宗吾の靈社に近し而して幕末の傑物堀田氏の舊城市なり渡邊家は代々堀田家に仕へ其近臣たり父君の時王政維新に會し家祿返還の際に身を官途に入れ熊ヶ谷裁判所書記を奉じ後秩父裁判所書記に轉じ嚴正の人として聞えたり。

氏は明治元年十一月二十三日世は乾坤一變して伏見鳥羽の會戰に始まり皇后冊立に終るの年を以て生れ父君轉住の間に長ず幼より穎悟にして向學の心厚く家勢復興の志熾なるも當時官吏の常として家計甚だ豊かならず茲に苦學力行の已むなきにあり父君秩父町に在住中同地の醫家横田貫一氏の藥局生に入り不斷の勉學を積むの傍ら極度の節約をなし膽石の給與金より毎月金五圓の蓄積を目標として血涙の裡に明治二十三年を迎へたり。

多年苦酸の結晶物たる二百圓の金を懐にし其年東京に來り當時本郷湯島に在りて多數の醫生を收容せる長與專齋翁經營の濟生學舎に入り螢雪年を積み明治三十二年同校卒業するや直ちに醫術開業試験に合格し醫籍の登録を受け宿昔の志茲に酬ひられ始め燈臺視察船の船醫を勤め越へて明治三十五年四月當市街道筋に開業し漸次患家の信頼を受け門戸大に擧る震災の後更に現杉田町に移り遂に今日の盛を成すは一に氏の技量と人格の傑出に因る。

平野喜四郎氏

横浜市神奈川區子安町二八七九



子安は横浜市中最も古き村の一なり平野家は其草創の家とも稱す可き舊家にして且つ代々の豪農として今代に至り四圍一帯の發展に俱ふ土地の實價年々歳々異常の昂騰を以て資産自然に加殖し大地主大資産家として比す可きなき盛運に達せり現主を平野喜四郎氏と云ふ明治十五年壬午秋九月十五日を以て生る。

積善の家に餘慶あり家既に富み人正に殷なり人一度其門に入り豊富に平和に圓滿なる家庭を觀ては誰か日本固有の家族制度を否定し得る者あらん父君兵

藏氏母堂と云氏共に老齡を以て健在せられ一家崇敬の的となり主人喜四郎氏夫人はつ子氏温篤圓滿の主入主婦たり此慈祖父慈祖母の膝下に於て此の賢父賢母の指導の許に健全なる發育を遂げつゝあり長男豊吉君次男彦八君三男金作君四男勉君五男進君六男茂君皆家にあり他に長嬢は既に嫁し次嬢出て他家を繼ぐ實に幸福の神は氏の屋上に舞踏するとや謂ふ可し茲に同家永代の光榮は 皇太后陛下 今上陛下の御命により神奈川縣の選定を以て昭和元年十二月同四年六月の兩度に涉り神前御供の園藝品献納の命を拜し宮内省より御嘉納書謝狀を賜りたる一事なり其特農家たるは世の知る所にして青山農事試験所埼玉千葉兩縣の農事試験所其他全國より注文殺到しつゝあり公共上に於ては現子安衛生組合監事、子安園藝組長として地方開發に盡瘁せられつゝあり又曾て子安溝下耕地整理に於ては組合長代理會計係となりて功績甚大なる者ありたり。

平野 壽氏

横浜市神奈川區蓬萊町一丁目一



中區蓬萊町一丁目一番地に堂々たる店舗を構へ食料品を販賣し其名全市に聞えたる平野商店主を平野壽氏と謂ふ武州八王子町の人同商店は大正元年の創立にして食料品雜詰商店を開始し以來堅實なる商策に依り漸次隆盛を來しつゝありし所大正十二年の大震災に會し店舗及商品の全部を烏有に歸し非常なる打撃を蒙りたる耳已ならず次息を奪はれ一時消沈の意氣にありしも徒らに挫折するは次子の靈に酬ゆる道にあらずと銳意死力を盡くして營業の挽回に努力し誠實なる取引振りは一層

顧客の信用と同情とを博し以て今日の隆盛を來したるなり。現在の取扱商品は主として食料品雜詰洋酒類味の素等にして料理向のオイル物に主力を注ぎつゝあり仕入は北海道、金澤、京都、大阪、廣島等の一流製造家より直接契約によりてなし尙ほ近時天津上海方面より支那天産物の直輸入をなしつゝあり。販賣先は本市内外、東京、東北地方、長野方面、東海道筋の同業者料理業者等にして日本郵便株式會社、横須賀海軍工廠購買部の用途を勤め其他社外船舶諸官廳百貨店の納入をなし支那、南洋、米國等に雜詰輸出をなしつゝあり將來とも本邦特産雜詰類の海外輸出に一層の努力を盡さんと期せらる。氏は明治二十三年二月二十日の生にして父君を竹治郎氏と謂ふ氏は其次男也家庭には令夫人はる子氏とあり保壽君榮次君實君富美嬢貞子嬢の三息二嬢あり春風常に堂に滿つ。

横森 信治氏

横須賀市若松町二二



總武本線佐倉を過ぎて成東に走るの中間八街驛あり此地下總國
印幡郡茲に盡
んとし上總國
山武郡將に來
らんとする國
境近き一市邑
千葉縣印幡郡八街村は我が横森信治氏の故郷なり氏の
生家は中山氏其遠祖は甲斐の人剛勇人に秀で武名
遠近に高し初め武田機山公に仕へ甲信の野に連戦す
武田氏亡ぶるや家臣四方に散す後徳川氏に事ふ者甚
だ多し東照公又深く此を遇す氏の祖も其一人なり爾
來一連三百年以て父君中山久次郎氏に來る久次郎氏
諱を義久と稱す氏は其次男なり。

先考は維新に功あり明治新政府の成るや退いて殖産の事に従ふ官に請ふて畑地壹萬坪の下附を受け千葉縣の荒野を開墾すべく大に力を盡せり後村會議員となり町會議員となり區長となり學務委員となり終始自治の發達に盡す所ありしが昭和二年遂に歿せらる。

氏は明治十八年乙酉「數ならぬ身とも思はず日をかさね暮れ行く頃の春惜日」と歌はれたる三月三十日其家に生る明治二十四年十一月横森家に迎へられ其姓を繼ぎ先代の業を受け四圍の發展と機運の向上に順じ漸次業務を擴張して支店を池の端、阪本、大津、安浦、金谷等に置き木店を立花本店と稱し男女店員二十五人を使役するの繁昌を呈せり而して氏は社會の信用極めて厚く商工會議員、若松町會長、同業組合理事、在郷軍人町顧問等に推舉せらるる家庭には夫人ます子氏内部の指導に當り光三君横須賀中學卒業千代子嬢大仁高女卒業共に家に在り他に新三君貞利君あり。

平野 吉五郎氏

横濱市神奈川區子安町二九八二



平野家は子安に於ける最豪の舊家にして代を累ぬる十數世年を
閱みする三百
年連綿正系相
傳へ今日に及
ぶ殊に先々代
長作氏の世に
當ては子安隨一の勢力家にして平野家榮耀時代とも謂ふ可かりしなり徳川幕府爛熟の極に達し華美を誇る諸大名東海道筋より參勤交代の途次此宿を過ぐるに神奈川問屋場として常に勤役し威勢近郷に比す可くなし子安以西寺尾一帯は全く同家采配下におりて人材共に備はり徳望州内に冠たり。
頻年東海道沿岸に風水害多く被害甚大なるを憂ひ

飯田森堤小宮田邊の諸家に謀り防波防水工事を幕府に願ひ工を起し落成したる結果唯だ風水害を除きし耳已に止らず廣大なる新生地を得るに至る今の俗稱「新開地」即ち是れなり此の如き赫灼たる功績の人なると共に頗る人情に厚く救済の事あれば率先財を惜まず奔走して倦ず徳風今日に傳ふあり。

先代又長作を襲名し先々代の威望を缺くも能く村内の周旋役として種々の業績を遺し明治三十九年歿せらるる現主吉五郎氏茲に家督を繼ぎ祖來の遺風を受け温雅高潔の人格者と稱せられ深く公共の事に盡さる町内衛生委員、青年團評議員、學校後援會評議員、修養青年團長等に推され又横濱市農會督勵委員、土地區劃整理副組長、農事調査委員に任命せられ能く好績を挙げ時の政府より功勞賞を附與せられ眞に積善の家と謂ふに足る。

氏は明治七年の生にして今年五十七歳の圓熟せる紳士なり。令夫人をひち氏と云ふ。

西森竹記氏

中部平塚町新宿一五三四ノ八



計理士西森竹記氏の生家西森家は天下の名流球磨川のある所熊本縣八代郡宮地村の舊家なり其祖細川侯に仕へ肥後藩士にして末裔に篤行盛名ありし西森子之吉氏あり即ち氏の父君にて氏は其次男なり明治丁酉三十年八代海上不知火光の八月十六日其邸に生る。

幼時より頭腦緻密明晰にして衆童と群を異にせり縣立八代中學校卒業後復を東京に負ひ日本大學法科に學び大正十二年其業を了へ更に同大學高等専攻科に入りて二ヶ年經濟學を研究せり大正七年警視廳に

出仕し執務中公務の爲め傷痍を受け大正九年遂に其職を退く。

同年京橋區三十間堀に本店を有する大日本漁業株式會社に入社會計主任として大に將來を矚目せられたるも偶々大正十年破産するの已むなきに至り茲に氏が整理一切を一身に引受け無事完了を告げ手腕漸く世の認むる所となれり時に京橋區播磨町に本店ありし備後製鐵會社整理に當り其整理委員に選定せられ松屋町の破産事務所に於て孜々其事に當り遂に圓滿なる解決を與へ茲に氏の力量は一般に喧傳せらる昭和三年計理士の資格を得て一般會計事務取扱を開始し營業科目として會計に關する検査、調査、鑑定、證明、整理、決算、計算立案等、更に之を細別すれば破産管財人、和議管財人、和議整理委員、検査役、強制管理人、信託管理人、公證人に依る管理人拜命、銀行、信託會社、保險會社、無盡會社、信用組合等の検査官拜命等は是れなり。

新井國五郎氏

横須賀市小川町二一



鐵路中央本線に依り「出づる峯入る山の端のちかければ木曾路は月の影ぞみじかし」木曾谿谷を潜りて天下の絶勝所謂る木曾八景を車窓に眺めつゝ東北より南下し往昔木曾冠者が都攻めの經路を辿り信濃の國境落合川に入れば惠那郡なり美濃第一の高山海拔七千四百尺人一度頂上に上れば近江の淡湖伊勢の静海を下瞰し得る惠那ヶ岳山下は即ち我新井國五郎氏の生地なり。

氏の舊姓は三浦氏後新井家に養はれ其姓を繼ぐ三浦家は土地の豪農にして代々素封家を以て聞え質

朴強堅は山國美濃人の通性なりと稱せらるゝも三浦家は殊に世々篤行家を聯出したるを以て近郷の親敬を受く氏は嚴父三浦鐵次郎氏二男にて明治十一年春三月五日木曾路の入口近き居村に於て此世に第一聲を擧げたり意志剛健頭腦明晰幼より算數に巧なり長じて統系に興味を有す正規の學歴を経て横須賀海軍工廠會計部勤務中明治三十九年新井家に入り養嗣子たり新井家は當時の資産家にして借家を以て常業とせり。

後工廠を退き川崎富士製鋼所に入りしも大正八年退社して直に官納業を營む現に旭木材株式會社、東京阿部商店、丸中商店等の代理を兼ね主として海軍工廠建築部納入商たるの傍ら一般建築材料の販賣をなし横須賀有数の堅實なる店舗として信用あり又大腹にして人を容るゝの雅量あるを以て氏に接する者にして惡聲を放つあるを聞かず唯だ家庭は甚だ淋びしくサワ夫人の外マサ嬢一人のみ。

遠藤 醇氏

中郡須馬町須賀一、二〇五



氏は明治十九年四月高座郡羽鳥村耕餘塾に入る一定の學科を了り、更に進んで横濱英和學校に於て英學を修め、東京神田專修學校に入るも病の爲め退學の餘儀無きに至れり、氏夙に心を公共事業に注ぎ、明治卅四年四月須馬村會議員に選ばれ、在職廿八年自治改善の功により昭和二年三月村會の決議により特に表彰せられ、銀製花瓶及び銀製貰入壹個を受く、而して教育方面に於ては學務委員となり横須賀小學校復興委員長、奉安所復興委員長に選ばれ、或ひは私立育英學校創立發起人と

なり、衛生方面に於ては村内に衛生講を設け、資金を醸出し關某をして醫學を修めしめ、開業をなさしむ、或は衛生組合を組織して組合長となり、水産上に於ては中郡水産會代議員に選ばれ、遂に大日本水産會總裁博恭王殿下より同會評議員を命ぜられ、近來に在ては中央水産協會評議員に選ばれたり、或は漁業組合中央會發起人となり之れが理事長に選ばれ、更に進んで本縣支會理事長に挙げられたり、其他青年團を組織し、同時に顧問に推薦せられ、平塚銀行を創立して之れが相談役となり、大磯稅務署管内所得稅調査員に選ばれ、横須賀郵便局設置の請願をなして許可せらるゝと同時に、三等郵便局長を拜命し、平塚須馬兩町合併の機熟するや、合併交渉委員に選ばれ、續いて平塚町政協議委員を囑託せられ或は國勢調査委員、漁村調査委員、家屋稅調査委員等に選ばれる等、凡ゆる公共事業に參與せざるなく、其地方に貢獻する所蓋し尠少にあらざるなり、故に各方面より賞狀感謝狀、表彰狀、或は金銀盃其他の物品を受けること枚舉に遑あらざるなり。

東 又 吉氏

三浦郡田浦町三ノ六



自分の力に依つて社會的地位を築き上げたる人程世に尊きものなし。我が東又吉氏が今日迄辿り來つた血と涙に滲む過去の奮闘史は、慥かに現代青年の龜鑑たるを失はず。氏の出生地は福井縣金津新町にして、父君正次郎氏の三男なり。幼少の頃より零落の底に沈みし家庭は到底氏の學資を續くる事は至難であれり。従つて氏は僅か十二才にして他家へ奉公に出て自から運命を拓かねばならぬ境遇におかれ、初め醬油店に奉公し其後機屋、指物屋等を轉々し、十三才の秋、志を立

て、大阪に赴き、塗師丹後文藏氏の許に弟子として住み込みめり。氏が漸くこゝに至る迄凡ゆる辛酸と云ふ辛酸を嘗め盡せる感じあり。然し不撓不屈覺れて後やむの精神は氏の滿身に熱と力を常に赫々と燃やしたり。斯くして十六歳の秋再び京都にゆき流轉する事半ヶ年にしてペンキ職となり生活の資を求め、大正三年まで大阪に止まりて血みどろな苦闘を繰り返したり。大正四年一月横須賀市田浦町に工事の爲め赴きたるが其後深田大門に居住し一般塗工請負業を開始せり。飽く事なき奮闘は漸く發展の緒につき各官廳等の塗工仕事を請負ひ、その確實なる仕事振りはいたく世評を博くし、同地に於て重きをなして來たれり。かの大震災に際して損害を見たるも熱と力の人たる氏は鋭々として業務に精進し、店舗を現住地に移し倍心の隆盛を見るに至れり。氏は又大木教を信仰し、當地支部長として修身齋家の道を説き我國風教上に致す處頗る大なるものあり。家庭には夫人との間に一子ありて常に和氣に満てりと聞く。

高田文哉氏

横浜市保土ヶ谷區神戸一九四〇



昨今智育偏重の教育は體育德育を閑却するに至り遂に幾多の社會的缺陷を生ぜしむるに至れり。然るに之れが社會的覺醒を呼び起したる體育方面に於て寧ろ反動的現象を示したるが德育方面にあつては未だ黎明期に至らぬ恨みあり、此際に力の限りを盡くし黎明の鐘を打つ人に吾が高田文哉氏のあるは欣びとする處なり。氏は大分縣宇佐町安部家に生れたるも故あつて高田家の人と爲り長ずるに及び郷里の師範學校を卒業し、初等教育に従ひしも、學究心に燃ゆる氏は一ヶ年にして之を辭

し、遠々東京に出て高等師範學校に入り螢雪の功を積み、明治四十三年卒業後は直ちに埼玉師範學校に聘せられ、大正三年和歌山師範學校に轉じ親しく教導の任に當り、大正八年松本師範學校の創立せらるゝや招かれて同校に教鞭を執り、多年研究せる學識を以つて望み、誠實勤勉よく指導者としての重責を果すことに盡瘁したるが、兎角理智偏重に傾きたる教育方針を嗟嘆し、遂に心ひそかに感ずる處あり大正十三年夏其の任を辭し靜かに自己の修養に努むる事暫時然して育英界に對する熾烈なる希望は永き沈黙を許さず、意を決して來濱市役所に入り指導員になり、昭和二年五月、現保土ヶ谷小學校長として赴任さる。更らに市立實科高女、保土ヶ谷家政女學校の設立さるゝや仰迎されて右校の校長を兼ねるに至れり、「正しく、優しく、強く」の言葉を標語とし、學徒の人格陶冶に重點を置き、智育、德育、體育の各平行する事に多大の腐心を拂へり。實に氏の如き人を縣下教育界に見出した事を凡ゆる機會に際して推稱すべきものなり。

雨宮 要氏

横浜市中西區本牧二五〇〇



聖キリストは、貧しき者は幸なりと云へり。その意味は必しも貧乏を謳歌したるものにあらず。貧しき者のもつ不退轉の勇猛心を祝福せるものなり。この生活戦線を突破せる大勇猛心をもつ者のみが成功の彼岸に達し得られるものなり。吾が雨宮要氏はよく刻苦勵精萬難を排し今日の位置を得たり、即ち氏は不退轉の勇猛心を持つ一人として甲斐細の本場産地山梨縣八束村の産、幼少の頃より家事に親しみ、獨立獨行の志は培はれたり。十五の春を迎ふるに及び、雄心勃々なる氏が空しく

この山間の僻地に止まり得ざりしは當然なり。明治三十三年貿易中心地として殷盛を極はめたる横濱港に走り、商務見習として柏木商會に入り、次て今井商店に移り生糸賣込みの實務に従へり。此間氏は具さに世の辛酸を嘗めつゝ、主家に忠勤を抽んで、幾春秋を奮闘裡に過せり。明治四十三年、自己の將來を顧慮し、横濱市山下町なる同業者間に著名なる、ソル・ザール・ドルフ商會に轉じ、生糸買入係りを擔當し熱心誠實を以つて衝に當り、商會主の信望を博したるものなり。昭和四年一月同社がチャールス・ドルフ商會と改稱されるも尙引續き勤務し、多年の實地經驗による該博なる知識を以つて八面玲瓏たる才腕を發揮し、着々成果を收めたり。同商會生糸買入方に關しては一に雨宮氏の方寸に依り決定を俟つべき實に氏の功績たるや甚大なり。齡未だ少壯、春秋に富む氏の向後の活躍は齊しく囑望さる。趣味として書畫を愛玩し、夫人きよ子氏との間に一男二女あり、長女は横濱高等女學校在學中、次女は本牧小學校にありて各々才媛の譽れ高し。

柳原常吉氏

横濱市中區舞天通一丁目六



柳原家は栃木縣下都賀郡日光町に於て代々雜貨商を營む氏は先考常吉氏の長男として明治二十七年三月二十七日を以て生れ資性極めて勤直且つ忠實なり其半生は奮闘の歴史なり血戦の傳記なり先考在世中は宇都宮市立商業學校に通學し平和なる家庭に長ぜしが不幸半途父君を失し母堂三人の子女を擁して孤立の状態に在るを視て孝心厚き氏は茲に退學して母を援け又東京に出て商業に従事しつゝ困苦と戦ひし時偶々輻重輪卒に入營せり此間家に紛糾ありて氏は物心兩面に苦杯を嘗めり。

退營後神戸北狭通雜貨輸出商岸田洋行に入り三ヶ月の後上海詰となり歸朝後山下町美術雜貨絹物商クムエンドコモール商會或は食料品商カルノー商會に於て見習の後海岸通四番館の一室を領し繪畫の陳列をなし同時にブランドホテル内に賣店を經營するに至りたるの時大正十二年の大震災に會し積年の汗脂水泡に歸し一時夫人を伴ふて静岡名古屋の間を流浪の後神戸に入り日光商會に救はれて此に入り本性の勤直と熱心を併せ献身的努力を同會に捧ぐ同商會の横濱支店を設くるや即ち歸濱して其事に當り成績見る可きあり昭和三年合資組織となりし時歸神を促されしも苦心の結果好況に向ひつゝある横濱支店を去るに忍びず止つて尙ほ勉めつゝありしに同四年解散せらるゝに當り犠牲的整理を完了し唯一の信用を資本として開店以來才能性格努力經驗相俟つて實に未だ期年ならず一躍今日の柳原商店を呈せり賢夫人ヒデ氏子なしキヌ嬢を養ふ。

白牡丹 廣井萬之助氏

横濱市中區伊勢佐木町



氏は明治十一年三月廿六日相州小田原町幸町茶角紺屋業廣井德平氏の長男に生る廣井家は代々小田原に住し名門の間に高く殊に先考德平氏は同地に於ける著名なる徳望家に於て縣の門徒にして法義篤信の故を以て前きの門主大谷光尊上人の御覺へ目出度膏て明治十八年五月十六日小田原町光圓寺境内に於ける中西某の大刃傷に依り家田四人遭難の際忝なく自宅佛壇に安置したる阿彌陀如来の御尊影を始め奉り聖德太子見真大師慧燈大師各御尊像の御身代りに依り遭難家族一人たり共身に寸分の負傷もなく此危難を免れ得たる世にも稀なる不思議の事蹟實に明治聖代に於ける一大奇瑞とて普く學者を驚かし信徒に隨喜渴仰せしめたる稀有の信者なり先考德平氏始め遭難家族今既に物故せられたるも御尊像は遺族の守護し奉る所に於て五十年來猶未だ參詣者の足跡を斷たずと云ふ。

氏は斯る家庭に人となりしを以て幼時より神佛敬信の念厚く頗る勤勉忍耐の力強く十四才の小童より満十年間東京日本橋白牡丹分店山中氏方に於て精勵一年間の如く同家を辭するに及び銀座尾張町惣本店より名譽ある白牡丹の商號を分與せられたる事同氏の性格を尤も雄辯に證明して餘りあり已にして横濱に來り中區吉田町に現業を開くや當時競争尤も激烈を極め茲に又十數年臥薪嘗膽只管ら店舖の基礎を固めつゝ風雲の時至るを待つ偶々大正四年十二月伊勢佐木町の店舖を得るや時代の潮流に乗じ多年の經營を發揮し忽ちにして大轉開をなし店前常に股賑を極め斯界を風靡し商名喧傳せらるゝの時大震災火災の襲ふ所となりしも直ちに復興に着手し新機運の勃興を捕へ一路勇進し年を経ずして舊態に復し更に竿頭を邁進し數地狹隘なれ共鐵筋コンクリート建の店舖を改造し百年の計を起つると共に猶一段の光彩を添へんと畫策しつゝあり氏は斯る奮闘的の人士たると共に温厚篤實なる君子的紳士にして就中精神修養に没頭し親戚知己は更なり商取引者間にも同氏の徳に感銘せざるなく殊に店員の養成法に於ては氏獨特なる技の致す所や現在二十年以上勤続する相誠め十年十五年の長年者以下十名以上の勤続者相誠め十年丸となり真く店主の意を體し奮勵努力而も敏捷にして客を呼び親切に客を迎へ更に商品豊富に相誠めして界稀に見る成功者なり市をなし高評至らざるなく賞賛する所なり今や業なり名達けて餘生を春子夫人長男徳平氏と共に磯子に送られつゝあり。

井上嘉七氏

足柄下郡足柄村菰



我邦棉花消費高は世界的高位に在り昭和三年統計の示す所に據れば實綿及繰綿の輸入額五億四千九百萬圓に上り輸入總額の殆んど四割近くを占むるも之れ國內製産の隆盛を語るものにして其大半は綿織物乃至莫大小製品綿織絲として輸出せらるゝ總額約四億一千萬圓とすれば國內の消費額は約一億四千萬圓を餘儀無くせらるゝは天の地恵を與へざる日本に於ては已むを得ざるならん此重大なる貿易に従事し或は消化の任に當らる諸店諸會社の責任や蓋し重且つ大なりと謂ふ可し。

報德製綿株式會社は今より五十七年前明治八年先代嘉七氏の個人經營として創始せしに端を發せる稀有の老舗にして創業以來時に消長ありと雖ども概して順調の經路を辿り明治三十二年現主嘉七氏父業を繼承するを機として完全なる機械工業となし爾來熱心なる研究の許に品質の改善と能率の向上に努力の後組織を株式會社に變更し氏其社長の椅子に就き取締役兼工場長として令弟常三氏其任に當りしは實に大正十五年二月十九日に在り原料を支那棉花に仰ぎ今や一個年製産高三十五萬圓に上り供給區域は東京神奈川千葉茨城等に亘る尙ほ將來の發展を期しつゝあり。

氏は明治十五年九月小田原町の名家に生る業務の傍ら公共事實に従事する所甚だ深し現に小田原製綿組合長、小田原實業聯合團常任監事たり夫人を眞子氏と云ひまつ江とく子の二嬢あり共に小田原高女の出身にして琴と生花に興味を有せられ頗る堪能なりと聞く。

内山忠太氏

小田原町新玉町二四七



内山氏の祖は小田原藩主大久保家に仕たる家臣の降て商に歸したるものにして小田原生粹の舊家なり嚴父を内山金次郎智明氏と云ふ氏は其長男にして明治十二年九月十二日に生る小學校を卒業するや直ちに三井銀行小田原出張所を始とし横濱支店及横須賀支店等に精勤し謹嚴直實を以て用られ徴兵適齡の故を以て退社し後東京に出て他日雄飛の準備知識を得べく實業家に就て實修を積みたり。

明治三十三年八月先づ天津に渡り從兄弟平井精八

氏の經營せる泰昌洋行に在る二年間其間多く北京に滯留し人情風俗商況等に知悉する所あり茲に獨立して利貞洋行と號し雜貨商を主とするの傍ら稅關貨物一切の取扱をなし別に利貞洋行印刷部を設け會計を別にして兩々相助け茲に著々發展の地歩を進め商務漸次繁劇を來し遂に印刷部は六年の後休止するに及ぶに至り現に同行は同地に於て旺盛を極めつゝあり彼の大坂藤田組の石綿事業に就ては多大なる援助を與へ便益を計りたり。

日露戰役に際し清語通譯の試験に合格したるも病氣の故を以て辭し隱密の裡些か奔走する所あり歐洲大戰に會し多額の鐵材を内地に輸入し以て國家的に參功する所大なる所あり此際氏の舉動が實際に獻身的の活躍を繼續したるは氏の尙快とする所たり今東洋生命保險會社代理店の委託を受け優真なる成績を揚げつゝ將來を期待せらる。

母堂かね刀自八十歳の高齡なり夫人とし子氏に二男二女あり共に未だ幼なり。

花岡政夫氏

横濱市中區辨天通



人生意氣を崇ぶ、意氣の鬪ふ處天下何事かあらむ
意氣の前に權勢なく意氣の後に貧賤莫し勝麟太郎貫來る春餅を寒月牙ゆる兩國河に投じて奮起し、岩崎彌太郎母の與へたる藁草履を穿ちて大臣邸に出入するを愧ぢざりしと聽く、男子須らく此の意氣なかる可らず。我が花岡政夫氏は所謂意氣に生くる強き明るき生活に終始せんとするの人たり。
氏は東京麴町の産にして父君を讓氏と謂ひ其長子として明治十八年紅葉燃ゆる秋十月一日を以て生る幼冲にして夙に聰明穎悟、而も生粹の江戸兒が有する豁達淡快の長所を遺憾なく藏する氏は長ずるに及

んで益々天資の英才を顯はし、明治四十年三月志を保險界に伸ぶべく帝國生命保險會社に入られ庶務に在る事三年の後會計課に轉じ更に募集課に再轉されて愈々斯業の第一線に立ち、猛烈なる募集陣を往來して茲に傑出せるその才腕と純真なる性格を反映せしむるの好機を獲て、竟に優秀なる業績を上司の認むる所となり嶄然出張所長待遇を以て酬ひられしが大正十一年十一月萬歳生命保險會社の懇望に應じて同社の人となる。大正十二年一月一日同社東北支部長として同地業界に赴くや、忽ちに籍甚なる喬名を謳はるゝ巨績を貽して一躍萬歳生命の寵兒となる。之れ氏が居常、現實に強く生くるの主義を奉じ事に衝るや百難來るも我往んの氣概を以て奮戦力闘さるゝが故なり。而も斯の如き飛將軍たる氏の一面には拘すべき敦厚なる情義を有され、其の采下を愛する情意は又克く敬慕渴仰される所以なり、延いては相倚り相扶けて一致協力精進の一路を辿り得る徳性を具備される氏は實に多幸なる將來を有するの人の言ふべく、大正十三年秋、萬歳生命と日華生命の合併成るや倍々氏に俟たるゝ處多きものあり、大正十五年二月日華萬歳生命の横濱支部長として榮任せられ、能く天賦の光彩を發揮されつゝ、以て今日に至れる人たり。

上郎清助氏

横濱市中區南太田二二三



上郎清助翁は外船類年近海に出没し國事漸く多端を告げ天皇加茂社に親願あらせられ公卿百官盡く扈從す將軍家茂諸侯を率ひて前後を警衛せる近古以來の盛儀ありし文久三年癸亥秋十月其邸に生る上郎家は古來代々一郷の名族にして富豪を以て知られたり吉田三郎兵衛氏の令弟にして前代議士磯野庸幸氏上郎新二郎氏等の令兄なり上郎幸八氏の養子となり明治三十八年分家せらる。
氏は幼時より夙悟頭腦頗る明晰にして果斷に富み又向學心に強く大に將來を囑望せられたりしが明治

二十三年東京帝國大學政治科を卒へ後實業界に入りしより果して氏の計畫したる所其正鵠を誤らず未だ曾て蹉跌あるを聞かず太田醬油株式會社を創立せしを始めとし幾多會社の重役に列し非凡なる商業的の負擔力は衆目の驚嘆を曳くに足るものあり。
地方公共事業に携はつては市會議員に擧げられ頗る命名を博し都市計畫委員として横濱市百年の設計を建て、傾倒斡旋する事多大なり又横濱地方委員として一般民衆の福利と健康を増進するに盡瘁し進んで神奈川県會議員に選ばれて縣治に參與貢獻する所多く昭和二年貴族院議員となり遂に一國上院の議に參するに至る翻つて實業方面には多額納稅者たり商業會議所議員たり上信銀行、東都冷蔵製氷、横濱市街自動車、横濱製藥工業、大安生命等の諸會社重役の席に在り眞に實業界の偉人たり。
夫人をやす子氏と謂ふ上郎長八氏の女なり長男達君次男清君の外二嬢あり共に嫁せらる。

副島四郎氏

横須賀市湊田町二七一



黄植成列隨隊間、南望平々是海灣、未至榮城三五

驛、忽從林際
得温山と是れ
頼氏子成の肥
前に入り將に
佐賀に到らん
とするの咏に

して恐くは佐賀郡途上の作ならん宛然身の行旅の間
にあるが如し氏は佐賀縣佐賀郡兵庫村の人なり兵庫
は佐賀の城外にあり。

副島家は州内屈指の名門にして代々地方の富豪な
り氏は明治十三年庚辰六月六日副島家の四男に生る
幼時より頭腦頗る明晰意志甚だ剛毅にして攻學の志
に厚し周囲の人深く其將來を期囑せしに長ずるに隨

ひ英明の資性益々著はれ夙に熊本商業を出て更に高
等學校を経て帝國大學に入り明治三十九年秀績を以
て同造船科を卒業し茲に幼時衆人の期待に違はざる
表徴の片鱗を露はしたり。

卒業後海軍省に職を奉じ明治四十一年横須賀造船
所に勤む同年支那に派遣の命を受け高等師範學校教
授として積年蘊蓄の學識を以て彼地後進の子弟を啓
蒙薰育する事あり大に貢獻を奉じつゝありしに際
し同四十五年三月第一革命の起りし爲め歸朝後再び
造船所に入る大正七年海軍省の命に依り造船術視察
の爲め米國に派遣せられ此地各地に於て實修見學す
る所ありて大正八年歸朝せられたり。

氏は驚く可き攻學家たると共に驚く可き研究家に
して造船技術に對する造詣甚だ深く今や我邦造船界
の權威者たる一人なり而して其趣味は田園生活に在
りて頗る靜肅を好まる男子なし一嬢房子氏に昇氏を
迎ふ房子氏は東京賀生學院出身にして昇氏は熊本醫
大出身なり。

水島長次郎氏

横濱市中區住吉町三ノ三六



花柳界の異狀に發達せる住吉町は由來藝妓の勢力

偉大にして花
柳病豫防法の
施行せらるゝ
や彼等は恬然
としてこれに
服する模様な

く當局者の幾多の計劃も空しく識者の深憂するところとなれり此の時水島長次郎氏自ら健康保險組合を組織し同組合長となり又管内藝妓組合副組合長として該法令の徹底を期せんが爲め其の温情溢るゝ人格と眞摯なる態度を以つて人毎にこれを説き著しく該病の減少を來たさしめたり其の効たるや洵に甚大なりと云はざるべからず氏の實家は川崎市堀の内十三

屈指の素封家にして名望家なり明治八年九月廿三日
出生、十四歳にして其の俊敏なる性情を俠骨漢とし
て譽れ高かりし前市議早川覺兵衛氏の認むる處とな
り南仲通の同家に寄寓し教育を受けたる長ずるに及
び卓拔せる頭腦と強固なる意志を以つて株式仲買を
始め其の慧眼圖に當り大いに成功す茲に於てか三十
五年永年の經驗と抱負とを以つて獨立開業者々とし
て堅實なる地盤を築き取引業界の惑星と謳はれるに
至れり然れども其の間幾多の不運は廻り來つて蹉跎
又蹉跎閉店の悲運に遭遇せる事も一再ならず遂に今
日あるに至れるなり。

同氏は水府流水泳の達人として令名あり同氏の門
下より國際水泳競技會に數名の選手に送れる程なり
氏の崇高なる人格は表面に立つを好まず常に裏面に
あつて社會公共の爲めに力を致す洵に得難き人物なり。
されば第八區の區劃整理に際しても其の完成に
努力し其効少ならざるを認められ市長より木杯を
贈られたり現に青年團理事として團務を處理す。令
息平次郎氏は川崎市役所に勤務し水泳教師なり長女
は八十子次女を君江と云ふ。

山下 昌義氏

横濱市神奈川區青木町三五七



氏は山梨縣東山梨郡鹽山町の故家廣瀬義平氏の二子として慶應三年六月廿八日を以て生る郷里窪田習齋先生の門に遊び漢學を修め夙に獨立の精神を以て司法官たらんと志し、奮然東上し横濱裁判所雇となり、法學を研究する事六年、代言人試験に合格辯護士となる、實に明治廿四年氏の廿五歳の時なり、恰も辯護士法制の布かれたる時にして、氏率先辯護士會を組織し自由黨に入り板垣伯の幕下にありて、自由民權の説を鼓吹し、武相支部幹事として大いに活躍せり、廿五年小田原の山

下氏剛氏の養子となり、山下氏を昌す、辯護士開業三ヶ年にして司法官となる、爾來廿餘年其間氏の最も得意として特筆大書すべき事は、京都地方裁判所次席検事任職中、政界革新運動を起す近衛公を會長とし木下京都帝大總長大林府知事各宗管長と共に公德會を興し天下の名士を糾合し大運動を開始したる事は是れなり、偶々日露の戦争の勃發に阻まれるも、猶ほ第一流の學者實業家を網羅せる學術實業懇話會なるものを組織し、冷泉伯を會長とし、氏は副會長として政治教化社會革新運動を起し、天下に咆哮したる事にして、恰も氏の三十歳の時なり、其後函館控訴院検事を最後とし勇退官を辭し、横濱に來り法曹界に入り其地の重鎮として活動今日に至る、其他諸方面の辯護士顧問と稱せらるゝ耳已ならず現に平沼銀行の監査役たり夫人ふい子の間に二男あり長氏久氏は法政大學出身にして農工銀行に、次子信庸氏は帝大卒業後日本生命保險會社大阪本社に奉職せり、氏の趣味は謠曲にして暇あれば則ち吟唱樂めりと云ふ。

川島 正雄氏

横濱市鶴見區鶴見町七〇七



三十二歳の若年にして帝國製麻株式會社横濱支店長たる川島正雄氏は横須賀市稻岡町一〇四寶谷利八氏の三男に生れ大正十四年川島清藏家を繼ぎ川島姓となりたり。横須賀中學を卒業するや直ちに實業界に入り東京帝國製麻株式會社に入社、大正八年大阪支店勤務となり輸出向製品の販賣主任となり精勵格動大いに社運を隆昌に導けり其の努力の功酬ひられて昭和三年九月關野善三郎氏の後任として横濱支店長となれり。破格の昇進と云はざるべからずこれ氏が粉骨碎身社務を勵みたる結

果なりと云ふべし同支店は大正六年開設せられ現在常盤町常盤ビル三階に事務所を有す。同社は資本金千七百二十五千圓（内拂込済千六十五千圓）の大會社なり。社長安田善助氏、常務取締役河路寅三氏、取締役大倉喜七郎、大橋新太郎坂本次郎、鈴木鈴馬、平塚直治、安田善五郎の諸氏支配人左乙女謙吉氏にして何れも實業界に於ける錚々たる人物のみなり大阪、札幌、横濱等に支店京城に出張所を有す。其の他大阪、鹿沼、札幌に製品工場、北海道に四十一ヶ所の原料工場を有する本邦製麻業界の王者なり。其の製品は遠く海外に輸出されるは勿論、リンネル製品、服地類、飛行機翼布、タオル、シート、ワイシャツ、帆布ホース、織糸等麻糸の悉くを網羅し、國産品愛用の叫ばれてゐる昨今同社の躍進は我國産業の爲洵に喜ぶべき現象なり。同社の顧客は古川電氣、横濱ドック、日本郵船、一般船具商等一流の會社商店のみなり同社の發展期して待つべきなり。

板部有次郎氏

横濱市磯子區磯子町宮下九〇四



板部家は佐賀縣鍋島藩の藩士なり。氏は佐賀縣佐賀市與賀町板部六郎氏の嗣子にして明治十二年二月十五日生れ佐賀中學卒業後將來事業界に活躍すべく慶應義塾に入り經濟學を修め卒るや大阪商船會社に入社將來を囑望され門司支店勤務下關支店兼務を命ぜられたり。當時日露の風雲急を告げ軍需品の輸送に繁忙を極めつゝある折柄同氏は主としてこれが業務に當り努力以つて益々其の信用を高めたり。後朝鮮郡山浦勤務となりしが奮然決意獨立事業を計劃し明治四十一年同社を辭し東京

に於て有價證券の賣買、雜誌類の海外輸出事業を興し奮闘これ努め業績大いに上れり。

次いで大正七年二月大阪海上火災に入社同八年横濱支店火災部主任同十年以來支店長の要職にあつて縦横無盡の活躍を續けつゝあり先考六郎氏は漢學の大家にして鍋島侯の寵を受け引いては國政に參與せる人なり祖父猛雄氏は佐賀縣養基郡西島村の名利光淨寺の建立者なり。篤學の士にして常に郷黨の青年を集めて國學の講義をなし祖先崇拜の思想鼓吹に努めたる人なり。後九州鐵道敷設、佐賀取引所の開設等の爲め老來益々盡力されたり。市會開設せらるゝや初代の市會議員に選ばれ市政に盡瘁し明治四十年七十五歳を一期として逝きぬ。

有次郎氏又陪審員に選出せらるゝ等名譽職に推薦ること一再ならず趣味として書畫を好む、夫人峰子氏は埼玉縣坂戸の人氏との間に長女せい子氏あり神奈川高等女學校卒業後目下東京家政學院に在學中なり。

楠林正齊氏

三浦郡田浦町船越



氏は楠林名は正齊大阪の人なり先考誠齋先生の五男にて「なには津に咲くや昔の梅の花今も春なる浦風ぞ吹く」の地に生る楠林家は代々刀圭家を以て聞ゆ累世其業を繼ぐ事實に二十七世仁徳天皇高津宮の古文梅に名高く若に名高き浪連津の代は知らず天正十二年甲申秀吉大阪城を築き天下に號して全國より巨商富豪を集め大阪の稱ありし以前楠林家は既に醫家として立たれしならん爾來星移り物變り時代の推移は逝く水の如くなるも氏の家は綿々變るなく相承けて今日に及び一族一門其

業を一にせらるゝは日本は因り全地球上恐くは稀有の事に屬する一ならんか古家名門の稱も此に至つて極まる。

氏は幼時より穎悟温敏學に勉む夙に小學校を了へ中學校を経て大阪醫學專門學校に學び明治三十四年同校を卒業して更に海軍々醫學校に入り同三十五年同校卒業せらる此間毎に優秀なる成績を示し海軍々醫としても秀才を以て聞へ後現田浦町に醫業を開かる。

氏は意思剛毅にして學動壯重なる片面には資性温雅言語懇懇にして親む可く褒る可からざる紳士なり故を以て其技量と學識と共に相俟つて患家の信賴甚だ厚く門前市來の觀を呈するに止らず社會一般の聲望亦鐘より田浦在郷軍人分會の創立者として盡され現に田浦町醫、田浦學校醫、三浦町學校醫會長、船越區長、將校團よりなれる田浦町海信會長、町會議員、田浦町區長會長等に推舉せられ昭和四年縣より功勞者として表彰を受けらる。

中垣 秀雄氏

横濱市保土ヶ谷區峯岡町一、一四七



寛永九年君の祖先其初め小田原藩主大久保氏に仕へてより二百五十年、祖考秀實に至り明治維新に際し、國事に執掌し、其行動聊か國家の爲めに盡瘁する所ありと認められ、昭和三年十一月特旨を以て正五位を追贈せらる、蓋し小田原藩論の佐幕に決せらるゝに當り、一死以て大義の重んずべきを論じて藩論を翻し、土民を戦亂の苦より救ひ、市街を兵火の厄より免れしむ、世人以て小勝海舟となす、君は其令孫たり、夙に小田原中學校、神奈川縣師範學校に入り、卒業後、明治廿一年

横濱老松學校訓導奉職中、農科大學教授に陪して富士登山の際、山麓の廣漠たる原野の開墾は富國増進の有利事業たるの該に刺戟せられ、時の縣知事沖氏の紹介を以て渡米し、加州大學評議員ベアド氏の醸造場に入り、葡萄の栽培及葡萄酒の醸造を研究する事七年、歸國後保土ヶ谷の富豪岡野氏後援の下に、カタピラ葡萄園の經營を開始せしも、風土の異なる所本邦に適する葡萄品種の發見せられざる時に當り苦心慘憺多年、漸く理想の純粹葡萄酒を醸造し得るに至れり、爾來三十年長子は商業學校出身として販路擴張に當り、次子は農業學校を卒へて栽培事業を擔當し、以て君の事業を補佐するあり、葡萄酒も次第に其眞價を認められ、本縣名産の一として今や其販路西は朝鮮大連より北は北海道に達し又横須賀海軍病院を始め有名なる病院の指定用品となるに至れり、公職として擧ぐべきものなきも、曾て元保土ヶ谷町學務委員に選ばれたりしが、現に横濱市方面委員を囑託せられ、又選ばれて神奈川縣家屋稅調査委員となる。

會社 美加登商會

横濱市中區住吉町五ノ六三



横濱市に於る電氣界の先驅たる、美加登商會は、明治四十年十月の創業にして、始め常盤町に店舗を構へ、爾來堅忍持久を緯とし誠實硬直を經とし、毫も外觀を粧飾せず、同業者間の信望厚く、日進月歩店運の隆昌を見るに至れり、其後業務擴張の爲め、尾上町五丁目に移り、諸會社銀行官衙等に顧客を有し、堅牢優秀なる製品を産出する日本電氣株式會社の代理店として益々斯界に雄飛を試み、常に在庫豊富なりしも、彼の大震災災に遭遇し、一朝にして巨萬の財貨を失ひたるが、此の辟易する所なく、勇往邁進復興を計り、遂に今日の

盛大をなすに至れり、同店は現市會議員小野嶺吉氏の經營に成り、支配人小野光顯氏亦能く補佐の任に當り益々堅實なる販路を持続し來れり、大正十五年一月、山下氏入りて經營に當るや、縦横に敏腕を振ひ、燦然たる光輝を放ち、斯界の明星として、業績顯著なるものあり、昭和二年約七倍の増資を行ふに至れり、同店の營業種目は主として電話機器交換機電鈴表示器、私設電話甲乙増設電話、市内専用及び室内各電話の取付工事設計請負等にして、其他一般電氣器具、機械線條諸材料、理化學機械塗料船具等を取扱ひ、昭和二年東京電燈株式會社横濱支店指定器具販賣となり、電燈電力の器具機械の宣傳販賣をなせり、其經營方針たるや誠實硬直を店是とし、其事情を訴ふる者には、一錢を受けずして材料を供給し、之が工事を補助遂行せしめ、反面には一旦忌避したる者に對しては縱令巨利を提議さるゝとも、恰も弊履を抛つが如く其氣魄の昂りたる他に例を見る事能はざる所なり、今や復興途上の横濱市に於て、電氣界の重鎮として一般から其將來を囑望されつゝあり。

井上寅之助氏

川崎市小川町八



明治二十二年の創立にして本社を大阪市東區今橋四丁目有する日本生命保險株式會社は我邦保險界の白眉に



て且つ最大なる第一社なり其特色は保險料の低廉と利益分配に基く増加保險證券の交附等株式會社にして相互組織の長所を併有するにあり又全國主要地に社醫を配置し隨時無料診察を受けしむるの便利を謀り保險契

約者に低利貸金をなし又健康相談所として日本生命濟生會を設置し以て一般國民の保險擁護に資する所あり。

川崎出張所は昭和四月一日の設置に係り其所長は井上寅之助氏なり氏は縣下高座郡澁谷村に於て明治二十三年五月に生る神田中學校を出て西ヶ原蠶糸學校に入り卒業後山梨縣養蠶教師たり居る二ヶ年甲府聯隊に入り後拔擢せられて滿洲鐵道守備隊たる五ヶ年大正六年除隊し大連商業會議所に在勤一ヶ年獨立心旺なる氏は住宅會社を經營し更に資本金壹百萬圓を以て平和銀行を創立し常務取締役に推され又大連市場商興信託株式會社を發起し擧げられて取締役たり當時居留民會評議員等の公職を帯び相當に盛名ありたり。

大正十四年歸朝當地に來り同年日本生命保險會社東京支店に入り尋て横濱支店勤務を命ぜられ在任中の成績優秀拔群にして現に京濱間の大會社大工場縣下の大部分に日本生命保險會社の進出を遂げしめしは氏の力に據るもの頗る大なり遂に昨年川崎出張所設立を見るに至り其所長たり保險界に入り僅少の歲月にして支店と同格の所長あるは蓋し稀なり。尚ほ日本生命保險株式會社は資産貳億壹千萬圓と八億五千萬圓の契約高を有す。

相澤次郎氏

横濱市磯子區西根岸町坂下五九九



小學校長訓導より鰻上りに校長に昇進する人々の多き中にあつて氏は中等學校教諭の前歴を持ち小學校長界稀れに見る明敏なる頭の持主なり嚴父相澤源太郎氏は八十二歳の高齡今尙娛樂として都築郡新田村高田一四五七の自邸にあつて農事に精勵す氏は其の次男幼にして教育家たらんと志し郷里の小學校を卒へるや直ちに縣立師範學校に入學明治四十年同校卒業後選ばれて同附屬小學校訓導に任ぜられ續いて翌年其の英才を認められ特別を以つて東京高等師範學校英語科豫科に入學を許

可さる四十五年三月卒業後鹿兒島女子師範學校教諭となり五ヶ年の永きに亘り女教師の養成に盡瘁し全校生徒より慈父と仰がる後大分縣立宇佐中學校に轉じ同校に三年次いで群馬縣桐生中學校に一年有半新潟縣高田師範學校に二ヶ年大州中學校に二ヶ年。中等教育に鞭を握ること十四年殊に英語教育に於ける造詣の深く驚嘆に値す其の後出身縣よりの懇請黙し難く横濱市根岸小學校長となり現に北方小學校長たり同附屬夜學部訓導女子青年會長等を兼任す。

氏は教育家たるの傍ら夙に國勢調査の必要なる所以を力説し先年國勢調査の執行せらるゝや忙中寸閑を割きては各地に趣旨徹底の宣傳行脚に赴き該調査として完璧を期せしめたり國勢調査紀念章を贈られたる又宜なる哉。昨年一世一代の光榮とも云ふべき御大禮に際し大禮紀念章を受けたり氏今四十五歳の男盛り趣味として書を能す夫人クメ女は三十九歳縣立女子師範學校卒業嘗つて吉田、鹿兒島小學校等に教鞭を取りこれ又教育家なり家庭は大の子福者にして一男五女あり常に春風駘蕩理想的家庭の標本なり

下平元太郎氏

横須賀市若松町四六



信濃は海無き國なり湖多き國なり山の國なり河の國なり秀麗の峰嶽清麗の河川到る處峨々として聳へ滾々として流るゝ加ふるに奇巖鬱林此を縫綴し此を修潤して其壯と其美を加へ其地既に幽邃にして其俗自ら醇美なり下平元太郎氏は此國の内外は普佛相對し歐洲愈々活動の時機に入り内は王政復古の偉業茲に成り英明の天子即位し給ひたる明治元年戊辰十一月函館の反徒職司設定をなせる月の二日下伊那郡天瀧川畔近き所に生る。

信州の地由来蠶業に富む下平家世々生絲を業とす

氏は家の長子として業を繼ぐも元來霸氣に富み阪餅の山村に朽つるを欲せず永く都會の繁昌に憧がるも當時往還未だ寒塞の憾みを絶せず道路險惡交通甚だ不便を極め鞋底自ら嶮峻を踏破するに非ざれば人肩馬背に運々たらざる可からず爲めに遊心意の如くならず空しく雄飛の機を窺ふ事多年。

明治十七年十月漸く其機運を得て當時新進氣鋭の横須賀は氏の横溢せる霸氣に適し初め諸種の勞働に従事し大に鐵工と建築材料の道に通ずるあり明治二十二年鍛冶職を開き鐵鏈夙夜に響く後更に材木商を營み進んで製材工場を設置し 明治大帝の御製「花になり實になる見れば草も木もなべて務の有る世なりけり」氏は克く努めたり克く守りたり遂に成功者として町内に信望を博するに至り業を擧げて長息新一郎氏に譲り悠々自適の境にあり。

夫人みな子氏に新一郎氏の外元次君元晴君さく嬢千代江嬢と養子平吉氏あり。

平田忠心氏

中郡平塚町新宿一四六二



自轉車の輕快は日本人の敏捷なる本質に適し該車移入以來年々閱みする事十に足らず初め娛樂用のもの一變して競争用のものとなり更に再變して實用上のものと化し今津々浦々に至る迄必需缺く可からざる一種の家具品として備ふるに及び其の需用數の點に於ても乗用數の點に於ても世界に比を見ざる所なりと稱せらる平田忠心氏の如きは尤も克く此を理解し最も夙く此を愛用したるの人なり平田氏の自轉車に於ける趣味は殆んど天才より出づるその如きものあり。

氏は當平塚の人明治三十一年五月七日同町に有名な老舗小問物唐物商平田平五郎氏の長男に生れ少年の頃より自轉車に深き趣味を有し隨て乗用術に於ても分解法に於ても自ら造詣深く遂に自轉車商たらんと父君に謀りしに父君は嗣子としては祖業を繼承するの義務ありとの許に反對せられたるも氏の一念到る所已む可きなし奮然所持の競争用自轉車を賣り得る所の八十圓を資本として素志の如く自轉車業を開始したるは大正七年にあり。

天既に氏に此の技能を恵み氏も亦熱誠事を起したれば何とて成功せざるあらん大正十二年には自動車部を兼營し天性の俠氣は衆人の愛顧を買ひ異數の隆盛と發達を遂げ大震災に際し毎日馬入橋より二宮迄無料旅客の運搬を施し殊に知事に謝狀を受く同十三年市内自動車の許可を授けられ現に十三輛を以て町内交通の事に供す夫人ヤス氏にマサ子嬢英子嬢貞子嬢富士子嬢あり。

村松 規 具 氏

横須賀市大瀬町三八



昔菅公道真大に和魂漢才の説を建つ今や士魂商才の必要を唱ふ者多し然れども唱ふるは易し行ふは難し古哲吾に教て曰く「言ふ者必ずしも知るあらず知る者必ずしも言ふあらず」と此言現代に於て其儘に用ゆ可きに非らざるも和魂商才を有する者果して幾人かある吾人は村松規具氏其人に就きて初めて之れあるを知る氏は一介の商人にして従七位勳五等の位記と勳章を持てる不言實行の模範的人物なり當時稀に見る人格者と稱す可し。氏の生地は秋田縣羽後國秋田の郷は佐竹氏の舊領

地にして物部川の白練溶々海に入り日本海の煙波茫茫々究る無し男鹿半島又近く志儒頼三樹「男子一度男鹿の島を探りて松洲初めて妖嬈に届す」と歌ひ俳聖芭蕉の松島は笑ふか如く象潟は怨むが如しと記せるに對し男鹿は怒るが如しとや云はん其景勝は雄大なり其風光は曠爽なり此景此勝疑て秋田人士の寡言莊重豪快磊落の氣風と化し古來海上の人となる多し北國船の稱此處より起る。

明治二十九年海軍志願兵として横須賀海兵團に入り爾來二十六年間精勤恪勵大正十年に至る此間砲煙の裡に戦ひ狂濤の間に投じ克く帝國海軍々人の面目を保有して多大なる功勳を遺して退官後村松家に入り茲に印刷及紙問屋を始め今や其主位を占め信用亦漸次に加はり現に横須賀市商工會議員に擧げられ大に市政の爲に盡し又横須賀自働車會社重役として斯業界に重きをなす氏は一介の商人たるも依然朴直なる軍人氣質を失はざるなり。

福永市次郎氏

横濱市中區長者町八ノ一三六



由來江州は湖光明美の國なり勝名世界的に高し人士又隱忍敏捷機略に富む近江商人の名天下に普ねし福永市次郎氏此縣の人門地ある富豪家として滋賀縣蒲生郡岡山村字舟木の里に邸す一村の敬尊其家に蒐まる父君福永市松氏大度にして温雅なり克く郷人に盡し郷人克く氏を信ず當主市次郎氏は其嫡男にして明治政府の大分裂を來したる癸酉六年六月宮城炎上して國を擧げ恐懼せる翌月に生る。長じて丁年に達し青年の霸氣壓へ難く二十一歳に

して鋤鋤を抛ち零細の資金を携へて旅程に上り横濱に出でしは明治二十七年の夏にあり當時日清の國交愈危急に迫り舉國緊張の裡にあり横濱は開港地として最も機敏なる反映を受け貿易は恐慌氣味にて緊縮せるも物資は出動準備を氣構へ取引頻繁ならんとせり氏は實に其機を捕へしなり。

泰山を超ゆは一步に始まる先づ福富町に細さやかなる雜貨店を開き近江屋と稱す孤立無援の地に於て乳臭未だ脱せざる白面の一青年にして世界有數の大港地横濱の劇甚なる競争戦場に藝進するの勇氣は既に遺憾なく近江商人の本領を發揮したり此氣力を有す奮戦當らざるなく同三十三年蚊帳布團類の販賣を始め遂に今日の成功を招來せり。

衛生組長となりて衛生向上の事に努め區劃整理委員となりて大横濱市の建設に參與しつゝあり家庭には夫人キサ氏に二子あり米次郎氏は家に在て青年會長たり宇三郎氏は近衛歩兵に入て李王殿下の從卒たり。

原 富太郎氏

横濱市中區本牧町四三五九



氏は岐阜縣厚見郡佐波村青木久衛氏の長男として
明治元年八月
廿三日を以て
生る風に早稲
田大學に學び
廿五年善三郎
氏の嗣子元三

郎氏の養子となり廿九年一月分家、三十三年原商店の合名組織となるや氏は其代表社員となる三十三年生糸賣込業の外に生糸輸出部を設けて生糸絹織物等の輸出を圖り米國紐育佛國リヨン露西亞モスコイ等に支店を有せり三十五年富岡製糸工場大崎製糸所名

古屋製糸所及び渡瀬製糸工場の四大工場を經營し三十五年一月第二銀行の頭取となり又横濱商業會議所議員及び會頭に選ばれ實業界の明星と稱せらる。氏は多趣味の人にて書畫を好まるとは衆知のとこそ、時に詩を賦し歌を詠じて、三溪園裡に閑日月を示して世界的紳士と稱せらる。

石川 義明氏

氏は明治十二年八月廿三日に生れ、石川組の店主船舶賣買仲立及海陸運輸業を營み傍ら山下町五十一番バッテリーフィールドワイヤー商會に勤務し汽船事業を擔當し居れり夫人を里子氏と呼ぶ子女六人あり。

平尾 信次郎氏

横濱市中區本牧町二五二



家業三代と云ふ言葉あり。即ち初代の創業、二代の守成、三代の飛躍に依つて其の事業は愈々興隆に向へゆくを意味したるものなり。

目下横濱本牧に於て、機械雜貨其他の輸出入業を營む平尾商會主平尾信次郎氏は、先代の遺志を繼承し、事業の發展に日夜不斷の努力を積み正に一大飛躍を試みんとせり。抑々平尾商會は長兄榮太郎氏の創立にかゝり、榮太郎氏は神戸商業學校を卒へ横濱にニューロップ商會に入り長年勤務し輸出入業の精髓を極め明治四十年山下町に平尾商會を興し、獨

逸、オランダ、南洋、支那等に輸出入業としての第一聲を擧げ斯くて氏の天稟の才能は、經驗と學識とを巧妙にコントロールし大いに業績をあげ、世評を博くすと共に、同市一流劇場なるオデオン座を經營し劇界にも活躍着々成果を見たるに、かの大震災災に厄し榮太郎氏は無慘三十六歳の壯年を以つて店と運命を共にせり。壯圖空しく主宰者を失へる平尾商會に暗影兆せしが、實父萬次郎氏は老軀を提げて自ら代表者として陣頭に立ち、一家擧つて銳意専心再興に努力し、凡ゆる難關を踏み漸次發展の途につきたるに、六十八歳にして長逝せり。茲に於て我が信次郎氏は奮然年少の身を以て遺業を繼ぎ、商戰の第一線に立ち熱心誠意其の事業に盡瘁し、業界より少壯手腕家として、その未來を囑望せらる。氏は明治四十年生れ、横濱關東學院に學び、更らに早稻田大學商科を卒業せる俊才にして今後の平尾商會は一に氏の双肩にありと。

布能山雄氏

横浜市中央区吉町三ノ四四

甲州は山の國なり殊に東山梨郡は山嶮に水多し水力發電所配列の觀を呈す笛吹川の上流松里村は四方殆んど水力發電所を以て圍れたりと稱す可き地なり風俗純朴にして人情敦厚なり此地布能山雄氏誕生地にして父君町田廣吉氏の三男に生る明治三十五年四月「山櫻咲く御嶽路に春寒し」の山村に呱呱の聲を擧ぐ後布能氏を繼ぐ布能氏の遠祖は京都堂上の人なり亂を避け各所に追れ遂に武田氏の甲府に來り東青沼町に住す豪族として知られたり。

甲府商業學校卒業後直ちに臺灣に航し臺北高等商業學校に入り後臺中彰化銀行に聘せられ入て其先天的非凡なる商才を揮ひ彼地に活躍する三年大いに社

内の信用を得たるも消極的銀行業界の空氣に厭ざ辭

して東京に歸り日本陶器株式會社東京本社に入り刈谷製作工場に於て實地研究を積む事約一年再び本社事務を觀る爾來揮身の努力を盡して同社の發展を計り約一年半早く横濱出張所主として赴任せしは實に昭和三年七月にあり以來殆んど二年間氏の手腕は大に露はれ出張所の成績異常の良果を結びしのみならず横濱一般の實業界に於ても認むる所となり新興横濱港の活氣に相應しき人物として先輩の許す處たり氏も亦一個の偉才なりと謂ふに憚らざる也。

氏は社務繁劇の傍らスポーツに深き趣味を有し就中野球テニスの妙手として聞えたり家に伉儷玉枝夫人あり甲府女學校卒業後東京九段女子商業學校出身の才媛なり長唄に堪能にして讀書を好まる長息民雄君あり。

吉川眞次郎氏

横浜市中央区辨天通三丁目四三



當吉川家は幕府時代よりの舊家にして代々伊兵衛を襲名し當時は帥岡屋伊兵衛と稱し横濱市唯一の書籍出版者として徳川文化の普

及に寄與せる所大なり。現在辨天通一丁目の吉川書店は先考伊兵衛氏の創立せしものなり。氏は明治十七年七月十七日伊兵衛氏の次男として生る。普通教育を履修すると共に氏は當時漆器界の重鎮たる藤屋商店に小僧となり、氏の今日の大成への一歩を踏む研鑽の心あつき日本趣味豊かな藝術的天分を持つ氏にとつてこの仕事は心好き仕事でありき。仕事に自

ら熱もあり意志もあれり。二十六歳の若冠にして店

主山本忠造氏の歿後の一切の店務をよく擔任統制し一意専心主家の爲めに働く。大正三年同店の廢業止むなきに至り、氏は辨天通りに吉川商店として獨立して漆器商を創む。既に斯業に關する蘊蓄と造詣深く横濱漆器界の先輩として斯界に大いに盡す。震災當時斯界の復興のため奮闘し後推されて組合長となる。氏は研究と工夫の心旺んにして常に各國民の趣味嗜好を探り移り行く時流に求めて、是に適したる製品を作り、斯界を指導す。されど徒らに奇を逐ひ新を求むるに非ず故きを温ねて新しきを知る趣味深きもの、昭和四年大禮博覽會に於て金杯を授けられ又各國大使の用命は殆んど同店に限らる。蓋し氏の漆器に對する豊かな藝術的天分と努力の業界發展の爲めにつくせし功績多大なり。かの大震災に於て前夫人榮子氏、長女芳江、次女利子、三女照子一家全部を失ふ。現在アイ子夫人と靜かな家庭を持てり。

黒川 敏次郎氏

大磯町東小磯四一九

黒川家は代々京都二條の御所内に在りて畏れ多くも 天皇陛下の御召上る御菓子類の製造を一手になしつゝありしが、明治維新の大業完成御遷都の御事となるに際し二代目黒川光保氏も随伴上京され日本橋區龜島町一丁目居を構へ、引き続き祖宗の尊き遺業を繼承せられ現在に至る。氏の伯父黒川光景氏も亦赤阪に虎屋として知らるゝ店を經營し齊しく宮内省御用を勤めらる。氏は明治二十五年三月二十四日に生れ、幼より伶俐にして果敢、力と熱に富めり。大正六年早稻田大學商科を卒業するや直ちに横濱茂木銀行に入る。漸く仕事に慣れると共に持つて生れた氏の力と熱は發散する處を求めたり。如何なる敏

腕も事なければ現はすによしなし。偶々七十四銀行と合併されるや氏は貸付係としてその鋭鋒を現はし後横濱興信銀行に轉じ益々その手腕力量を認めらる。大正十四年關東銀行の整理に際し横濱興信銀行より現關東興信銀行支配人藤永氏と共に選拔せられて之が任に當る。氏は敢然身を賭して無事この大任を果たし、遂に氏今日の地位を開拓す。蓋し氏は信念の人であり意志の人なり。同年十二月關東興信銀行生る。氏は昭和三年九月大磯支店長に任命せられしが、氏の着任後同支店の業績は飛躍的の發達を來し、遂に本店を凌駕するに至りたるは正に氏が營業上の手腕力量の反映にして氏の敏腕を語つて餘あり。又昨年末日本銀行代理店縣支金庫を引受け氏これが責任者たり。

飯田 信太郎氏

横須賀市旭町一六

由來三浦半島は東海の漁業地として名高し横須賀は慶應元年徳川幕府此地に造船所を設けし以來急速の進展を遂げ又或る意味に於ては日本の西歐文化進口にして外來生活に最も早く接觸するの機會を得て現代料理法に風達を致したり既に此の激潮たる鮮魚を利として新味ある法に依り而して幾十日若くは幾百日單調無味の航海を繼續せし艦船將士の上陸後第一夜に慰安を與ふ可き地位にある横須賀として料亭及料理の發達せるは當然なる顯影とや謂ふならん料亭「港月」とは想ふに詩僧南山の「好愛港頭一鏡月」の句より拉し來りしならんか同亭は横須賀一流の料亭にて客室の清洒たる取扱の快活なる料理の

新味ある點に於て殊に名あり亭は明治二十年五月先代眞吉氏の創營に罹り爾來四十五年の星霜を経たる歴史あり經驗ある老舗なり。

港月の主人を飯田信太郎氏と云ひ明治十五年二月六日眞吉氏の長男に生れ規定の學歷を経て明治三十三年横濱商業學校を卒業して後家に歸り父業を繼ぐ氏は眞の奮闘家なり眞の努力家なり同亭の基礎は既に先考の築かれたる所なるも此れに樓閣を築き湯池を設け港月の名を今日に來らしめしは氏の力なり一昨三年巨額の資を投じて新築せる新館は洋食専門の用に供し男女雇人四十人一ヶ月の賣上高平均壹萬五千圓に昇る豈に盛ならずとせんや。

氏は推されて横須賀二業組合長たりまさ子夫人に榮一君芳江君の二子あり。

遠藤政直氏



日本憲政史上、かの有名なる「西にレニン、東に原敬あり」と叫ばしめたる傑物原敬宰相を生みて著るしく名を知られた東北盛岡市は我國水力機械學の權威たる遠藤政直氏の生れ故郷なり。明治十六年五月士族遠藤政親氏の長男として生れたる氏は、烈々たる寒風と吹雪の裡に幼少時代を過し、無意識の間に大自然の威化を享け、不撓不屈の精神は宿されたり。盛岡中學を卒業後將來の文化進展と相俟つて機械工業の發達あるものと洞察したる氏は遠く笈を負ふて上京し、藏前高等工業學校機械科に入り専心勉學せり。明治三十七年卒業し芝浦製作所

に入り其の實地研究に携はり大いに得る處ありたり。三十九年同所を辭し直ちに學識を認められて竹内明太郎氏に囑されて海外留學に志す。米國マサセツチニュー州セツツインズチユート・オブ・ビクノロジイ・機械科に入學し、孜孜として研究に従ひバテユラI・オブ・サイエンスの學位を受け、更らに獨逸に赴きドレスデン・テクニツチエ・ホッホシューン機械科に學び不撓不屈の精神を以つてその精髓を極め四十二年歸朝せり。早稻田大學に入り理工科の創設に盡力し、明治四十五年九州帝國大學工科の講師となり、大正七年助教授に昇進し多年研鑽せる學識を以つて若き學徒の訓育に努めり。大正七年十月再び英米兩國に留學し水力機械學の研究を文部省より命ぜられる。彼地に赴くや瑞典にも留學を命ぜられ、親しく三ヶ年に亘りて研學を積み大正九年春歸朝し、横濱高等工業學校創立と同時に直ちに迎へられて教授となり、爾來今日に至る迄、水力機械學を擔當して指導の任に當れり。功利萬能時代にありて、自己の名利榮達を望まず、象牙の塔に籠りて研究を怠らず常に若き學徒に一生を捧げらる氏の如きは眞の學者と云ふべきなり。

日暮録之助氏



横濱市弘明寺山下二七八

常磐鐵道下總に入り天文六年國府臺の戦に小弓義明の觀望地相模臺を東にし淨土宗の古刹東漸寺を南老杉亭々たる間に眺めつゝ進んで柏に至る此附近一帯の廣地を小金ヶ原と云ふて名高し東葛飾郡土村は小金ヶ原の中央にあり今神戸海上保險會社に重望を有し保險界の元老たる日暮録之輔氏は此地の人なり。

日暮家は代々名主を勤め苗字帶刀乘馬御免の家格を有し威勢名望郡内を壓せし名家なり先考日暮彌兵衛氏幼名を儀之助氏と云ふ篤行學識あるの人弱年よ

り村政の事に與り頗る公事に盡し効績見る可き者あり永く居村の村長たり六十歳にして村民悼惜の裡に歿せらる氏は其次男にて時は王政維新後未だ年を経ず新政府僅かに成りし明治三年庚午秋十月三日を以て手賀沼畔近き家に生る。

氏は夙に郷里の學校を終り東京高等商業學校に學び明治二十八年同校卒業後直ちに横濱取引所の招聘に應じ會計課長兼支配人となり後日本火災保險株式會社に入り更に同四十二年神戸海上保險株式會社に入社して横濱出張所長に補せられ今日に及ぶ實に二十四年此間或は稀有の財界不況或は空前の震災に會し氏は毎に克く適應善處して指揮を謬らず遂に今日の盛況を報告するに至れるは保險史上記すべきの功績なり。

氏は一面蓄財の智に富み曾て夫人とも子氏の副職として質商を營み數萬の資金と三四十軒の家作を有したるも震災の奪ふ所となり今や再び更生の路を辿りつゝあり。

鬼頭喜代藏氏

横浜市中区不老町二ノ一五九



鬼頭喜代藏氏は尾張名古屋の人家は祖先より農を業とし遠近に聞へたる素封家なり代々襲名して喜代藏と稱す曾父喜代藏氏大工頭梁として名あり父君又襲名して喜代藏と名乗り農を繼ぐ氏は其四男として明治二十二年七月四日同市南区野立町に生る幼時より伶俐にして活達なり資性農に適せず小學校卒業後一年間補習教育を受け奮然郷關を後にして横濱に來り本町六丁目輸出絹物商大矢商店に入り精勤十二ヶ年間一顧を他に觸れず専心一意主家の業務に盡し自己の研究に資し應徵入營する

に當り組合長大濱氏より勤績賞状を受け巷間に表彰せらる以て氏の性格の程推知するに足る可し眞に輕佻なる現代青年の一針に價すべきものと云ふも過言にあらざる也。

名古屋歩兵第十六聯隊に入り成績又拔群にして一汎の模範兵と稱せられ夙に上等兵に拔擢せらる其除隊に際しては梨本聯隊長の宮殿下より善行證を拜受する光榮を受く既に横濱に歸り直に獨立して相生町四丁目に輸出絹物商を開き爾來著々として盛大に向ふ大震災に盡く灰燼となりたるも四人の店員十人の家族皆事無きを得たる不幸中の幸なりとなし奮勵現地に移り家を建て業を張り日に月に繁盛に加へ其人格は周圍の認むる處となりて艦船組合會計たる事六年震後補償金の收支等複雑なる重任を果し久しく艦船組合副組長を勤め現に組合長に推され又輸出絹物第六部長たり而して夫人すみ子氏に喜美子嬢靖君稔君八重子嬢和子嬢の一男三女あり。

久田梅次郎氏

横須賀市小川町三二



五十鈴川の上神路山の麓何事のおはしますかおはしらねども恭けなさに涙のはふり落つるを禁じ得ざる聖地は皇室の宗廟舉國崇尊の中心たる伊勢神宮の鎮座し給ふ淨地宇治山田市は氏の生地なり甲申秋十一月森々たる神苑の木立に金風靜かに渡る時を以て父君長七氏の二男に生る久田家は代々工業を營む父君又其職を繼ぎ篤實の人として聞ゆ。氏は生來豪放磊落氣宇濶達にして仁俠の風を喜び正義の在る所我往かんの慨あり幼時より魁偉衆童に

異なるものあり長ずるに従ひ其性増々著る中年の頃東京に出で運送業を開き業務の性質克く氏の性格に適す仲仕や馬子の意勢の勇しき所は氏の最も興味を感ぜし所となり店運繁盛に赴きしも陸上の運送よりも海上の回漕が如何に勇ましかる可きかを想ひ大正六年決然横須賀に來り新野回漕店の經營を繼承して回漕業を營み爾來殆んど十五年漸次擴張を計り横須賀海軍各署陸軍要塞部等の關係貨物の輸送請負又官納品運送を主として扱ふ目下横須賀市に於て新進回漕店として飛躍するに至り昨昭和四年久和商會を起し物品販賣代理及仲介業を兼營し氏は同商店の代表たり代理取扱をなす重なる會社は諏訪電氣株式會社汽車製造株式會社、大阪製線株式會社、レミット商會、ドライアイヌ商會等其他三十有餘會社商店に至る。氏に興味の如何を問へば我は今奮闘の眞最中にあり趣味を考ふるの餘裕なしと而して氏に子なし夫人こみ氏のみ。

龜井博司氏

横浜市神奈川區青木町反町五四一



常磐實業合資會社代表社員龜井博司氏は上州の人
明治二十年五月二十五日群馬縣多野郡入野村の農家に生る氏の一生は真に波瀾に

富み迂餘曲折其限りを盡し以て今日あるに及びたる
経路は轉た、興味浸々たるものあり。
氏は幼時鋭才奇童の稱あり稍々長じて霸氣を加へ
自ら農村に朽るを惜み明治三十八年當時世を擧げて
戰勝氣分に酔ふ少年血氣壓へ難く十七歳の身を横濱
の街頭に投じたり。
初め法律家たらんと志し同郷の先輩辯護士大橋清

藏氏の門に寄食し明治大學法科に入り同校卒業後暫く大橋事務所在りしも一朝感ずる所ありて韓國併合の詔勅發せられたる明治四十三年年齢二十四年單身朝鮮に渡り大に活動す可く城津港に雜貨店を營み盛に内地品を輸入して販賣に努む尋て製紙會社を創立し壯圖を企てたるも世は寒翁の馬にして起伏勝敗七年の歲月を此地に過せり。
大正五年横濱に歸り常磐町に於て西洋食料品販賣業を創め續て石鹼製造會社を興し更に常磐實業合資會社の設立を完成して土地管理事業を營む等幾多の活躍を歐洲戰中の黄金時代に試み盡く正鶴に當り茲に富豪の列に入り偶々大正震災に會し英斷一下石鹼工業並食糧販賣を變止して復興に俱ふ可き土地管理事業の必要なるを察し専ら力を同會社方面に傾注して現に其代表社員たり。
夫人さく氏郡馬縣女子師範出身にして活花を好くし清司氏東洋大學卒業受験中に在り此他證夫君久代嬢悦郎君あり。

南官市氏

横浜市磯子區磯子町九四五

肥前國は元來小藩分立の地にて維新當時大藩佐賀の他小城、蓮池、鹿島、島原、平戸、平戸新田、唐津、大村、福江の十藩あり之れ獨り幕府政策上よりする分封布設にあらずして國情の然らしむるに似たり往昔肥後と共に火國と稱せられし時既に人種混淆難治の地に數られ後前後二國に岐れ嘉祿以來爭奪甚だ劇しく群雄割據の状態にあり各部各異なりたる人情風俗を有す故に維新當初數々縣治の變更ありと謂ふ然れども其結果氣鋭敏才果斷敢爲の質を養成し發しては刺客となり巨人となり偉人となる南官市氏は此縣の士族にして又其性に富み佐賀の有する實業界の偉人なり。

氏は明治十五年四月先考南忠三氏の長男に生れ同十九年氏僅に四歳父君を亡ふ幼時既に奇童の稱あり稍々長じて愈々俊秀人の矚目を曳く正規の學程を履み東京帝國法學部に入り明治四十一年獨法科を卒業し學士の稱を受く。卒業後直ちに正金銀行に入り天稟の才能は此處に於て益々發揮し忽ちに拔擢せられて上海支店ロンドン支店等に派遣せられて精勤幾年深く海外の事情に通ず大正九年歸朝同行横濱本店に歸任して輸出係支配人代理を命ぜらる翌十年正金銀行を辭し左右田銀行に轉し専務取締役に擧げられ令名比す可きなし尙ほ四日市毛織物株式會社社長に推され左右田銀行取締役たると共に横濱實業界の大立物として雄飛せらる曩に横濱新港倉庫、横濱商品倉庫の監査役たりし事あり都夫人は横濱經濟界の重鎮左右田金作氏の第二嬢なり一息あり。

杉田順一氏

三浦郡三崎町一四五八

家運の隆昌久しくして子孫亦祖先の聲譽を損せず而も同一の家業を繼承し得るの家は極めて稀なり西諺に「積善有徳の餘慶累疊して此に長久の家を作る」と我が杉田家の如き蓋し之れならんか。

杉田家の暖簾は頗る古し當主より八代前相生屋佐右衛門氏始て此地に雜貨商を営みしより春雨秋風二百年累世某業を繼ぎ家憲愈々張り業基益々固く以て先代平六氏に至て更に著る平六氏盛望一郷を歴し公共の事に盡瘁する所多く明治四十四年の頃消防小頭を命ぜられ後組頭に進み大正二年三崎町町會議員に選ばれ一期にして將來ある生涯を残し僅に三十七歳の壯年を以て町民哀惜の裡に早逝せられたり人生の

不幸短命より甚しきはなし昔孔子は顔回を悼んで曰く不幸短命にして死すと氏は其齡に及ばざる三歳にして死せる。

當主順一氏は平六氏の長男なり明治三十一年八月八日に生る先考卒するや氏未だ少く十六歳に滿たずして大正二年家督を相續し専ら賢母あさ子刀自監督の下に長ず當時刀自も三十五歳に過ぎず一意氏の成長を樂む今五十三歳にして夫人やの氏の家政を助け愛孫の撫育に餘念なし氏は其名の如く「温順一至」の人にして社會の信望頗る厚く米穀酒類雜貨諸油の販賣の餘力を以て町發展の爲に盡し三崎町社會委員の囑託を受け信條の徹底を期しつゝあり又曾て近衛歩兵聯隊に入營し以て血税の義務を果せり家には賢母と眞妻と而して謙次君佐四郎君等四男二女あり。

川島秀藏氏

横須賀市佐野町三二一



氏の生家川島氏は不入斗及び其附近一帯に於ける

名門家なり川島の姓は當時徳川幕府上下許せられたる苗氏なり先考傳吉氏學才あり

り智能あるの士にて不入斗全部の名主として盛望一郷に高し明治四十年五十四歳にして歿せられ北下浦野五明山最寶寺に葬り法然と法諡す長男元八氏其家を繼ぎ其名を襲ふ氏に兄弟三人姉妹三人あり氏は其二男なり。

明治十五年六月十日不入斗二百二十九番地の邸に生れ同四十一年年齡二十七歳にして分家すると同時

に質屋業を営む之より先明治三十五年徵募せられて騎兵聯隊に入り三十七八年役の起るや今の元帥奥大將の率ゆる第二軍に従ひ其中堅となりて先づ前面の露兵を撃攘したるを初めとして各地に轉戦の後更に軍神乃木大將の率ゆる第三師團に屬し血河屍山の間を馳驅して殊勳あり凱旋後勳八等白色桐葉章及び功七級金鷄勳章を賜はるの光榮に浴す。

氏は斯の如く武勳あると共に共同奉仕の念極めて篤く郷黨の爲に謀る所大なり佐野町四區部會會計幹事及評議員たり部會は明治四十三年の頃創立せしものにして其當初より推舉せられて今日に至る大震災當時氏の勇敢なる動作と深淵なる熱情は特記を要す可き一事にして平素寡黙温和堅實一遍の營業振りに比し其人を異にするの感あらしめ後市長より特別の功勞者として賞狀及木杯の贈與を受けたり。

氏は野球に興味を持するの外別に記すべき趣味を有せず唯だ地方開發に就て思考すると共に家業の繁榮策を講ずるを以て樂しむ。

加藤 勝藏氏

横須賀市坂本町二六



誰か現代既成政黨を以て眞面目なる爲政黨の集團なりと斷言し得るか日本の社會改造家を以て誠意あり秩序ある實行者なりと明言し得るか國家及資本家を虚無に歸せしめんとする者ならざれば労働者及下層民に虐刃を加へんとする者なりと豪語するも赤心より之を否定し能はざる可し恐るべきは社會主義にもあらず勞資争議にもあらず此を過激化せしめ之を異動化せしむる思想の究迫と生活の缺乏にあり物質上の不安を除き思想上の自由を與へ隱健正常なる發達を遂げしむ可く聲援助力

を純なる立場に於て疾呼實行しうるの人は眞に今代の要求する最大人士なり。

加藤勝藏氏は第十四回國際萬國労働會議に内務大臣の推選に依り出席したる社會民衆黨選出横須賀市會議員にして大正十三年以來經任し又同黨執行委員たり社會問題に對しては民間労働と趣を異にする資本主義官業労働主體に於て國家中堅の産業標準を基調し現在労働標準の低下をシベルに到達さす可く萬難を排し以て嚴然として立んとするに在り。

氏は明治十一年七月十八日衣笠城下現在の地に生る衣笠城は治承の昔三浦義明霜髮雪眉の身を以て島山重忠と戦ひ孤忠を蛭ヶ島の源公子に表したる處氏今日の苦節何れの日か酬ひられて源幕府の其の如く抱負の實現を見るの時は遠き將來を待たざる可し。曾て先帝陛下皇太子にましませし時電氣技術上の功勞者として木杯の下賜を拜し資性剛毅果斷動せざる山の如き巨膽の持主なり。

近藤 德寧氏

足柄下郡吉濱村鍛冶屋三七三



現代宗教家の使命は實に現代其のものを拯ふにあり。我が宗教家中には動もすれば世俗の外に高踏する者多きは甚だ嘆かはしき事なり。斯時、黄檗宗本光山瑞應寺住職にして神靜學院長たる吾が近藤德寧氏が衆生濟度に精進を續くる事は意とするに足る。氏は先代住職近藤梅芳氏の次男に生れ、祖先是愛知縣丹羽郡扶桑村にて名門の間を高く舊家と謂はれり。初め京都宇治にある本山黄檗山侶營の宗學本校に學び明治二十七年卒業更らに明治三十二年本山禪堂(專問道場)に宗教哲學を專攻

する事三ヶ年、明治三十六年嚴父の跡を繼ぎて當寺の住職となり、越えて明治四十一年に本山會計主任大正七年宗務本院執事長に推され大正十一年に至るまで熱意誠勵を以つて萬事を處理し、多大の功績を残して去るや、更らに宗會議員に當選し、同時に宗會議長、參事員となる。昭和二年一月以來宗務取締本年二月再び宗會議員に推され尙また大正十四年より産業開發を主眼として、信用販賣購買組合「康子社」を創設するに盡瘁し自ら常務理事となり、昭和二年以降は組合長に推薦されし事に依りても氏の如何に徳望高きか々熟知さる。一方に於いて氏は從來の學校教育の缺陷あるを痛嘆し、遂に三大詔勅の御聖旨を體し本邦固有の忠君愛國、質實剛健の精神養成を主眼としたる中等程度の神靜學院を大正十五年三月創立し、其の校長となり又親しく教鞭を執りて幾多有爲なる人材を世に出す事に努め、育英家としても社會に貢獻する處多し。

小澤淳三氏

小田原町新玉三ノ四五一

小田原青物市場取締役として隆々の名を博し同町財界に重きをなせる小澤氏の祖は長野縣東築摩郡小野村字飯沼に住す小野村に小澤氏多し皆名門を以て聞ゆ氏の家は其總本家なり小野哲郎氏横濱に來り成功をなす其懇誘に依り祖先傳來の郷土を出で祖父喜十郎氏當地に來る時に徳川幕府の末期にあり偶々小田原藩主大久保侯幕府の命を奉じ京都守護に任ず喜十郎氏人足頭として京都に隨ふ此際京都小田原間を往復數回に及び勤勞甚だ力めたり大久保侯退職後尙仕へて身を終ふ喜十郎氏の長男を柳吉氏と謂ふ即ち氏の嚴父也。

柳吉氏頗る商才あり智謀に長ず明治四十四年株式

會社小田原青物市場を創立し其取締役となり改選を受くる十七回現在に及ぶ又小田原瓦斯會社を起して其取締役推され更に第三鐵道株式會社を發起し町會議員に擧げられ町政の事に盡す事大なり。

當主淳三氏は明治十九年七月二十三日柳吉氏の長男として生れ明治二十八年東京市立中學校を卒業し郷に歸り小田原青物市場取締役に就任し年少氣銳の資を以て同地財界に飛躍せられ父子相並んで隆々たる名聲を馳せり真に小田原實業界の美觀なり氏の資性高邁にして顯知なるは能く父君に類し舉措穩健にして堅實なるは甚だ祖父に似たり加ふるに氏は前途尙ほ春秋に富む將來の造詣計る可からざるあらん。

夫人を榮氏と云ふ長女貞子嬢岡山縣大町高女出身なり男喜一郎氏成立商業學校在學中なり他に四男あり幼にして小學校にあり。

加藤角太郎氏

湯ヶ原町宮土

文化生活は精神生活の發達を意味する。必要的にも趣味的にも精神の要求を満してゆく事は、文明の進歩と共に愈々緊切となりゆく。現今の如く複雑多岐に亘る生活状態に於て精神慰安は痛切を極はめたるため旅行熱は次第に勃興し、從つて各地名勝温泉地に於ては益々宣傳に努めたるが東京横濱近郊に於ては箱根、熱海兩温泉に次で湯ヶ原が一般に知られり。湯ヶ原温泉の歴史は敷島旅館經營者加藤廣吉氏の努力に初まれりと稱して可なり。未だ明治十七年頃、同温泉は組織設備なく僅かに敷島旅館のみ當時二階建の大規模を以つて知られ正に群鷄中の一鶴たる感あれり。湯ヶ原と云へば湯屋即ち敷島館を指し湯屋と云へば湯ヶ原の代名詞の如く著名なりしが、遊ぶ者稀にして偶々今井兼年少將川崎陸軍會計

監督官の滞在せられて漸く知られ、明治二十八年日清の役終るや兩氏の縁故に依り傷病兵來りて療養し大いに効果ありたる爲め名聲頓に高くなり一般に普及されり。

現主角太郎氏は明治三十五年家督を繼ぎ同地發展の爲め父君の志を亭け盡瘁せり。又村會議員として自治社會公共事業に貢獻すること十二ヶ年の久しきに亘り特に銀盃を贈られり。明治二十七年丁年となり麻布三聯隊に入營し、翌八年日清役出征の爲朝鮮に至りしも休戦となりて同地守備隊となり、三十七年再び日露の役に召集され旅順攻撃軍に従ひ後奉天に轉戦し、硝煙彈雨の裡に奮戦し、遂に名譽の負傷を受け歸還され、自家温泉に靜養し三ヶ年にて全く快復したる自身の經驗によりその功能の顯著なる事を汎く宣傳し、同温泉の發展に努めたり。父子二代に亘り銳々として發展對策に腐心したる努力は今日湯ヶ原温泉の基礎をなしたものと云ふべく敷島館の名は、同温泉開拓者として永久に記されるならん。

遠藤 明氏

川崎市下並木六八



格を以つて是れが任に當り智徳合致の教育を實施し、着々とその成果を挙げ居る

我が遠藤明氏は、愛用郡玉川村遠藤新之助氏の息なり。生家の祖先是藤原氏の末裔、土地の舊家として名望高く、岳父新之助氏は夙に地方開發の念に篤く、衆人より畏敬され推されて村會議員となるや、村共有財産の確立の爲め自ら主體となり活躍し、遂に現在の玉川村共有財産管理制の實施、又村青年團の向

上發展等凡ゆる公共事業に献身的努力をなし、全く村の先覺者として衆望あり。

斯く理解深き父を持つる氏は、學序を追ふて明治四十二年縣立第三中學を卒業するや、國民教育の重大なる使命を感じ身を育英界に投ずべく決意し、更らに鎌倉師範に學び、日夜學にいそしむ事數ヶ年明治四十三年同校二部を卒業し、直ちに愛用郡南依智小學校に奉職し、次て玉川村小學校に轉じ、新進博學なる訓導として兒童父兄の欽慕の的となり、又同地青年團幹事長として補習教育にも盡瘁し、大正八年同校々長に、十二年川崎市宮前小學校主席訓導に昭和二年小田原小學校長等を歴任し、現在幸町小學校長に任ぜられ、其功績亦多しとせり。昨年は市より選ばれて滿鮮の教育状態の視察を命ぜられ榮譽を擔ひ、教育の根本義は智育の練磨と共に徳育、體育の渾然たる發達にありと確信し、此の點に留意し頗る秩序ある教育方針を以つて育英事業に貢献しつゝ、あり。家庭には夫人やす子氏あり、三田高女出身の秀才にして琴活花手藝に堪能なり。

黒田 豊吉氏

横須賀市公町三三〇



極め滋養價及熱量價に就て緻密なる評定普及的に發表し盡されたる觀あるも學者

現代科學の進歩に沿ひ食料品の化學的研究精細をに依り甲是乙非の事なきにあらざり時としては往時害物視せられたるもの今日の有効物となり今日の有効物も他日の有害物たるを保し難き感なきにあらざり況んや害の半面に効あり効の半面に害あるは事物の常なり獨り牛乳の効果に到りては異日は知らず現代に在ては先づ完全に近き滋養品なりと謂ふに異論なかる可し我邦に於ても最も克く最も遍く普及せり。

黒田家の祖先是三笠村字黒田より出て黒田佐太郎氏と謂ふ村内屈指の名望家にして里人尊敬の中心たりし家なり氏は明治十年七月三日西南戰役正に酣中に在し時に生れ同三十三年牛乳業を現地に開始せり氏時未だ二十三歳の青年に過ぎざりしなり氏の堅實にして而も進取的なる性格能く此業に適し最も早く高温殺菌法を施し尙母牛に深き注意を拂ふを以て好評を博し現在海軍關係の諸方面に供給を主として當地最大なる勢力を有する一人なりと聞く氏の公共上に於ける貢献も甚だ少からず現に同町部會評議員及横須賀市衛生組合長に推舉せられ其向上發展に盡瘁し曾て第一回國勢調査の事あるや其委員に擧げられ彼の複雑なる統計資料に基本たる可き事務に服し正確たる調査を遂げ記念章を授けられたる等數次ならず其趣味としては植木盆栽と園芸等にあり而して令夫人かん氏に岩雄君うた嬢あり嬢は和洋裁縫高等女學校の出身なり。

河原桂之助氏

横須賀市公卿三三八二



進する吾が河原桂之助氏は維新の風雲急なる慶應二年十月神奈川縣都築郡田奈村

長津田に生れたり。生家は田奈村宿の舊家として、祖父久右衛門氏は五十九ヶ村の大總代をつとめ代々名主として知られたり。父久左衛門氏は明治新政と共に田奈村戸長の役となり、その次男たる氏は、小學校を郷里にて過し更らに横濱に赴き横濱學館に入りて勉學したるが卒業と共に尙篤學の志深き氏は獨學することに依つて心を慰さめ居れり。明治二十一

年九月海軍警吏に任用せられ、二十三年その官制廢止となるに及び、海軍筆記を命ぜられり。二十七年日清の役に際しては軍艦橋立乗組員として出征し、黃海其他に於て身命を賭して活躍したり。凱旋後は勳八等に叙せられ、越えて日露の役發するや海軍經理部詰として内地勤務に従ひ、功により勳七等を賜はる光榮に浴したり。大正二年二月退官と共に横須賀に歸り、公卿郵便局長を任命せられ、今後の一生を斯くして通信事務の發展に供すべく、精勵謹直、迅速に事を處理するに努めたり。其間にありて關東銀行代理店長、常盤生命、東邦火災の代理店をも兼ね、未だ壯者を凌ぐ元氣を有せり。

氏は又公共事業の發展に就いて留意する處あり、教育會館建設顧問、在郷軍人池ノ端部會長、赤十字社調査委員其他多くの名譽職に推舉せられ、殊に大正十三年には人命救助、夜警、配給救護等に依り感謝を授けられた功績は、如何に氏がかうした方面に盡瘁せるかを雄辯に物語るものなり。趣味として書畫、刀劍を愛玩する點よりしても高潔なる人格を想像するに難からず。

所 長 生 氏

横濱市中區元町



に膏汗を搾りたる所で、機會を掴むの明に缺けたるは徒勞に終る事當然なり。然

し言ひ易くして爲し難く、たゞ其の人の機智先見の閃めきに依つて得らるるものなり、加ふるに堅忍不拔の精神と熱心誠實に努力すること必要なり。斯くしてこそ初めて成功の彼岸に達し得らるるものなり我が所長生氏は年齒未だ弱少なるにも拘らず、よく斯業の先輩と伍して業績をあげ居るは、明敏なる才能と熱誠なる努力とが渾然一致し、機會を把握す

るに巧みなるに因をなす。

氏は栃木縣田沼町富田由藏氏の三男として明治三十九年七月産聲をあげ、同家が堀米町に移るに及び同町高等小學校を卒業したる十六歳の春、青雲の志を抱き上京して、日本橋區小傳馬町三丁目にある木綿問屋の老舗杉浦卯之助商店に入り、夙夜精勵主家の爲めに忠勤をはげみ大いに主家の信用を得るに至る。五ヶ年にして同店を辭し、通旅籠町織物問屋高新商店にて、新に廣幅織物を販賣するに際し、特に招かれて高新商店に入り廣幅部を擔當して、その販路に腐心し自ら京濱間を往來して業績を擧ぐることに努力したり。大正十五年頃より時代の進展に應じ廣幅物の需要頓みに増加し、同商店にても益々その擴張を圖る盛況を來したり。氏のかくした熱誠は取引先たる横濱市元町所春吉氏のいたく感動する所となり懇請されて遂に昭和四年五月同氏長女照子と華燭の典を擧げ、所家の人と爲り、益々業務に精勵して今日の盛況を得るに至りたり。年齒若き氏の前途こそ蓋し洋々たるものなり。先代春吉氏は横濱斯業間の古顔にして始めて廣幅織物を當市に於て宣傳販賣に努めし先見者なりと謂ふ。

角羽善次郎氏

横濱京中區大通三丁目四十七店
横濱市本牧町二二三三八 住宅



高岡は越中の名邑なり其殷賑或は富山に勝ると
稱せられ銅器
漆器を産す氏
は此地に於て
明治九年六月
五日同市小馬
出町に生る先
代勘作氏明治十七年歿後長男勘左衛門氏其業を繼ぎ
高岡に於て輸出銅器を製作し製品を東京横濱等に
出し外人に販賣を試みたり是れ高岡銅器輸出製品の
濫觴なり後販路の擴大に従ひ不便を感じしを以て次
兄嘉兵衛氏をして横濱に店を出さしめ専門に販賣せ
しめたりしに明治二十五年嘉兵衛氏病歿せられたる
を以て氏は即ち其後を繼承す。

氏の横濱の店に移りしは十七歳の一少年の時なり
此の乳臭未だ脱せざる黄嘴の身を以て世界有数の大
港場に出て殊に外人相手に取引をなせんとする勇猛
心は既に尋常一遍の人にあらざるを知る可し四圍の
人より危ぶまれたる少年店主は着々計畫を誤らず能
く外人の嗜好を察知し新趣味を製品の上に加へ動物
人物を鑄造して販賣を始めしは實に氏の創意に懸れ
り爾來星移り物變り社會の變轉常なきも氏の經營せ
る事業は一路邁進遂に今日の盛を成すに至れり就中
明治三十七年日露戰役將に旺ならんとするの頃より
大正の中年歐洲大戰の頃に至る迄は該業の最も興振
せし所にして氏の最も躍進せる時に屬す此間數々海
外諸博覽會に出品し賞狀金銀牌の授領を受くる事甚
だ多し。
今夫人知興子氏昭和二年に病歿し長男善次氏家に
在り専ら氏の業務を授けらる長女ゆき子嬢三女寛子
嬢共に既に伉儷を得て他に嫁せられ氏は唯だ浮世繪
に業餘の勞を慰せらる。

八木下吉次氏

横濱市神奈川區子安町二九六八



八木下氏は生麥に於ける名門の家にして代々名主
を勤む彼の攘
夷實行の形勢
を作り幕府崩
潰の速進を醸
せる文久二年
に起りたる生
麥事變當時は
祖父平兵衛門氏司村の代にあり地方の混亂紛擾せる
狀今日より想見すべきものあり此間に處し能く制節
を保有したる祖父は決して尋常の人にあらざる可し
平兵衛氏の子留吉氏は即ち氏の父君にして其二男也
明治三十九年日露大戰漸く收まり世は凱旋の夢に
酔ふの時物々たる少年青雲の志歴し難く奮然十八歳
の身を挺し東京に出て日本橋區小傳馬町銅鐵商水橋
商店に入り實社會の辛酸を體驗し精勵四年再び横濱
に歸りたり抑も氏は富裕の家に生れ父母鐘愛の中に

長じ所謂寒煖を知らざるの人なる可きに氏の霸氣
は斯かる環境に成人するを好まず自ら進みて實社會
の第一線に立んとして他人の家に心丹を修練せり此
一事以て氏が性格の全部を推量するに足るべし大正
三年の秋子安に於て藥種商を開店し基年ならずして
異數の發展を致したるも彼の大震災に會し一物を留
めず烏有に歸せり。
氏の剛毅なる不撓不屈の精神は捲土重來の任に耐
へ死線を超へて活路を求め清涼飲料水の製造販賣を
目論み南太田町一五六四番へ横濱礦泉所を設立し子
安町に販賣所を置きて營業を創始せるに數年ならず
して異常の發展を遂げ業界を風靡するに至れり殊に
其の製品横濱サイダー、ハーバーサイダーは品質の
優異と風味の高雅とを以て有名なり今や確固たる基
礎の上に堅實なる營業方針を持する爲財界の不況に
も負けず益々繁榮の途を辿りつゝあり。氏は頗る銃
獵に巧にして全國有名の狩獵地に氏の足跡を印せざ
るなきに至れり。久子夫人に文子嬢正義君あり文子
嬢は鶴見高女出身にして大森藥學校に正義君は縣立
第三中學三年生に在り。

金子喜久彌氏

横濱市中區中村町四二八〇



龍峰の名僧以天和尙長享年長氏の駿河に赴くを送り歌て曰く
「欲遂功名出帝幾預知寒外振金威君他日復東地分我一簣烟雲礎」蓋し早雲は北條時行の曾孫なり故に東海の地を復せばの言ありしなり後長氏大いに興り明應四年乙卯春二月小田原城を抜き茲に居して以來小田原の名天下に聞えて今日に及ぶ。
隠れたる染色界の第一人者金子喜久彌氏は此地の人資性温健思慮周密奇才天外より来る如き人にあらず歩々千里に達するの人なり實業家と稱するよりも

寧ろ事務家なり氏の生れたるは徳川幕府將に終焉の幕を閉んとする慶應貳年にあり伊太利の染色革命家カルリンと生年を一にせるは又一奇とするに足る。明治十九年横濱市に來り始め絹物商として活躍せしも意の如くならず後七八年の歳月を銀行員生活に送りたるも遇々我國當時の染色界の比較的幼稚なりしを歎じ其向上改善の研究に意を注ぎつゝありし際氏の絹物商時代よりの親交ありし出口染物工場主の先代の懇望に依り銀行界を退き茲に同工場の人となれり。

爾來春秋殆んど四十年先代を終り今代に至り精勤驚く可く雨の朝風の夕氏の忠實なる姿を場内に見ざるなく日曜日も祭日も氏には恵れざる日にして汝々吃々出口家の爲に盡し染色法の研究に没頭して何等の趣味何等の享樂を採らず一念唯だ業務に盡瘁して毫の倦色なく老の將に至らんとするを知らざる所に氏の本領を存せり夫人をさく子氏と謂ふ一男あり富藏氏此れなり現に生絲會社に在り。

太田佐兵衛氏

横濱市神奈川區青木町三三



太田商會は大横濱市の有する最大なる老舗の一なり其創業は今歲昭和五年を去る八十有八年前光仁天皇の御宇弘化二年乙巳五月にあり初代太田佐兵衛氏高島山麓の青木町に營業所を設け吳服太物販賣を創め刻苦精勵徐々に其基礎を確立し二世三世の佐兵衛氏を経て遂に當代に到る創業後五年現營業所に移り眞品廉賣現金取引を旨とし一家一業主義を遵奉して一意業務の發展を計り累代祖宗の遺風を守りて今日の盛況を見るに至れり大正十二年の震災に會し店舗商品悉く烏有に歸せしも歴代

の投資其宜しきを得たるに依り復興も些の支障無く同年十月五日同所に假營業所を設け直に開業するを得たり越へて昭和二年現在の鐵筋コンクリート造四層店舗完成して華々しく開業し吳服太物を主とせる百貨店を創めたり。

當主四代佐兵衛氏は明治三十年養嗣子として太田家に入り大正十二年先代歿後家督を相續し一意斯業に奮勵努力し大震災後の復興に善處して誤らず益々家運の進展を計り克く今日の大成を見るに至る先代の明眼感ず可し當主又公共に盡す所多し幸ヶ谷小學校後援會長、横濱吳服店組合委員、横濱商工會議所議員、洲崎神社復興建築委員長等に推舉せられ市勢の發展に寄與する事多大なり。

由來同家は温厚篤實なる人格者の輩出を以て鳴る令夫人かふ子氏亦婦徳圓滿の人にして殊に子女教養に力められ傍ら社會的に奉仕する所尠からず昭和五年紺綬褒章を授與せられたり三息五嬢あり皆健全なる秀才也。

近藤進太郎氏

横濱市中區本牧二五〇〇

一見するや柔かな印象を受け對者に好感を與へ、内面的に強靱さを有し商才に富むのは愛知縣人の特質性とも云ふべき郷土的氣風を繼承したる氏は、事業に従ふにも終始一貫その特性を發揮し、着々として今日の位置を築きたり。氏は明治十三年十一月愛知縣國府町近藤嘉吉氏の長男として生れ、長ずるに及び生糸國たる日本に於ては必ず將來に製糸業が有望事業なりと着眼し、その凡べてに亘り細心研究の上、明治三十六年同地にて年少の身をも顧みず製糸業を第一聲に擧げ、一日として倦む所なく業務の發展に没頭し其間に在りて、同業者相互の連絡と共榮の實を擧ぐる爲め、自ら率先して首唱者となり、實

飯部製糸業者を總括したる共同販賣組合資産社を組織する爲め極力奔走し、遂に之れが完成を見たる功績は多とすべきなり。斯くして奮闘する中、當時横濱に於て著名なる同業者田中新七商店主より衆に卓越せる手腕力量を認められ、同店の整理者として入店をしきりに懲通せらるゝや、氏は從來取引關係先として常に知遇を受けたる恩義に感動し、漸次盛況に赴く自己の業務を令弟福四郎君に一切を委任したる後、大正三年冬、親しく横濱市に田中商店を訪ね爾今至難事たる同店の整理に専心する所あり、或る時は長野縣地方に出張し同地の製糸業を監督整理に腐心し或は歸濱して整理事務を擔當する等、殆んど寧日なく精根を盡して努力したる結果、氏の聲望は逐日甚大の期待を懸けらるゝに至れり。氏は趣味として謠曲をよくし尙ほ盆裁に關しては二十年來造詣深しと聞く。

大野茂弘氏

横濱市中區久保町一〇三九

千葉縣君津郡吉野村相ヶ谷に彌衛門山の名稱すらある如く、その昔徳川幕府時代より代々彌衛門を名乗る代官あり、十五代彌衛門は明敏なる手腕家と謳はれたるが、事に挫していたく感ずる處あり、仁見村に隱棲したる後、木更津の宿に出で、仁見屋呉服店を開業し、營々家業にいそしみたる爲め、忽ち信望を集め、木更津江戸間に於ては同店に比肩する店舗なかりきと謂ふ。氏の父君たる與兵衛氏は十七代目の當主として生を享け、資性剛直にして超人的風貌の所有者なり、夙に東京に出で、イギリス法律學校に學びて研究怠りなく、大隈重信等が改進黨を組織したるに共鳴し入黨して大いに盡すところあり

たり。明治三十七年日露の役には軍屬として出征し、凱旋後は横須賀市に來りて活躍し、千葉縣同郷會を作り、同郷人との相互親睦を圖るなど社會的に貢献する處多く、現遷相小泉又次郎氏等をも相知るに至れり。斯く奮闘家與兵衛氏の長男たる茂弘氏は郷里の中學校を卒業し、更らに數ヶ年を東京に出で勉學し、大正八年神奈川縣農工銀行に迎へられ、初めて實社會にスタートを切り、爾來今日に至るまで十年一日の如く孜々として長く自己の責務に精進格勵し益々信望を博したり。資性謹直にして謙讓の美德を有する人格は、いたく町民の畏敬する所となり、大正十三年以來、推されて東青年會長、衛生組合幹事、町内會副會長、小學校後援會理事等の公職に就き、年少若冠の身を以つて父君同様、社會施設に裨益したり。家庭には貞淑の譽れ高き夫人との間に一男あり、常に團圓堂に満てり。

小久江作吉氏

横須賀市若松町七〇



意志の堅否は有爲の人物と凡人との分かるゝ所也
智のみにて事業の成るものに非ず赫々たる功業の裏面には必ず鞏固なる意志ひそめりとかや「丈夫はしかまつ事のあればこそしげき歎きも堪え忍ぶらめ」と藤原俊成卿は詠じたり男子すべからく意志強固ならざる可からず敏銳は天より出づ人の能く左右すべきに非ざるも意志の堅否は人力を以て變化せしむべし氏は意志の鍛錬を極めたるの人なり揮身の努力を盡すの人なり所謂裸一貫の赤裸々たる身より起り忍苦三十年遂に今日の盛を致

したるは氏の智のみに非らざるなり氏の策にのみ非らざるなり實に意志強固なる賜物なり。
氏は愛知縣碧海郡荻谷村の人明治八年十月二十三日小久江家の次男に生る父君は米穀商及荷車製造業を經營し剛毅朴直の名は遠近に高し氏も亦三河人士の耐苦不撓なる通有性を多分に享有せるの人明治三十六年十月始めて横須賀市に來り具さに艱難を嘗め轉た人生行路の難きを體驗して刻苦耐辛涙溢ふるゝ迄の努力と血滲む迄の奮闘を連續して終始一貫鐵類屑物類、空瓶等の問屋を業とし今や堂々たる店舗を有するに至りたり然れども此の店舗の有する一本の支柱も一個の煉瓦も盡く氏が血と脂の結晶にあらざるなきを忘る可からず薄志弱行なる現代の青年諸子にして氏の經路を聞きて尙ほ現代思想の違反者なりと嘲笑し得るの勇氣ありや。
氏に興味無し事業即ち趣味なり精練の夫人な天子氏に喜寅君雪枝嬢の二子あり。

田川昇氏

三浦郡田浦町驛前

田川氏は此地草創家の一門なり宗家は昔三浦沿岸魚類の集散地にて大江戸肴の賄所たりし田浦當時既に名高き豪家なり先代兼吉氏其家より分れしに端を發す先代は米穀近海に投錨し又關東大震災ありし安政二年に生れ或る意味に於て日本文化の上陸地たる浦賀に近く横濱又指呼の間にありて奔馬の如き進展地帯の間に長じたる氏の進歩的なる性格者たるは偶然にあらざる也。

初め養雞業に深き趣味を有し分立後専ら茲に従ひ後明治三十七年田浦に於て運送業を始め氏の氣宇浩養にして闊達果斷なるは頗る此業に適し地方の發展と共に漸次隆昌を招き町内の信望は自然に加はり選

れて町會たりし事あり又日露戦後日進春日の兩艦を購入當時隱密の間に活躍せし隠れたる功勞者にてありしが大正十三年六十五歳を以て歿せらる。

氏は先代兼吉氏の長男にして明治二十二年柘榴燃ゆる六月二十五日其邸に生れ夙に東京京花中學校を卒業し更に開成中學に轉じ業を了へて早稻田大學に入り政治經濟科を出で明治四十五年家に歸りて父君を翼け先考歿するに及び茲に業を繼ぎ家督を相續せらる氏既に學あり識あり而して多年の經驗と祖傳の地盤を有す商勢の伸張家運の隆昌を招き今日の大成就を告ぐるは當然の結果なりと謂ふ可し。

東海道新橋土生間運送業組合委員及横須賀線同業組合長に推される氏は家庭に於ても亦賑ふ夫子さよ子氏に長男甫君次男靖次君三男真藏君四男弘司君長女茂子嬢あり。

千代田宗禎氏

神奈川縣相州湯本

箱根湯本の景勝邦内に聞ゆ早雲寺は此地に在現住を千代田宗禎師と云ふ明治九年三月二十四日の生にして東京品川の出身なり十一歳下谷廣徳寺の朝木英叟師に就き内典を研究し十九歳京都大徳寺管長菅廣州和尚就に就き禪學研究する事二十六歳に及ぶ明治四十年早雲寺住職を命ぜらる大正の震災に半壞に歸したるも師の猷身的奔走に依り今や復興の域に達せり寺は往昔金革の代に於て孤獨頼るなき一浪客より起り徒手關八州を創定したる英傑北條早雲の遺志により氏綱の建立して宗清以天和尙を聘し開山となし尋て後奈良天皇の勅願寺となれり實に今の早雲寺是れなり。

北條氏は平氏に出で諱を長氏と云ふ桓武天皇の後裔北條時政の遠孫行長の子なり晩年薙髮して早雲と號す高曾祖時行鎌倉に敗れ京師に趣くの途次暴風に逢ひ伊勢に漂著す早雲祖父の遺志を奉し壯圖を謀り諸國に流寓し外戚の伊勢氏を冒し自ら伊勢新九郎と稱す時の名僧龍峰の宗清藏主と相識るや深く宗清も亦公の奇表あるを知り厚く此を遇し別るゝに臨み詩を賦して送る長氏大いに悦び遂に師資の義を約す後長氏大いに興り八州に覇たるに及び常に宗清の舊約を想ひ寤寐も忘るゝ能はざるも戰亂相續き未だ其約を果さずして卒す遺命して其志を繼がしめたり現に幾多の寶物を有す殊に北條早雲の像と氏政使用の文臺硯箱は國寶に編入す現住宗禎師其肖像を縮寫し北條早雲公略傳を誌し廣く此を頒布せらる師の同寺に盡さるゝ成績は蓋し永久に記念せらるゝならん。

倉田佐七氏

横濱市神奈川區神奈川町三四五



魚問屋倉田商店は神奈川魚市場創始者の一軒にして三代の歴史を有する老舗なり往昔神奈川新町一圓は殆んど魚問屋なりし當初既に初代佐七氏の名ありたるも當代佐七氏に及んで愈々著れたり當主佐七氏は明治四年五月三十日先代佐七氏の嗣子に生れ前名を政治郎氏と云ふ先代歿せらるゝや其跡を繼ぎ佐七氏と改名せり敏活思慮に富み時運に適應して機先を察するの明あり加ふるに奮闘努力を累ね遂に今日の大成を來し得たるの人なり。

神奈川市場は從來漁業家と魚業家の相對賣買市場

にして價格一定せず時間確限なく取引不完全にして不便尠からざるあり氏茲に於て率先首唱して競賣法に改善し取引上根本よりの改革を計りしより取引の圓滿受渡の敏活は大に需用供給に利する所ありて水産上功勞偉大なりとして時の知事内田康哉氏より賞金賞状の受與を受け時に氏二十歳の青年なり以て智能手腕の卓越なるを察するに足る。

個人取引關係としては朝鮮、九州、エドロフ、北海道方面より供給を仰ぎ同業者中第一位を占め其公共的方面には神奈川魚問屋組合長の重職にあり斯業間の偉勳者として敬せられ又夙々より町區の要職に推され現に町衛生組合副組長、熊野神社氏子總代、第一回國勢調査委員に擧げられ共に令名を博す男子此に至て人としての責務を盡し得たりと謂ふべきか夫人濱子氏に熊次郎氏勝次郎氏榮藏氏國藏氏達郎氏藏氏あり熊次郎氏の夫人千代子氏に二兒あり一家殷賑にして和氣常に堂に滿つ。

吉田鈴之助氏

横浜市磯子區宮ノ下八九九

吉田家は代々東京下谷にありて、徳川幕府權勢の頃その名を轟かせり旗本八萬騎の一人として知られり。

氏は元治元年中秋同じく下谷西宮家に生れ、長ずるに及び故ありて吉田氏に入り同家を繼げり。實父大助氏は慶應年間より貿易中心地たる横濱港に出て、當時外人商會として最古の歴史を持ち第一流たるシーベル、ヘグナー商會に入り、輸入部を擔當して巧みなる商才を以て信望を得たり。氏も明治初年時代より實父の膝下に於て薰陶され、明治十五年同じく商會に勤務し、専ら輸出部を扱ひ、生糸買入方面に従事したり。明治二十年吉田家の人となるも引

き續き商會に在りて活動し、遂に生糸買入部主任となり、益々その手腕を發揮したり。明治四十年實父大助氏も病歿したる後はよく實父大助氏の遺志を奉じて、同商會發展の爲めに極力勵心し、今日の基礎を築きたる偉大なる功績は、長く同商會の歴史を飾るものなり。

忍耐努力は成功の母と古言にあるが如く、氏の同商會に勤続したる四十七年間の努力忍耐は誠に世の範として稱すべく、昭和四年九月功成り名遂げて同商會を辭するや、直ちに顧問として推舉せられ、今尙斯界に重きをなせり。

家庭には先年亡くなりし夫人との間に五男一女あり、頗る清福に恵ぐまれ、團聚せり、長男五郎氏は大正四年慶應大學法科を卒業したる有爲の士、直ちにヘグナー商會に入りて輸出部生糸買入部を擔當し活躍し、父君の後繼者として令名あり。

小山定吉氏

横須賀市小川町二



篤厚は君子の徳なり人にして篤實なくんば百行ありとも吾與み

せずとは曾意子の謂ひなり安藤帶刀直次は横須賀の舊領主なり初め

家康諸功臣を賞し各一萬石の地を給す直次のみ横須賀五千石を賜ふ直次其不當を色にせず精勤十歳を累ぬ一夕家康側臣成瀬安藤等に質し先に汝等に一萬石を與ふ如何なる治績を得しかと成瀬答ふるに安藤の領有五千石なる旨を以てす家康驚て我誤てり横須賀は一萬石なりと信ぜしなり即ち別に五千石を得へ年々の不足高五千石を一時に給せりとぞ篤厚の徳斯く

の如き小山定吉氏は篤厚の人なり善隣の人なり事に大小あるも諸事直次の隠忍あり。

小山家は長く横須賀楠ヶ浦に邸し數世米穀酒類商を業とし篤實を以て自然の家風たり父君徳兵衛氏亦た實直勤儉の人なり氏は明治三年八月十八日其長男に生る能く父祖の業を繼ぎ父祖の意を承けて自治發達に盡瘁し斯業向善に貢獻する所あり横須賀文房具商組合會計、横須賀米穀酒類組合長、三横畜産組合副組長等に推され斯業の重鎮として意思の疏通と向上に努め其他町會議員及横須賀商工會議員等に擧げられ頗る居町の發展に盡さる而して人氏に其趣味を問へば懇懇に曰く吾に趣味なし強て趣味を言へば力行の後額の汗を拭ふの瞬間に在りと其篤厚勤勉の人なるを察するに足る四年前海軍用地とし立退を命ぜられし時男茂次氏に米穀酒類商を譲り別に家を現地に求め今の業を始む茂次氏は横濱商業學校の出身なり令夫人をちよ子氏と呼ぶ。

石渡直次氏

三浦郡田浦町深浦四二七三

大聖孔子語て曰く「不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」と位貴けれども心の貴からざる人あり身富むも心の富まざる人あり實語教に「山高きが故に貴からず木あるを以て貴しとす」寛衣の人菽食の輩も心に貴き木あり心に富の林あれば顔子自在の樂あるべし況んや家に衣食の憂なく身は一郷の老となり思は疾むなく意に耻ずるなき石渡直次氏の如く心寛く體豊かなるは自然の表顯なりとや謂はんかな。

石渡家は三浦郡屈指の舊家なり代々地主として聞ゆ其祖は後陽成天皇の御世にて豊臣氏秀吉の末年なる慶長年間亂を此地に避け農に歸せしに端を發す爾

來三百幾十年平和の村に住み平和の生活をなし連綿昭和の今日に至る迄深き天恵に浴す増して先代與惣右衛門氏は敦厚至純の資を以て現在神奈川縣下有數の高齡八十餘歳を保ち一昨年三年迄町會議員、區長青年團長等の公共自治の事に奔走し廉波騎願の概を有せる人なり。

氏は明治十九年九月二十六日父君與惣右衛門氏の嗣子に生れ昭和四年四月二十五日の齡不惑を超ゆる三歳始めて家督を相續し其業を受く業は米穀酒類販賣にして創業以來三十年の老舗たり天性亦濃厚篤實商策に一點の虚偽を用ひず富を成するに一片の奇略に待たず純正と努力を唯一の商策致富として今日の大を招きたる所に氏の特質を存す今青年團長、社會委員たり。

夫人りん子氏に一女あり美代子嬢と云ふ船越實科高女の秀媛なり。

形岡關藏氏

横濱市本牧二六七三



王政維新の大業は長藩の首唱に基き長藩志士の手に據て成る明治政府の施治と國運の進展と而して憲政の準備を翼參せしは又多く

同縣人士の努力に待ちし所多し其尊く崇き犠牲を供せしは日本史上永久に没せざるの事ならん蓋し豊榮公元就以來誠忠至義の藩風咲きて維新の華と化し凝つて國運の盛を奉ぜしならんも此風獨り藩主及至藩士の間にあらず全州を舉げて瀾漫蓄積の餘力に出づ故に高杉晋作事を擧ぐるに當り叫んで曰く賢愚に上下なく忠否に士民なしと當時駿名無比なる奇兵隊は

此の如くにして造れたり此元氣此意氣今に至て山口出身人士の通有性となりて存す氏は山口縣の人尤も豊かに其性を享けたり。

明治二十五年一月二十二日第二次伊藤内閣の組織せられたる年を以て都濃郡中須村の農家に生る先考を米藏氏と呼び地方の豪家たり氏は其長男にして夙に居村中須小學校を出て同縣立大島商船學校に學びしも途中病を得到底海上生活に適せざるを以て退學を餘儀なくせらる尋て笈を負ふて東京に上りしは氏十九歳の時にして正に明治四十四年にあり後明治大學に入り大正五年其商科を卒業すると同時に東京瓦斯株式會社の招きに應じ精勤二年にして當社に轉じ横濱出張所詰となる氏は意氣の人なり奮闘の人なり事に當りて誠忠何等の私心を挟まず一意會社の爲に盡瘁し爾來十三年孜々として恪勤今日に至りて一日の如し。

令夫人ひで子氏二男一女有りしが不幸夭折せられ僅かに範子嬢のみを残さる。

幡谷高山氏

横濱市中區本牧町二五〇〇

或る一つの仕事に對し自信を持つと云ふ事は、生活の上に非常な力となり。従つて其の仕事が其の人の生活の大部分なる場合、その人の生命ともなるべきものなり。

本邦に於けるカイロプラテック療法の權威者たる我が幡谷高山氏の祖先是代々御典醫として茨城縣猿島郡に住し嚴父恒氏の頃、横濱に出で、幡谷眼科醫院を開業し令名高く、其の三男たる氏は幼少時より醫師たる事に希望を抱き、小學校を卒へしも、家事の都合にて横濱商業學校に入り勉學怠らず、茲に於て氏は奮然蹶起し獨立獨行斃れて後止むの志を以つて明治三十五年渡米を決行し、フイラデルフィア、

カネーデ商科に學び、刻苦勵精の後、優秀の成績にて卒業し、目出度歸朝するや、東洋汽船株式會社に入社し、少壯事務家として稀に見る才能を揮ひ認められて、社長重役等の信任厚く上海支店の樞要なる椅子を與へられ前途益々囑目せらるゝに至りしも、不幸病魔の冒す處となり、呻吟の裡に偶々カイロプラテック治療法を受け、流石の難病たる背椎が平癒せるに感動し該療法を本邦に於て普及實施し凡く醫學界に貢獻せんと志し、再び渡米を斷行して、アイオワ州ダベールボートに於て、ベルマ・スクール・カイロプラテックに入り、親しくドクトル・ビー・ゼー・パルマ博士に教導を受け、研究の結果大正十一年歸朝し、横濱市山下町に初めて治療を開設して、熱心誠意を以つて従事したる爲め、漸く世人に認識されるに至り、震災後は丸ノ内有樂館内に治療所を設けて更らに飛躍を試みつゝあり。

(670)

堀江佑次氏

横濱市中區本牧町三〇四〇

天稟の奇才縦横に走り、或は自己の業務發展に資し、或は公共事業の發達を促す等稀に見る逸材として令名を馳せる人堀江佑次氏の祖先是、かの南北朝時代の忠臣新田義貞の謀將堀口定光の末裔として知られ、實父堀口定吉氏は水野藩士として代々江戸詰なりしも維新改革なるや、千葉縣菊間村に寓せり。氏は幼少時代を横濱にて養育され、明治三十年十二歳にして青雲の大志を立て單身東京に出で、東京攻玉社、東京學院に學び、刻苦精勵の結果十五歳にして中學卒業證書をとり、尙も勉學に志したるも、横濱市南仲通りに叔父大森峰次郎方に在りて、その業務を見習ふと共に餘暇を以つて數學英語を修め、他

日に備ふる所あり。斯くて二十三歳より實社會に立ち、銳意業積をあげ、明治四十三年堀江家を繼ぎ同店に於て活躍を續け、大正五年叔父の代表者たる位置を占め、丸喜商業と改め漸く斯界に頭角を現し、其後丸喜商業澁澤商店機關店なりしも、叔父逝去後は直營となし、丸喜蠶糸取引人、市場代理人となりて取引關係に獨特の手腕を發揮して、現在市場代理人協會幹事の要職に推され、業界稀に見る逸材なり而してかの震災時にありては、横濱貿易復興會の支部員として、荷物引渡に活動し、又取引従業員總代として、横濱の不利益たる神戸市場許可問題に關しては、寢食を忘れ東奔西走せる功績は顯著なり。氏は社會公共方面の發展に就いて常に考慮を怠らず、横濱市青年團の聯合については若尾幾太郎氏と共に盡瘁して完成を見、現在町内衛生組合幹事、港東同志會幹事等、市社會公共育英事業衛生施設等に貢獻する所多く、眞の陰徳家として家望を博くせり。

(671)

小船榮次郎氏

横須賀市中里町九二



小船家は東京の出なり後横須賀に移る先代榮次郎氏長く海軍納入を業とす明治三十一年横須賀海軍御用商の印符を受け盛に海兵團軍需部等の用達を勤む先代は氣骨稜々勁行獨歩の人にして熱し易く解し易き資性あり自己の純情を以て人に律し苟も一點の不純を容さず一滴の汚濁を受けず寧ろ潔癖に近く殆んど三閭大夫の佛を偲ばしむるも熱血漢の常として人の爲に謀るや甚だ忠に自ら持する甚だ薄く進んで人の難に赴き己の災を顧ず要するに情に厚く涙に脆き人にてあり一種特色ある人と

して其筋の信用頗る厚かりしか昨昭和四年の秋五十六歳を一期として幽明を異にせり。
當時國家の興廢を略し國民の生命を捧げたる日清戦役將に起らんとするの直前あり内は政府と議會の衝突ありて議會は解散せられ外は韓國に東學黨の變ありて東洋の風雲急を告ぐる明治二十七年甲午陽春四月世は子規をして「春風に尾をひるげたる孔雀かな」の體やかしき時を以て今横須賀海軍官納業者中鏘々の間ある小船商店主小船榮次郎氏は先代榮次郎氏の長男に生る。

氏は先考歿後榮次郎の名を襲ひ先考の業を繼ぎ孜孜として揮身の努力を盡して先考の定められたる礎石の上に成功の樓閣を築かんと欲し日以て夜に續き活動の目覺しきものあり由來氏は父君に似ず寛厚大度にして清濁併含の概あり隨て官邊及び取引先の信用甚だ堅實なる者ありて將來の期待大なるものあり。嗣子惣四郎氏商科大學の出身にして才幹ありと聞く。

武田 忠氏

川崎市大島六七三

淺野セメント株式會社に鏘々の間へ高き川崎工場長武田忠氏は播磨の人其祖は龍野の藩士なり揖保郡神部村正條に住す正條は今龍野驛のある所家は往時より一郷の門葉にして陶朱の稱あり氏の父君を彌兵衛氏と謂ふ篤實温厚郷黨の長老たり氏は明治十六年春三月九日彌兵衛氏の次男に生る。

氏人生行路の前十年は中等學校教育家として教鞭を壇上に揮ふの人にてありき夙に御影師範學校を卒業し更に東京高等師範學校に入り明治四十年同校物理化學科を出て直ちに秋田師範學校に職を奉じ二年の後京都市立高等女學校に轉じ居る三年にして滋賀縣師範學校に移り此處にて五年の歳月を送る此間毎

に物理化學科を擔當す此の如く前後通じて十ヶ年教諭生活に一貫したり。

氏の胸中に燃ゆる向學心は氏を馳て遂に大正六年九月京都帝國大學理學科に入り大正十年三月化學科出身の理學士たり其大學を出づるや直ちに淺野セメント株式會社の招聘に應じ本店検査課に勤むる事一ヶ年の後當時東京工場と稱したる深川工場技師を命ぜられ主として製造課に於て蒞著せる學識に基き大いに手腕を揮ひ大正十四年八月認められて門司工場製造課長として赴任し昭和二年一月更に拔擢を受け川崎工場長に擧げられ現在に及ぶ。

氏はスポーツ殊に庭球野球ボートの趣味を有し劇甚なる事務に消耗せる元氣を慰復せるの用に供せらる夫人ゆき子氏姫路高女出身の才媛にして琴に堪能なりと聞く。

關 善右衛門氏

小田原町新玉二ノ三七三

沼津は東駿の名邑にして水野氏の舊城市なり氏は此地名門和田家に於て明治十五年一月二十一日先代傳次郎氏の次男に生る静岡中學を卒業すると同時に關家の懇望に依り入て養子たり關家は小田原の舊家にして住居以來三百年を経たり代々質屋を業として素封家を以て聞えたり明治三十七年通商銀行取締役に推され大正十三年に及ぶ。

通商銀行取締役として固より令名あり然れども氏の手腕は其後の合併と休業後の處置に於て顯る震災後銀行合同機運瀟熟せるや氏は大に其必要を感じ率先して其事に奔走し遂に大正十三年通商銀行小田原銀行國府津銀行曾我銀行の四行合併成り資本金二百

萬圓の實業銀行成立するに至り鈴木氏取締役に氏は監査役たり後氏は推されて常務取締役たり同行は不幸にして財界の恐慌に遭遇し休業の己む無きに至り氏は責任の重大なるを自覺して東奔西走滿四ヶ年に涉り昭和四年漸く明和銀行の設立を見て債權債務を引渡し一般預金者二割引の即時拂をなし各重役は私財四十萬圓を提供して完全に善後策を完了せり。

先是明治四十年小田原魚市場株式會社を創立し其取締役となり大正十一年兩山田魚市場と合併し資本金二百五十萬圓の株式會社に改め氏は専務取締役に推され昭和四年に至つて止め又町議員として復興の繁務に當れり氏の實業界に寄與し公共事に盡したる成績甚だ大なり。

夫人をつる子氏と云ふ長息賢次君日大法科出身なり長女さみ子嬢小田原高女に在學中。

小管喜代松氏

三浦郡三崎町小網代

三浦沿岸往昔より漁業に富む江戸兒の好む鯉は此地を尤とし就中三崎は其最たりされば徳川幕府大奥の魚買場ありしと聞く小網代は三崎町の一部落半漁半農の所なるも尙ほ年産額約五萬圓を降らずと謂ふ而して小管喜代松氏は其漁業組合長なり。

小管家は遠き昔より此地に住し年代詳かならざるも蓋し開拓草創の一家にして星霜幾百年の家ならん往昔より村の指導者として任じ村民も亦信頼敬從し來れり純朴其物なる相互相信の情尙ほ拘す可きあり小網代漁業組合は明治三十六年の創組にして始め杉田真之助氏組合長たりしが物故せられしより氏其後を襲ひ組合長の職に就けり。

氏の先考を小管傳左衛門氏と謂ふ祖來の業に依り漁業を事とす氏は其五男にして閑鷗波に眠り野兎家を窺ふ靜寂の村に於て明治大帝御生涯中唯一度の御避ありし明治六年の夏を以て生れられたり。

幼時より才能ありて氣概に富む稍長じて漁業に従事し資性の穎敏にして温篤なるは一郷の信望を買ひ初期の町會議員より引續き五期の當選を受け現在町會議員として町政に參與し貢獻大なるものあり三崎地方發展上確かに功勞者の一人なり又學務委員及土木委員を兼ね白鬚神社氏子總代に擧げられ或は教育獎勵の事に或は道路改築の事に將又思想善導の事に日夜奔走席の暖るなく曾て兩回の國勢調査に當ても毎に委員に選定せられて感謝状を受くる等悉く氏を煩さざるなかりしなり。

朽木大之助氏

横須賀市深田町三四二



客一度一ノ關に入れば即ち陸中の國なり東稻の大嶽窓に逼り北上の大河廣野を遶る江山の勝景既に凡ならず「三代の榮耀一睡の中にして」と芭蕉の筆を残したる平泉の古趾あり上國の戰塵飛んで到らず東風占斷す九十年白河關北一百里陸奥の黄金廣野に開く藤原氏父祖四代榮華の趾を尋ねれば唯だ九郎冠者の木像安置せる「五月雨の降り残してや光堂」と芭蕉自筆の「夏草やつはものども夢の跡」の碑ある毛越寺の礎石離々として存するを見るのみなる陸中の國は横濱無盡講株式會社取

縮役朽木大之助氏の郷土也。
氏は岩手縣江刺郡藤野村の出なり明治二十五年壬辰孟春一月十九日朔風衣川の關に寒き時を以て掩村の豪農朽木家の次男に生る家は世統長く斯の古邑に住し累代純朴の家風にて稱せらる氏も亦多分に其資質を享け神身共に健全なる天恵を受けたるの人なり健全なる精神は健全なる身體に宿るの語は氏の如くして始めて此を證す可きか。

明治四十二年横須賀海兵團に入り爾來十有三年間酷熱を赤南に凌ぎ嚴寒を朔北に迎へ或は怒濤狂浪と闘ひ或は煙波蒼溟に漂ひ克く軍人としての任務を了し大正十一年除隊後神奈川縣立農學校に教職を執り子弟を薰育する事六年家事の都合上退職して直に横濱無盡株式會社に入社と共に横須賀出張所主任となり現在契約高壹百萬圓を有せしむるに至り現に同社の取締役たり。
夫人をまつ氏と云ふ長男崇君長女涉子嬢二男啓君あり。

金森信吉氏

三浦郡三崎町西野一二

君見ずや滿目荒寥冬枯の野に梅花一枝趣を添へ郁たる芳薰を放つあるを以て堅忍不拔の志を養ふ可く以て高雅清節の教を受く可し霜を凌ぎ雪と戦ひ一輪一輪の暖を迎ふる名花移して氏の經路を語る概評とせん氏の人格は高雅なり清節なり氏の意味は堅忍なり不拔なり人に接して芳香を放つの感あらしむ真に人世の梅花ならんか。
氏は加州金澤の人金澤は前田家百萬石の舊城市にて外國貿易の率先者錢屋五兵衛の住地金石港を控へ女流俳人千代女終焉の松任又近く天下の名園兼六公園あるを以て名ある北國第一の都會なり氏は此地に於て明治己丑二十二年孟春一月初十日金森喜三郎氏

の嗣子に生れ生來穎邁にして兒戲尙ほ隣童に異なるあり幼時父君を失し爲に不幸の境遇に長じ一段堅忍質實の性格を加へ且つ大志あり十五歳單身東京に出て苦學力行の後日本醫學校の學僕に入り同校主幹磯部檢三氏の認めらるゝ所となり大に勉學上に便宜を與へられたり。
明治四十三年年齡二十二歳にして積年の効果顯はるゝ所藥劑士の資格を受け同四十三年三崎町に來り藥局を開始して逐年繁盛を招き地方信賴漸次に加り諸種の公職を以て誘はるゝも謙恭温篤なる氏毎に之を受けざりしが再三の勧誘に依り四圍の事情己むなく僅かに學務委員の職に就ける外三崎町青年團支部長、衛生組合長、神奈川縣藥種賣藥同業組合代議員に擧げられ町保全の事と同業者間の親和向上に力めらるきぬ子夫人に三嬢三息あり。

森 亮 吉氏

横濱市中區本牧町二五二



紀州熊野の勝は夙に世に聞へたるも由來通路の便を缺き遊子の策を曳くもの稀なり然れども其爲に文化の浸蝕を受くる事少く幽邃の勝を保ち得たるの幸あり人若し本宮より熊野川を下れば兩岸相逼りて層層水と共に東に走り網代淵の奇岩深潭に神を奪れつゝ灘八丁に入れば河水滯みて其碧藍の如く絶壁屏立洋々として流れず恰も赤壁畫中人となるの感あらしむ更に楊枝に至て再び山迫り水急に遂に吐口新宮に達す可し新宮は紀州杉の集散地として名高く水野氏の舊城市なり氏は實に此地よ

り出でし人にして稜々たる氣骨を有するの一面には和歌山人士の特有たる鋭利剃刀の如き才氣を有す其言語動作の温雅なる處あるは蓋し別に父祖傳來の家系に由るならん。
氏の生家大塚家は京都の公卿武士にして祖父太吉氏二條家の從士たり先考虎雄氏は維新後官界に入り地方官たり彼の奥繁三郎氏と親交あり大になすあらんとせしに不幸三十六歳を以て逝かれたるは痛惜に堪へざるなり。

氏は其三男として明治十四年八月十八日京都の邸に生れ後紀州森氏の養子として其姓を繼げり曾て京都府第二中學に學び出でて寫眞業を見習ふ三年の後水明館なる寫眞店を開きしも更に東京に出て二十九歳初て大同生命保險株式會社に入り氏の鋭脱せる才能は此處に發揚し四年の後遂に募集部長に拔擢せられて昭和三年横濱支店長に選ばれ現時に及ぶ。
夫人たけ子氏金谷家より入る靜君圭三君厚君尚子嬢等あり。

劍持 眞 作氏

小田原町十字町二ノ四九二



劍持の姓は上古日本武尊東征の時御大刀を捧持し供奉御先道申したるに因ると謂ふ由緒を有す其末劍持庄左衛門宗範甲斐の信玄に事へ重用を受く天正年間武田氏亡ぶ宗範郎黨九十人を具し此地に留る第四郎左衛門足柄下郡曾北村に別居す曾北村に劍持氏多きは皆其分枝なり次世劍持與治郎常治四郎左衛門と改む爾後四郎左衛門を襲名とせり後小田原に來り大久保忠世に仕へ忠勤を拔んじ公の旗印の御陣場跡全部を拜領して邸を此處に置く更に降て商に歸し苗字帶刀を許さる而して遠祖四郎

左衛門の室は鎌倉景政の後胤一色氏より入る以て同家の如何に門地家たりしを推知するに足る初代四郎左衛門より當主に至る迄十三世を経たり十世四郎左衛門氏の世は家運隆盛の極なりしが中頃稍々衰ふ當主の代に及んで又著る當主眞作氏は明治十二年三月十八日嚴父正之助是式氏の四男に生れ夙に藥學に志し大正二年獨立開業して現在に至る。

氏の製藥販賣は二十種に及ぶ就中氏の得意として頗る聲價あるは佐奈田飴是れなり佐奈田飴は佐奈田靈社の神藥にして斯道専門家研究の結果痰咳、喘息、百日咳に卓越なる奉効を有す去痛鎮咳の代表的藥劑にして諸種の貴重藥を配合し嚴密なる注意の許に精製せらるゝ者にして他の藥飴の追隨を許さざる所なりと謂ふ氏の性格は温順にして氏の人格は高潔なり外には好個の紳士たり内には善良の主人たり。
夫人竹江氏又温雅貞淑の人長男章君女節子嬢の二子あり。

渡戸幸助氏

三浦郡田浦町深浦三九五三



己を憂ひて他を顧みざるは昔「綜不恤其緯」として此を恥ぢたり現代は個人主義として喜べり幼時のフランクラン富者新築用の礎石を道路の沼に投じ以て足場を作り且つ富者に向て豪語して曰く礎石として用ゆれば一人の喜びのみ足場として用ゆれば衆人の喜びなりと此言動の奇矯今日の兒童にして學ぶ可きにあらざるも他日フランクランの社會的大偉人たるは蓋し此の意氣あるに基く氏は幼時より此種の氣概を有し兒童常に此れに類するものあり今日氏が郷黨の爲めに盡し社會の爲に盡

すは又其の意氣の發顯とも謂ふ可きか。
渡戸氏は此土の舊門父君を彌右衛門氏と稱す氏は其長男なり明治十六年癸未八月十日其家に生る資性純朴にして意思堅實明治三十一年荒物雜貨商を營み不撓の努力不屈の奮闘を連續し遂に渡戸商店の名を以て斯界に雄視するに至り隨て社會の信望甚だ深し氏頗る愛國の至誠に富み皇室中心の主義に任じ又公共奉仕の念極めて篤く夙に自治の發達を圖り消防組小頭たる事實に三十ヶ年餘に亘り其筋の表彰を受け合せて大正十四年町會議員に推舉せられて町政に參與し貢獻甚だ多く現在尙ほ町會議員たり其他或は區長となり或は第一回及第二回國勢調査委員となり國家諸政の基礎たる可き統系事業に參劃して内閣の謝状を受け或は震災調査員に推され災後の計畫精査に任じ一面同業組合理事たる等氏の生活の半面は公共に奔走せらる眞に郷黨の善友たりその子嬢たか子嬢ちよ子嬢あり。

山口政治氏

小田原町藤町四丁目七三八

山口家は新潟縣下の名門家にして代々富豪を以て遠近に鳴り氏の代に及び益々著はる萬延元年牧野氏の城下長岡市に於て生を享けられ嚴父半三郎氏の七男なり壯時大いに石油界に活躍せられ殆んど石油王の觀あり今や長息權三郎氏家督を繼ぎ一切の經營に當らる權三郎氏偉略智謀の人雷名邦内に聞ゆ。

長く新潟縣會議長の職に在り令名あり日本石油會社の創立者なり權三郎氏明治二十二年石油事業視察の爲め米國に赴き親しく彼地の實地を見學する二年の後嶄新なる器械を携へ歸り茲に本邦石油界に一新機運を興へたり氏も亦大正十三年歐米を巡遊する一々年餘に亘り實業方面の視察を遂ぐ是より先獨力を

以て長岡市に實業學校を設立し自ら之を擔任し更に明治二十八年石油會社附屬の新潟鐵工所新に創立あるや氏は其經營一切の事を委せられ又日本石油株式會社長岡出張所監督に推され同三十五年北越水力電氣會社並に魚津に日本電氣工業株式會社を創立しカーバイト製造をなして繁榮を加へつゝありたるも電氣工業株式會社は高山電氣株式會社の懇望に依り此を賣讓したり大正五年に至り日本水力電氣株式會社を起し後東京電機株式會社に合併せる等能く起業し能く整理せる智能は量り難きものあるが如し大正十二年小田原の勝地に居を移し悠々自適老後の餘生を送りつゝあるも尙ほ現に日本石油株式會社監査役、北越電氣株式會社取締役、北越製綿株式會社取締役に推舉せられ該方面の元老なり。

藤田長太郎氏

横濱市中區北方町小籠六二



軍人出身の人には往々にして社會の機微に通ぜぬ
憾みがあるも、
又却つて性情透
徹して事理に明
敏なる能材多し
吾が藤田長太郎

氏が日本生命保險會社横濱出張所主任として、繁雜なる事務を執掌して些かも滯滞を見せぬのは後者としての適例であるか。

氏の故郷は九州宮崎縣城ヶ崎にして、士族藤田孝七氏の長男として明治五年五月に生れ、普通教育終了後は、青雲の志を立て、出郷し、始終不撓不屈の態度を持し、人間としての能力の能ふる限りの努力を以つて進取の氣象を培ひ、凡ゆる艱難辛苦と戦ひ

つゝも初志を譲へさず、敢然として邁進を続け居れり。永らく静岡縣三島に在住して、實に三島は氏にとつて第二の故郷たるの感あり。

極東の均衡破れて、明治二十七年日清の役起るや歩兵として召集され出征し、各地に轉戦して勳功を樹て、其後又々日露の國交斷絶となるや、明治三十七年學國一致して極東平和の攪亂者たる大敵露西亞を膺懲すべく、勇躍して召集に應じ、遠く遼東の野に従軍して、硝煙彈雨の間に馳驅して拔群の功を顯はし、明治三十八年日露凱旋となり歸國したり。其後當時初めて施行されたる煙草元賣捌店となり、業務の發展に傾注したるが、吾人の日常生活の上にて生命保險の確に有意義なる點を痛感し、自ら保險界に入り、日本生命保險會社横濱出張所主任となり、熱心誠實主義の許に社員を統率し、隆々今日の盛況を來せり。

資性活達磊々、趣味として日本武術の特技たる大弓を好み一日も缺かさず、常に軍人精神の涵養に努めたり。夫人壽子氏は先年病歿せられたるが、四男三女ありて頗る喜ぶる子福者なり。

矢島善七氏

横濱市中區本牧町七〇〇



矢島家は山梨縣に名高き豪族の一なり先代善七氏

は甲府の西、
葦崎の東、釜
無川の沿岸に
位ひせる中巨
摩郡龍王村に
於ける名望家

にして素封家なる齋藤定兵衛氏の二男に生れ明治十五年矢島家に迎へられ養嗣子として其家に入る甲斐元來峻峯高峯犬牙重疊相屏立し四面皆山甲府附近一帶は其底地なり四縁の國産一度此の底地に集まる氏も亦魚町に地を卜し製糸工場を設立し果斷宏量機を捕へ人を使ふに巧なる氏は漸次進展の歩調を取り職工五十名使用人三百名を有する大工場となし身は同

業組合長、矢島組副組長に推され信望一身に集る經て明治三十年横濱に至り生糸貿易商を始め商館に賣込をなす正直を經とし俊敏を緯とせる氏は此處に於ても忽ち深甚の信頼を博したり加ふるに揮身の努力を事業に拂ひ横濱生糸界に衝動を與へ比年ならずして斯界に重きを以て任ずるに至りたり業茲に成り横濱五品取引所仲買委員等に選ばれ一個地方の元老たりしが大正十二年の震災は無慘にも七十一歳を一期として奪ひ去りたり。

當主善七氏は幼名を善藏と呼び家を繼ぐや善七の名を襲ふ明治二十四年晩春五月本牧の邸に生る氏は斯くの如き父祖の遺風に感化せられ斯くの如き家庭に圍繞せられて幼より夙悟英俊長じて慶應義塾に學び今や快刀亂麻を斷つ體の手腕を振ひ多額納稅者に位し衆人をして矢島家の將來は瑞雲蕩々たるを感ぜしむるあり。

母堂錦子刀自七十二歳にして健在せられ氏の孝養を喜びつゝあらる。

守山 甲子太郎氏

中郡平塚町新街一〇九五



將軍家茂參朝京に入れる元治元年一月乳製品王の稱ある守山同族株式會社々長守山甲子太郎氏縣下高座郡綾瀬村の農家守山家の嗣

子として生れたり甲子太郎の名は蓋し生年の干子と家の長子たりしに因るならん性來創造心厚く思考力強し而して氏の子弟を愛するは唯だ當面姑息の愛にあらず將來安全なる好事業を求むるは親としての責務なりと信じ各種に物色中長男謙氏の入營に依り其退役後處世策に就き一段の焦慮を加へ此處に平素研究中の乳製品業に従事せんと決意せり此動機は即ち

今日成功の動機にてありしなり。

大正九年家を舉げて平塚町に移り來り茲に本業を經營せし以來氏の圖る所企つ所悉く正鵠を誤らず十二年の震災に因り其大の打撃を受けたるも氏一家の勇猛力は克く征伏し克く回復し昭和二年一月遂に四拾萬圓の同族株式會社に組織を變じ全國朝鮮臺灣の鐵道驛賣を目標に乳製品の大量製産へと突進し現に一ヶ年平均三十五萬圓内外の賣上額を持続せり。

最近大阪に支店を設け二男鴻三氏を同支店長とし名古屋以西の販賣を委ね長男謙氏は専ら本店の業務に當り自ら社長としく此を總監し六十七歳の老齡を以て尙ほ馬上視顧の概を有し敢て尺位素餐に安せず父子同族轡を併べ歩を調へて益々發展の進路を辿りつゝあり、今や更に大規模の工場新設の準備中に存す。

令夫人ふで氏に長次二息の外帝國大學醫學部卒業の三男英雄氏と中部工場主任の四男準藏氏あり豈に隆ならずや。

大内 茂七氏

横須賀市山王町一六



氏は愛媛縣越智郡瀬戸崎村の人にして其先大内吉兵衛氏は、藤堂家壹萬石の家老武家氏の分家系たり、父繁太郎氏は吳市大倉組土

木下請負として、廣島忠海丸龜善通寺の兵舎松山紡績工場を建築せし人なり、長子保一氏は大倉組舞鶴出張所の主任たりしが、大正四年死去せられたり、次子要氏は大阪商船會社石原造船所等の技師たり、三子柰三郎氏は叔父方なる藤堂家の養子となり、有名な洋畫家中村不折氏の門に入り出藍の譽あり、氏は其第四子に生れ郷里甘ヶ崎小學校卒業後父兄の關

係上現今の本籍地なる廣島縣吳市に轉居し、廣島縣立中學校に入り、卒業後大阪關西大學に學び、又大阪府立貿易語學校に入りて露語を修め、大阪亞鉛鑛業會社に入り、在職中舞鶴の素封家田中覺藏氏に依り、大阪驛長たりし親戚坂本市松氏に謀り、大正七年三月田中商會出張所主任として、田中氏と共に横須賀に來り開業し、代理業諸機械類物品販賣の衝に當り、漸次京濱に及ばんと欲し、大内商會と改稱し震災の試鍊を経て、目下納品部工事部の分課により物品販賣建築土木電氣工事請負並びに代理業を營み海軍諸官廳に物品を納め、海運建築部横須賀支部東京灣要塞司令部、並に神奈川縣警務課の命により、電氣工事請負工夫供給をなし、兼て日本電機株式會社外十數餘の代理を掌る等逐年隆盛の運に向ひ、町内にも重きを置かれたり、趣味として野球庭球撞球を好み又寶生流の謠曲に堪能なりと。

氏の長子龍氏は、東京外國語學校露語科出身にして大阪稅關に奉職中なり、次男秋二氏は松山高校理科卒業後目下大學受験準備中、三男豐三氏は拓殖大學にあり、四男某氏は逗子開成中學在學中なり。

兵庫 徳次氏

横濱市中區大和町二丁目六五



北陸の天地就中能登半島は、海山に圍繞されたる雪國なり。従つて住民は何れも温和にして落付きあり然も北國特有のねばり強さ

を持てり。

氏は石川縣能登郡羽咋町西橋與三兵衛氏の四男に生れ、幼にして親戚なる東京市本郷區湯島三組町兵庫家の養子となれり。氏幼少より東京にあつて養父母の許に教育を受け、北國人の先天的のねばり強さは其の學生時代に於て充分に發揮され、常に成績拔群首席を占め、東京市京華商業學校を卒るや横濱松

文商店に入り輸出部勤務となれり。氏の業務に對する熱心さは店主並に華客の信頼を博せり。

大正十三年輸出部獨立して旭シルク株式會社の創立となるや拔擢せられて輸出部主任となれり。上役同僚の信用は益々厚く同社の重要人物なり。精力絶倫にして寢食を忘れて活動するも尙疲勞を覺えずと云はる。同社の前途は洵に洋々たりと云ふべし。取締役に神戸本考、織田萬藏、西橋外男の諸氏を頂き遠くニューヨークを初め各地に支店を有し、ニューヨーク支店は取締役代理藤本壽氏これが業務を執り同支店に於ては生糸の輸出事業をも兼營し居れり。相談役は齋藤市太郎氏にして林徳太郎氏買付け業務を擔當し居れり。

氏は未だ三十二歳の好青年將來の躍出恐るべきものあるべし。大のスポーツマンにして特にゴルフを好む。氏の精力絶倫はスポーツに負ふ處多し。夫人まさえ氏は東京府立第一高等女學校出身の才媛にして美貌の譽高し。

轟 清吉氏

横濱市中區本牧町二五〇



嘗て横濱興行界の大立物として謳はれ、所謂大松竹トラストに對抗して、獨特の手腕を發揮したる我が轟清吉氏は、埼玉縣加須町の、小野伊助氏の次男として明治七年十月に産聲を挙げ生家は代々織物問屋を業とせり。

氏も亦其の幼少時代より斯業研究の爲め東京に出て日本橋堀留なる織物問屋山下商店に入り、十四年の長年月を一意専心業務に忠勤し、主家の絶大なる信用を博せり。この不退轉の努力精神に囑して當時横濱實業界に知られたる轟由次郎氏より養嗣子として懇請され、遂に同家の籍を繼げり。養父轟由次郎氏は夙に海外雄飛を志し、英領ホンコンに赴き雜貨

貿易商を以つて内地人の活躍に先鞭をつけたるも、其後同店を店員某に譲り歸國し、次で横濱市羽衣町に店舗を構へ食糧品を外國艦船に供給すると共に一般雜貨貿易商を經營し、方針宜しきを得隆々盛大となり、横濱實業界屈指の一人となりしも、惜しべしその後繼者なく常に嗟嘆する内、我が小野清吉氏を知り遂に明治三十二年轟家に迎へ後繼者とし、同家に入り清吉氏は父君と共に、業務に精勵し愈々横濱興行界に名聲を博し、更らに興行界に着目し、喜樂座、横濱座を手中に收め、斷然他を壓して横濱興行界に君臨する事となれり。大正四年養父由次郎氏歿するや遺業を遵奉して益々聲價を擧げしも、大正六年豁然悟る處ありて一切の事業より退き、僅かに土地管理のみに止めて、餘生を社會公共事業に盡瘁し幾多の功績を残せり。其他衛生副組合長としては大正六年より昭和三年に至る迄永續して衛生施設に改善を圖り、國勢調査委員を内務省より委嘱され更らに横濱第九地區第十地區より推されて土地區劃整理委員となり、至公至平を以つて衆望を博するに至れり。

篠崎 誠 治 氏

横濱市中區本牧四六四七



ギリシャの哲人の言葉に『ものは總べて流るゝ』とあり。刻一刻と時代の移りゆくことは吾人の驚嘆する處なり。かの徳川幕府末期遊惰安逸の夢をベルリ來航に破られ、遂に王政復古の大業なるや、蒙昧なる鎖國思想は一掃され、彼の地先進國との交商貿易は次第に盛大になれり。其後、日清、日露の役を終り、世界に我國威を發揚すると共に、彼我兩者の交換は愈々著るしくなり、山紫水明世界の公園として歐米の觀光客は年々歳々數多となり、此の時に當り、我が篠崎誠治氏がアメリカ、ボストン、テンプル、トロー旅行會社東洋代表者として招聘され、旅行界、通譯界に盡力せる幾多の功績は看過出

來ざるものあり。

氏は横濱元町篠崎清右衛門氏の三男とし明治十六年十二月生を享け、慶應普通部を経て同大學理財科を卒業せしが、在學中より特に英佛語に秀いでその流暢なる會話に至つては殆んど外人と伍して遜色なかりき。其後東京商業會議所内貴賓會の囑託となり歐米諸名士の來朝の際は通譯を務めて遺憾なく、殊に米國大統領タフト氏來朝の節は、選ばれて東導役としての重責を果し、其の巧みなる會話は識者の齊しく認むる處となれり。明治四十年ボストン、ダニング旅行會社に入り、更らに横濱アメリカ、エキス、プレス商會の旅行部創立と同時に入り、大正九年同商會旅行部長の要職に就き、日本觀光客の斡旋各種の旅行企畫に盡瘁せり。大正十三年現在のアメリカ、ボストン、テンプル、トロー旅行會社に招かれ、國際場裡にありて彼我兩者の交換に努力し、旅行界、通譯界の一權威として彼地に於ても「シノザキ」の名聲を博せり。氏は又震災の際はよく外人救護班として奔走し其の功績により、米友協會、外務省より感謝狀を授けられ實に氏の如きは隠れたる國際外交上の功勞者として推稱すべきなり。

柳 下 重 作 氏

横濱市中區吉田町七四



舊家にして素封家たる柳下家は、今より七十餘年前、即ち當主重作氏より三代前にあたる柳下平治郎氏の時、將來開港地として横濱が必ず發展を見るべしと着目し、飄然として郷里を出で、横濱辨天町通り一丁目到店舗を設け、舶來金物問屋を開業し、夙夜精勵する氏の努力は一步步々と業績を挙げ、遂に今日の隆盛を招く根本の基礎は出來たり。

少時代より俊敏を以て聞え、衆人より其將來を期待され長ずるに及んで、雄志を實業界に伸べんと志し横濱に赴き、當時錚々たる柳下商店に入店せり。初めて實社會に一步を印せる氏は、全く自己を棄て、主家の爲めに寢食を忘れて働き、斯くして専心努力する實に十年の久しきに亘り、信望加はると共に主家をいたく感動させ、遂に懇請もだし難く、大正二年二十歳にして同家養子となり柳下姓を冒し、益々業務の發展に精進せる結果不斷の努力は酬ひられ柳下商店の聲望は斯界に頭角を現はす盛況を來せる際俄然かの大地震火災に遭遇し、一切は空しく烏有に歸し、營々として積み重ねたる努力の塔は一朝にして潰滅の悲運に到達せり。然るに氏の烈々たる不屈の氣魄は舊に倍して奮闘し、新に店舗を吉田町に移し復興すると共に従前に増す隆盛を極めるに至れり。氏は一面又、公共の念篤く、根岸町衛生組合顧問根岸小學校獎勵會相談役等に挙げられ、社會公共事業にも裨益する所多く、少壯實業家の典型たり。

榎戸榮一氏

横浜市中央区尾上町



當店は一世の鬼才、先々代榎本彌七氏が明治十五年に創始せるものにして、履物業界に於て屈指の古歴を有する榮譽ある老舗なり

城に鐵壁を加へたり。彼の有名なる六門履は林藏氏が粉骨の末發案せるものにして、輒近流行の先端を往く輕快なるキルク履は此の六門履きに濫觴を有するものに外ならず、斯かる一例を以てするも林藏氏が履物業に爲せる燦然たる偉績は天地と共に極無かるべし、林藏氏は前記の如く生涯業務に終始せる篤業の人なりと雖も寸暇を利用して花鳥風月を愛することを忘れず、骨董、盆栽等に一入深き趣味を有せり斯くて林藏氏は偉跡を残して昭和五年五月、萬人哀惜の中に永眠す。現店主榮一氏は即ち林藏氏の一人として明治三十五年八月十日に出生し、兩親の慈育の中に本町小學校を卒へ、現在、中興の重任を前に只管業務に専心す、當店の製造方針は當初以來日本趣味の典雅と滋味を製品に具顯することに於て独自の道を往くものにして、顧客は上流階級及び花柳界の粹人に多く、營業方針は、實直と親切を標語となす。

染谷徳平氏

横浜市磯子區磯子町一二二



氏は彼の義民佐倉宗吾を出せる千葉縣下總國白井村の出身、明治十一年六月二十五日染谷源右衛門の長男として生る源右衛門氏は義俠心に富める硬骨漢永喜決橋と號し蓄財の才あり一方又これを真く散じて郷黨の爲に盡す母堂菊子氏温順貞く夫君に仕へ大正九年永眠せり嚴父源右衛門氏も同十三年七十六歳を以つて長逝しぬ。氏初め中學より高等學校に入り學業を卒るや外交官たらんと劃せしが長男として父母の膝下に孝養を盡さざるべからざるを知るに及び彌志一番前司法大

臣原嘉道博士の門に入り遂に辯護士となれり正義公平を維持し世の弱者を助くる辯護の職豈男子の本懐これに過ぐるものあらんや。横濱に辯護士を開業するや常に訪客門前に市をなし人格者として手腕家として横濱法曹界の重鎮と歌はれ、横濱貿易業組合、横濱ドック、三井銀行、取引所等の法律顧問たり氏の祖先傳來の義俠心は彼大震災當時遺憾なく發揮せられ焼土と化せる市中を東奔西走横濱の興亡此の一刻にありとなし生糸問屋、荷主輸出商間を奔走し損害負擔を調節せんが爲めこれが協定案を作製し、横濱市復興に努力せられたる功たるや洵に甚大なり。氏の明鏡の如き頭腦と秀拔の手腕誠心誠意とは氏の地位をして泰山の安きに導きたり今や辯護士たる傍ら推されて縣會議員となり民政黨神奈川支部幹事長として政界方面にも不拔の勢力を有するに至れり其の他港南クラブ、關内京和會會長等の要職にあり然も尙ほ舊師の恩を忘れず絶えず原博士の門に出入し報恩を怠らざるなり。

松下信平氏

横濱市中區元町



當市家具商界の新人に松下信平氏あり。氏は未だ年齢三十に及ばざる若盛なりと雖も、爲すところは面目躍然たるものあつて、前

や、邦人の生活様式が刻々洋化しつつあることに炯眼し、洋風家具商たらんことを志して來濱し、元町なる松下商店に入る。時に大正八年なり。同店に在つて螢雪の勞を惜しまざること九ヶ年、修養成つて當店を辭するや、元町に自ら店舗を設けて獨立す。爾來勵精に勵精を重ねしが、突如、彼の大厄難に襲來せらるゝや、身を以て故村に逃る。暫時、父母の膝下に在つて静養すること數ヶ月、會々、故里に残留せよとの父母の勸告に逢ひしも、意志堅固なる氏は是れを排して再び東上し、元町に再度のスタートを切れり。斯くて氏の鞏固なる意志と過去九ヶ年に亘る經綸とは不況の中に在つて能く光を失はず、遂に基礎を磐石の安に置く。氏は斯くの如く身を商界に没すと雖も、精神を持すること高く、深く文藝を愛し、同郷の出なる新夫人千代子氏と共に閑を利して、象牙の塔に坐す。兎角、我利に墮する素町人は氏の雅趣を汲みて飲むべし。

畠山政吉氏

横濱市中區相生町三ノ六三



畠山家は元安房に住す始祖は緇衣の人にして過去帳に權大僧都大先達法印宥清禪師享保五年十月歿すとあり中御門天皇の御宇將軍吉宗の治世にして二百十數年前に在り後江戸に出て芝口に移り舊家門葉として知られたり先代畠山兼吉氏二十五六歳の頃安政六年横濱開港せられたるを聞き勇躍して混沌未だ形勢の定らざる新開港地に來り當時狐狸も棲む可き一丘陵に過ぎざりし野毛山の下に青物乾物百貨商を開始し凡ゆる障害に堪へ凡ゆる危険を冒し大いに活躍を試みしに國是の大勢定ると

共に横濱は氏の炯眼に反せず異常の發達を來し氏の業も其餘惠を受けて發展見る可きあり氏も亦一個の横濱開港先覺者たる一人なり。當主政吉氏は明治六年十二月彼の有名なる征韓論に基く大分裂ありし年に生る先代兼吉氏の三男なり氏天性豪膽闊達にして淡快湖の如し即ち居を相生町二丁目に移し現業を開く時恰も日露戰役直後に屬し財界活氣を極むるに際し蛟龍風雲を得て伸張見る可きあり忽に今日あるの基礎を定め着々順潮に棹させしに不幸賢夫人ふじ子氏震災の魔手に奪ひ去らるゝ所となり氏の落膽今日に至て尙ほ新なり。氏の信用は斯界に厚く現に關内二業組合組長の職にあり又横濱料理待合二業組合聯合會會長に推され横濱斯業界の頭領にして斯界の改善向上に全力を注がれつゝあり。氏に二男あり義雄君春雄君と謂ふ義雄君は早稻田大學出身の秀才にて山十製糸株式會社に在り春雄君は慶應大學經濟科在學中。

村上菊藏氏

横浜市中西戸部町一六七四



憧憬は美しき幻なり。人生は奮闘する者にのみ向上を許す。我が村上菊藏氏の過去の道程は、徹頭徹尾努力精進に依り今日の成功を贏ち得たもの、立志傳中の人として恥かしからず氏の故郷は兵庫縣にして、幼少時代は父母の許に在り、初等教育を卒へるや家業を扶けること數ヶ年、孝養の限りを盡したり。然して堅忍不拔、進取の氣象に燃ゆる氏は、遂に二十五歳の時播磨の地を後に播丹線鐵道會社に入り初めて獨立獨行の第一歩を踏み出せり。次て阪鶴線、舞鶴線等を歴任し、業務に

精勵すると共に其の餘暇を以つて好める建築に關する一切の智識を養成し、他日を期する處ありたり。斯くして粒々刻苦の勞は酬ひられ、明治三十九年に島根縣松江市に於て銀行建築の大工事が施行さるる時、建築監督として出張し、次て本縣洋風建築の嚆矢たる縣廳舎の工事にも關係し、其の獨特の手腕を發揮して、汎く注目の的となり、明治四十年より縣土木課に勤務し建築掛りに任用され、縣下各地に出張し大正六年に至る迄、公正無私、確固たる志操を持ち、而かも才氣煥發、鮮やかに事を處理し信望を擔ひ大正七年職を退き横濱市に居住し、多年の豊富なる經驗と老練なる手腕とに依り、合資會社人見組を創立して活躍する事となれり。官公署大邸宅等の土木建築工事を擔當するや飽く迄ベストを盡くすと云ふ熾烈なる責任觀念の所有者なり。今日に至る迄感謝狀、賞状を受けたる事甚だ多く、氏の令名は縣下建築界を風靡したり。家庭には夫人との間に四男ありて頗る清福に恵ぐまれ、長男永治氏は父君の跡を繼ぐべく帝國大學理工科にありて勉學中と聞く

山下和則氏

横浜市神奈川區青木町二二八一



山下和則氏は日本の南口日向の人彼の明治二十三年を期し國會開設の大詔を降されたる明治十四年十月二十二日飯肥町の舊家山下家の邸に生る父君を政治氏と謂ふ氏は其長男なり東京一ツ橋校の豫備校として世に知られたる東京商工中學に入り卒業後明治三十三年一ツ橋商科大學に入學し同三十七年卒業すると同時に熊本師團に入營して三等主計となり同四十一年横濱正金銀行に仕へ本店又は大阪支店詰となり後出でて大連支店より奉天支店に轉任し在支五ヶ年に及ぶ故を以て氏は最も北

清の事情に通ぜり。
大正七年世界大戰の黄金時代に會し氏は獨立經營す可く正金銀行を辭し翌年神奈川町に地を卜し九州方面の木炭に着目し盛に此を郷地より輸入し大いに巨利を占め山下商店の名を全市に布き傍ら石濱コークス販賣を開き官廳會社等の納入を主とし今日に於ては殆んど九州炭の取扱をなせり。
氏は唯に横濱方面の事業に止まらず殖林方面に關しても多大なる進出を試み宮崎縣飯肥に廣大なる殖林事業を創め主として船舶用杉用材の成育に努めらる又東京神奈川電機株式會社の常任専務と監査役の重職に在らる而して夫人せう子氏は横濱佐迫壽之助氏の姉にしてフェリス女學校出身なり天資端麗貞淑にして賢婦なると共に賢母たり長男政利君水戸高等學校に次男次郎君は北海道帝大豫科に三男禎三君も水戸高等學校長女佐子嬢は母堂の母校にあり五男浩君は未だ小學校生なり。

笹本 總藏 氏

横須賀市三崎町



南部屋吳服店の創業は甚だ遠く恐くは當市の吳服店中最古のも
のならん其沿革を聞くに今を去る一百二年前仁孝天皇の御宇文政十年丁亥鎌倉八幡宮造營落成したる年南部屋徳左衛門氏吳服店を開きしに始まり二代小村徳左衛門氏其跡を繼ぎ十世の間代々徳左衛門と稱す大正十二年九月合資會社小松商店と改め高橋カク氏代表社員に笹本總藏氏支配人に就職す昭和三年十一月解散して更に合資會社南部屋吳服店を起し笹本氏代表社員たり。南部屋吳服店は此の如き稀有の老舗にして信用の

厚博なる市内に比すべき無く取引關係の廣汎にして品質の精良なる殊に小賣部の完備せる到底他の追隨を許さざるあり加ふるに現代表社員笹本氏天才の機敏圓熟の經驗慨博の知識を以て顧客本位の方針に依り堅實なる歩調を辿りて歴史ある暖簾に光彩を添へ尙將來發展の餘地を存せり。
氏は三浦郡浦賀町の出身にて明治六年八月三日の生なり明治七年以來當店の店務に従事し同三十八年臺灣に渡り臺北州七星郡北投庄助役に就任大正十二年歸朝して合資會社の組織に當れり氏は本姓山城氏父君治平氏は徳望あるの人村の副戸長たり浦賀海峽は弟橋姫の夫の君を助く可く入水せられたる走水の渡りにて豆州下田港と共に西洋文明輸入の關門なり治平氏の此時に處し克く其發展と秩序に盡瘁したる苦心は尋常の者にあらざる可し氏は其二男にて父君の資性其儘を承け鋭氣人を呑むの裏に溫雅人を御するの高風あるの人なり。

久保田 清吉 氏

横須賀市旭町七



美濃の奇觀鷓鴣を以て名ある長良川の清流下りて午北新田に於て二流に岐れ海鼠形の一小平原を包み伊勢の國境に至り又合す之の平原底地を海津郡と云ふ久保田清吉氏の先考發祥地は即ち之れなり先考名を富吉氏と呼ぶ郷土の名家後藤家に出づ後藤家は代々農なりしが富吉氏顯俊學を好み夙に規定の學歷を経て教育家として立ち明治十六年初て横須賀に來り久保田姓を稱す越て十八年多年執り來りたる教鞭を抛ち轉じて一介の商人に歸し官納業を始め大に飛躍を試みたり氏の炯眼は常に物

の正鶴を謬らず機先を制し又氣品ある風貌規律ある動作は大に其筋の信任を享け業務浸々たるありしも明治三十六年卒然として永久に歸らざる黄泉の旅に上られたり。
明治二十年八月二十六日氏は富吉氏の長男として生る父君亡する時氏十六歳の少年なり賢母スラ氏親權の許に少年店主は其業を繼ぎ商業的才能は遺憾なく店務に織込れたり大正十一年試に一方の業務を氏一個にて自由に處理せしに一際鮮かなる手腕を示し周圍の人より驚異讚嘆措かざる所となり忽に斯業界に秀名を馳せ横須賀實業界明星の一人たるに及ぶ。
現に日本ベイント株式會社を筆頭に五十有餘の代理店を兼ね官納商支會副會長、商工會議員、商事調定委員等に推舉せられ社會公共的事業の爲め力を盡せられたりあり。
令夫人美智子氏未だ弱し艶麗淑徳の人なり氏に長男昭成君長女喜久子嬢二女益子嬢三女房代嬢四女千穂嬢あり。

佐藤明観師

小田原町幸町



師は其の先考越後長岡に出づ父佐藤虎吉氏は舊長岡藩士にして... 治二十一年一月十日を以て生る人となり

しては時宗及學林の教師として徒弟を錯錮し他而本山布教師として衆庶の信賴する所たり去る大正十二年九月一日振古未曾有の大震火災に遭遇して福田寺も亦其の厄に罹り一朝にして灰燼(壞滅)に歸す此に於て師は東奔西走檀信徒と謀り銳意之が復興に力め遂に殿堂の再建を完成するに至る實に福田寺中興の祖と仰ぎ其の功績の後昆に傳ふべきものと謂ふべきなり。

長谷川龜樂氏

當長谷川家は、神奈川県青木町飯田道横町に相模屋



公せられ、實社會に體験の第一歩を踏み出し、十八歳にして、一に歸省せらるるも、恰も黒船渡來の時、將に當横濱が開港の機熟するや、即ち貿易港として、氏先づ劍道に着手し、奮然郷里を出て、來濱せり、任命せられ、道に達せし、赤房二年、漸々令名を博し、今十名、實業の道に當り、元町に居り、六、七、八年、漸々實業の道に當り、元町に居り、川龜樂氏、名を改め、長谷川龜樂氏とす、其の文、遊、深、く、當、時、境、に、民、移、轉、し、て、一、各、國、を、隣、の

濱の境町一等の戲文を飛ばし、同好の士を驚かせし、程樂の稱子に、遂に今日日盛の基礎を築き揚げたり、實は開港に著眼せる先達者として又立志傳中の人物と云ふべし。

藤木鎮太郎氏

横浜市保土ヶ谷區神戸上町七〇七



日本が世界的に誇れる藝術、廣重の錦繪にみる美しい松並木と街道。その保土ヶ谷宿に於て側本陣として時めさし藤木家は數百年來の舊家なり、氏の實父富次郎氏は分家して横濱に出で、廣大なる家を構へ、悠々自適の生活を送り、その長男として生を受けし氏は壽小學校を卒へるや直ちに横濱商業に入り、將來を經濟界に活躍すべく銳意勉學に努め、明治三十五年春、同校を卒業後横濱正金銀行に勤務し、初めて活社會に自己の第一步を印せり。

同年一年志願兵として近衛歩兵第一聯隊に入隊翌年十二月除隊せしが時、恰も日露の風雲急を告げ、翌七年六月國難の敵を討つべく召集令は下り、氏も亦近衛歩兵第一聯隊に従軍して滿洲の野に出征し幾多の勳功を樹て三十八年十一月凱旋の後勳七等に叙せられたり。再び正金銀行に入り計算課勤務を命ぜられ、稠密至難なる事務に對し毫も滯滞を見せず、天晴れ少壯手腕家として稱讃を博し、大正二年ボンベイ支店に轉任し次でカルカッタ支店に勤務する事五ヶ年に及び、同六年本店に戻り、拔擢せられて計算課主任となれり。大正九年大連支店に派せられしが數ヶ月にしてハルビン支店支配人代理に榮轉し、長春支店にありては副支配人となり、大正十一年春、三度本店に歸り支配人代理の重職を占め、銀行經濟の樞機に參畫せり。

斯く氏が成功した半面には駐外時代は各國民性經濟狀態を洞察して天稟の才を發揮せるに起因せりと云ふべし。

眞野猪之助氏

横濱市中區北仲通三ノ三四



眞野家は世々沼津に住し水野侯の御用達を務めたる舊家なり先代眞野重吉氏二十歳の頃即ち明治初年開港場たる横濱の將來有望なるに着眼し奮然郷里を出で、來濱し直ちに市内元町に於て古物商を營む事二三年の後横濱に製茶の入荷を見るや時局を見るに敏なる氏は大袋屋と號する製茶荷造用大袋製造販賣を創めしが非凡なる活腕家のみならず實行の人として縦横に才氣を發揮せられ二十年の努力を積み漸く業務の繁盛を來し現北仲通三丁目到店舗を新設し生絲荷造を兼業せしが奮戦

苦闘六七年遂に生絲荷造を專業となし一路邁進業務の發展に全力を傾注せられ基礎全く成らんとするに當り大正三年不幸にも六十八歳を一期として遠逝せられたり當代猪之助氏は其長男として明治九年五月市内元濱町に於て呱呱の聲を擧げしが資性穎悟幼少の頃より既に父の片腕ともなり家業に奮勵せられしが氏卅九歳の時父の喪に丁り即遺業を繼承せしが大正八年歐洲大戰後彼の黄金時代に遭遇せらるゝや即ち綿布の輸出を兼業し大いに巨利を博したり然るに關東震災の大厄に遭遇し家財を蕩盡するのみならず夫人令弟は恨を吞んで震死するの悲運に會するも烈々たる火の如き壯年霸氣に富める氏は毫も屈撓することなく奮然として之れが復興に全力を注ぎ遂に舊に優れるの盛運に到達するを得たり氏は人を容るの雅量に富み温情溢るゝが如き氣風を有す繁忙なる業務の傍書畫骨董に興味を有し其鑑識亦侮るべからざるあり。

安江政吉氏

横濱市神奈川區青木町三ツ澤二六三



孟母に三遷の訓ありて聖賢孟子を得、居は氣を移すは古今東西其軌一なり、蒔田小學校長として三十餘名の男女教員を統率し幾百千の青少年指導の重任を負ふ樞職にある氏の今日も蓋し生るゝの地其宜しきを得たるなる可し、縣下足柄上郡金田村は幾多育英界の良材を輩出して著名なる地なり、氏は祖業の酒造家たるを好まずして神奈川師範學校に投ぜり、若きベスタロッツは未來に輝かしき光明を認めつゝ明治四十三年三月卒業し、學窓巢立つや今日は教壇に立ちて道を説き智を啓き能

を授く市立老松小學校に在ること六年大正五年四月鎌倉師範附屬小學校指導等に拔擢され漸く初等教育界の逸材たるの鋒芒を著はし次いで三吉小學校に轉じて九ヶ年間傍ら同校内夜學校助教諭並に青年訓練所指導員を兼任し大正十三年三月同校首席に轉じ昭和二年四月更に吉田小學校首席に榮轉、同校にても夜學校助教諭並に青年訓練所指導員を兼任し同四年四月現蒔田小學校々長に榮轉せり。

嘗に氏の趣味を見よ運動に旅行に園藝に讀書に八面玲瓏而して人格圓滿に衆の師表となり慈父たるに格好の君子たり、されば昭和二年五月滿十ヶ年動績に付き表彰並に金一封を授けられ昭和三年十一月には大禮記念章を拜授し育英家としての面目之に依つて見るべし、夫人倭子氏は長野縣立松本高等女學校出身の才媛にしてよく夫君を扶け長男庄司君の傳育に専念し良妻賢母の典型として衆の讚仰する所たり

鈴木七十郎氏

横濱市中區本牧町

昔、豪雄信長は猿樂によつて戦國の争鬭意識を和らげ、英傑太閤秀吉は悠々たる茶道に親しみ膽を練れりと謂ふ。生存競争激烈なる現代に於て、人心總べて鬭争意識に熾烈ならんとする時、その人の社會的活動の反面に悠暢迫らざる閑日月あるは、其の人の奥床しき人間的の閃めきを察知さる。

常に繁雜なる銀行事務を處理する吾が鈴木七十郎氏が、その一日の勞務の疲れを一夕の謠曲に依つて慰藉し、心事の轉換を圖り、以つて明日の活動に資するが如きは、眞の事業家としての心懸けと云ふべきか。

氏は大正四年以來引續き、横濱渡邊銀行營業部次長として内外の重責を一身に擔ひ、かの經濟界不況

の折柄直面せる幾多の苦難に際しては、悠々沈着に事を處理して誤らず、常に同銀行をして不動の位置を保たしめ偉大なる功績は、獨り同行重役のみならず、斯界にあつても推稱の辭を以つて迎へらる。氏の精勤實直稀に見る高潔なる人格は、よく部下より畏敬され、氏は又、よく部下の心情を洞察してれ之を愛し、渾然融和せる精神は和氣霽々の裡に業務に従事し、些かも滯滞すること見當らざると謂ふ。

氏は三重縣阿蘇郡稻生村の産、明治十三年十一月呱呱の聲をあげり。幼少の頃より俊敏衆に優り、その將來を期待され長ずるに及び學序を経て身を經濟界に投じ、横濱に於いて渡邊氏の經營する同海産貿易部に入りしも、同部解散と共に、渡邊銀行に轉じ爾來奮闘今日の地位を築きたるものなり。

家庭には菊子賢夫人との間に一男二女あり、長女七津子嬢はフェーリス女學校に次女清子嬢は關門小學校に、長男博太郎君は第二中學校に在りて、頗る團圓に満てり。

宮部千太郎氏

横濱市中區山下町一七六



氏は滋賀縣彦根市の人明治七年二月七日宮部三平氏の長男として生る明治廿四年彦根中學校卒業の後郷關を出で神戸市に遊び或る貿易商に従つて其實務を研究し營々柄々以て日月を送りしが大いに得る所あり二十六年三月神戸在留の獨逸人ウイレタレル商會に入り同年十二月實業研究の爲め獨逸に派遣せらるゝこととなり同國著名の地を巡遊し彼の質直なる獨逸人の忍耐力と商業上の懸引等を實地に目撃して以て自己の見聞を廣め歸朝の後直ちに横濱本社に勤務せられたり其間同社の爲め

に拮据勉勵多大の利益を提供せり大正五年故あつて同社を退き同年四月宮部末高貿易商會を組織し各地有数の天産物陶器類の輸出と發動機の輸入を目的として最初十萬圓より五十萬圓の資本を募集し大正十五年までに全部拂込の規約により合名組織を經營せり而して順次支店を神戸播磨町五三四番地に出張所を某地に置く氏は温厚篤實の人格者として敢て殊更に趣味と稱すべきものなし夫人久子氏は山口縣の人一男一女を擧ぐ長男誠一氏は慶應大學在學中にして長女富美子は兩宮龍吉氏に嫁す婦道を和氣霽々の間に執れりと云ふ近來實業界は緊縮と云へ積極と云へ政府の更迭毎に種々の變動を來す波瀾重疊の感なき能はず此時に當つて氏の如き敏腕家が其間に立て左顧右眎各其の才能を發揮して其機宜を見て料理按排せば一攫千金の巨利を博し得るやも知る可からず氏たるもの斯界の爲め沈重自愛他日の成功を期して可なり。

森 富 藏 氏

横濱市神奈川區青木町東經井澤一九四五



氏は岐阜縣海津郡今尾町の人森腰四郎氏の二男として明治十二年四月八日に生る廿五年八月十五日横濱に來り各商會に入り勤續十二年の後四十二年一月十七日居を同市住吉町四丁目四十二番地に卜し獨立經營絹布綿布の加工卸業を開店せしに幸ひに順調に進みしを以て更に辨天通三丁目五十八番地に店舗を新築して茲に移轉する事となり大正四年四月北米合衆國紐育市に令弟某を派遣し支店を開設せし所經費膨脹のため失敗に終り翌五年十一月閉鎖の止むなきに至れり七年山下町にロシ

ヤ貿易美加登商會を設置したるも「ルイブル」の下落のため折閱の悲況に陥るを以て二年閉鎖の姿となり然れ共氏の本業たる加工卸部は多大の努力により駁々として盛運に向ひつゝあるが恰も大震災の厄に逢ひ七分通り破壊せるも一層の勇氣を鼓し奮勵したるを以て漸く昔日の觀を呈するに至れり目下英京ロンドンにも代理店を設け品物を送りつゝあるを以て他日の効果期して俟つべきなり氏は綿布組合の副組長として勤續九ヶ年に涉り孜々怠る事なく絹物綿布加工組合も徐々企圖するの傾きあり従て町區のためにも多少の盡力を拂ひつゝあり夫人シン子氏も亦岐阜縣の人嘗て大患に罹り久しく呻吟病褥にありしが偶々江間式により奇蹟的に快方に向ひ九死に一生を得たるの感あるを以て爾來夫人は社會奉仕の精神を以て世人の病魔に惱まされたる者の爲め殊に江間氏を聘し講演會を開き無料にて傍聴せしめし而已ならず夫人自己も亦其術を講究せりと云ふ。

内野 勇氏

足柄下郡大塚村板橋六二四

日本生命保険株式会社は我邦生命保険會社中最大なる權威者なり而して小田原代理店は近年出色の優績を示し尙ほ將來發展の一路を辿りつゝあり同代理店が前小田原町長今井廣之助氏の後を承けしは大正三年にして岳父勘右衛門氏なり當時の契約高約貳拾萬圓に過ぎざりき大正十二年には進んで四拾萬圓に達せり大正十三年當主内野勇氏岳父一切の事業を繼承して以來異數の發達を遂げ昨昭和四年末の同代理店管轄契約高は實に壹百萬圓を表し今五年末迄には優に壹百五十萬圓の線を突破するの覺悟と自信を有し周圍一般にもしかある可を豫評せり氏の業務上に

於ける手腕の程を顯著に示せり。

福壽火災保險會社も邦内火災保險會社中の白眉なり板橋代理店は從來小田原代理店と稱したりしも昭和元年板橋代理店と改め氏又此を管理せり大震災當時其契約高三拾萬圓なりしも今は既に壹百萬圓に及び尙ほ日々其高を向進しつゝあり此れ因より時運の然らしむる者あるも劇甚なる競走場裡に於て之の好績を得るは氏の努力と才能に外ならざる也。

氏は明治二十八年十二月二十日中郡吾妻村脇繁吉氏の次男に生れ横濱簿記專修學校卒業後一時神山商店に入り印度貿易に従事せり大正六年横須賀海兵團に徴せられ信號練習生として金剛にあり世界大戦には沿海州警備に任ず大正十年除隊するや内野家に入り養嗣子となれり岳父勘右衛門氏母堂りか氏健在せられ夫人みつ子氏に一嬢あり安子嬢と謂ふ。

川島喜之助氏

横須賀市不入斗町二二二

川島氏は清和源氏より出づ多田滿仲八世の孫頼仲川島と改姓し播州赤穂郡高田郷奥野に山城を築き高田郷を領す數世の後頼織一族郎黨を率ひて東國に降り新田氏に屬し北條氏を滅ぼし更に尊氏と戦ひ軍敗れて再び播磨に歸り舊城に居す後千種川の上流赤松城の城主赤松氏に従ふ赤松氏亡びて尙ほ其地を領す子孫豊臣氏の播磨を征するや城遂に陥り一族皆散す實に天正六年の頃にあり遺族多く關東に下り群馬八王子茅ヶ崎寺尾横須賀濱松等に散在し皆多田と稱し土豪に歸す。

正系川島庄左衛門氏當時不入斗に止り遂に農となる之れ此地に於ける初祖にして川島家の菩提寺は野

火村高御座五明山最寶寺なりと蓮如上人關東巡錫の節當川島家に假泊せられ主人清左衛門深く歸依せしと傳ふ以て其家の如何に舊きかを察す可し爾後清左衛門と襲名し苗字帶刀を許されし地方の豪族として毎に威權ありて尊敬を受く實に稀有の舊家なり。

氏は慶應元年乙丑十一月二十四日徳川幕府終を告げんとして兵馬流逸の裡に生れ長じて公事に盡す事甚だ深く先に神奈川縣會議員に擧げられ又横須賀市會議員横須賀市參事會員となり今不入斗部會顧問、共友會長の名譽職に推され學あり識あり而して高崇の人格を有し親しむ可く狃る可からざる君子的の人なり隨て趣味又高潔にして謠曲と菊の栽培に在り長生會秋香會の評議員にして妙技既に定評あり長男昌太郎氏慶應大學理財科出身の秀才にて目下神奈川縣農工銀行在職中也。

川合岩男氏

中郡平塚町新宮一四五三



川合家は世々徳川氏麾下の直臣なり徳川十五代將軍慶喜公群議を排し大勢に鑑み書を奉じて征夷大將軍の職を辭し三百年の政權を朝廷に返還して王政復古の大業茲になるに及び明治元年二月十一日江戸城を出で「國の爲め民の爲め」とし世を忍ぶか岡に墨染の袖」と咏じて上野大慈院に閑居せる後水戸に退き更に静岡に移り以て隱栖の地となし又世事に關せず花鳥風月を事とせり川合氏始終其行に従ひ家を擧げて移り大宮に住し園藝田圃の事に歸し誠忠一貫徳川氏に殉ず而も順逆を認

らず悠悠々時世の推移に順應せられし高風は眞に欽慕すべき事と謂ふ可し。

氏は明治二十九年九月二十三日久能廟邊紅葉未だ染めざる時に於て生る嚴父義智氏の長子なり夙に郷里の學程を歴て早稻田大學に入り大正十二年同校商科を卒業す其間保險學の講習研究の關係上直に日本生命保險株式會社に入社東京支店在勤を命ぜられ蘊蓄ある學識を實務上に試みるを得て大いに天來の才能を揮はし學才兼備の社員として頗る重望あり爾來滿六年間一貫精勤の後昭和四年に至り同社の平塚出張所新設に當り氏をして其所長たらしむ神奈川縣下に於て横濱と川崎の兩市を除く大部分は同出張所の管下に屬せり由來日本生命は保險界の覇者にして其契約高は生命保險會社中の首位にあり創立は明治帝國等と共に我邦保險會社の嚆矢たるは人の知る所たり此會社に於て此人を得たる平塚出張所の將來又以て卜す可し夫人敏子氏に義一君あり。

鎌田福太郎氏

神奈川縣藤澤町藤澤一四一五

世の多くの人徒らに心に望みのみ多くして現在の業に忠實ならず。嘆ならず、慨ならず、自らを勞する人こそ自らを救ふ。氏は明治二十三年三月一日鎌田長吉氏の四男に生る。長吉氏子を育つるは慈なれども教ふるに嚴なり。氏は東京日本中學卒業後現商科大學の前身たる東京高等商業學校に學び大いに實業界に志を立てたるも偶々家督相續人たる長兄爲藏氏病に臥する所となり學業半ばにして退學の餘儀なきに至る。父業を嗣ぎて紙、雜貨業に従事し暈勉よくその業に勵む。現に藤澤町仲之町に紙雜貨商として知らるゝ鎌田商店は氏の努力の賜なり。氏の才幹はこれに竭きず、明治四十四年十月藤澤印刷合資會

社を創業す。當時氏は趣味として和歌俳句等の雜誌を編纂しつつ、悠悠々自適し事業の經營は全く之を人に委ぬ。過ぐるること十年。されど其間の業績の面白からざるに鑑み氏は敢然自ら營業の第一線に立ち敏腕經營を司るや業績日に進み級數的の進展をなして遂に今日の巨をなすに至る。即ち創業當時は職工僅かに三人なりしも、今やその數二十五人を算し晝夜兼行業務に出精すれども尙ほこれ足らざる現況にて縣下一般の製絲業は勿論各警察署の仕事を全く一手に受け譽評高く將來を益々囑望せらる。業界の發展は氏の力に俟つ所多し。神奈川縣印刷業聯合組評議員、中郡印刷業組合幹事として創立當時より今日まで一貫して力を致す。氏の手腕大いに期待さる。

家庭は夫人はな子氏と三男一女あり、鬢々として幸福に滿つ。

宮道助一氏

中郡平塚町新宿一〇四六



愛媛の名何んぞ艶にして優なる而して其地の人何んぞ豪にして勇なる越智郡は瀬戸内海に面し藝豫の諸島其前に碁列す古昔藤原純友此地に據り王師に抗す爾來海豪の根據地たり平氏の海戦に敗れしは義經此族を善用せしに依る南朝の忠臣越智河野得能の諸氏共に此邊に起り降りて近古に及ぶも進んでは元明の朝を脅かし退ひては内外の官船を襲ふあり此の豪健の風は今や化して文明的商戦の勇者たるもの多し我邦に於て米國式月賦販賣を試みし最初の一人も此所より出づ。

氏は伊豫國越智郡の人父君吉之助氏の長男にて明治三十六年五月二十二日其家に生る若くして同地方に盛なりし月賦販賣に就き深き興味を持し世襲の田圃を顧みず大膽にも十七歳の小童を以て飄然無縁の東京に出で斯界の先覺者たる丸武の經來りたる經路に習ひ先づ準備知識を得べく關東より關西畿内殊に大阪方面の商況に視察研究を重ね遂に平塚に居を卜して現業を開きたり。

斯かる大規模の月賦販賣は平塚に於て嚆矢の事に屬すれば始めは猜疑と危懼の目を以て囁せられしも氏の正真なる努力と嶄新なる商策は遂に競走場裡の勝を占め今や變じて信頼と感歎の聲となり未だ二回の歳華を迎へざるに健全なる發達を遂げつゝあるは一に氏の智能と努力による一面に兩弟重雄氏輝雄氏の元就東矢の戒の如く一意協力の結果に外ならざるなり夫人すみ子氏内助の功又多く一家和樂共唱の家庭は四隣の欽羨する所たり。

(710)

中原安太郎氏

神奈川県逗子町山ノ根三九三

氏は明治二十五年十二月三日茨城縣西茨城郡笠間村の豪家中原家に生る。氏幼にして既に敏、若くして俊、長ずるに及び即ち鋭なり。知識欲に燃ゆる氣鋭の氏は山村の凡々たるを欲せず志を立て帝都に遊學す。即ち氏は東京府立第三中學より帝國大學に學び法科の課程を履修す。業成るや大正六年三井物産に入社し大いに活躍せんとす。されど氏の力も意志も計畫も自分のものに非ず或る掣肘を免れざりき。後獨立の機運に逢ひ、氏は三井物産を辭し梁瀬氏と共同して大正十五年七月横須賀三崎臨海自動車會社

を創立す。資本金五萬圓を以て専心創業の難に當る。氏の明晰なる頭腦により、十分なる見込と信念とを以てなせし事業且つ氏の尖鋭なる事務的手腕とに俟つて業績日を逐ふて進み當地方民の便宜と感謝と喜びの裡にいよゝ發展す。氏はその常務取締役として同社を一身に背負つて立つ。同會社は今や三崎浦賀間の遞送事業をもなし只管隆盛に向ふ。氏は戶外にあつては凡ゆるスポーツを鑑賞し、家にあつては謠曲三昧に耽る。蓋し氏の素謠は天下一品の稱あり。夫人静子氏妍容の譽高く令弟一政氏と三人の落着きたる静かな家庭なり。

(711)

故水島彦藏氏

平塚町新宿本町一四



水島印舗の當主正彦氏は年齒未だ少く弱冠に至らず正に十九歳にして縣立藤澤中學校出身の秀才にて故水島彦藏氏は即ち其先考なり彦藏氏は平塚町の誇りとす可き印刻の名手にして其名遠近に高かりし人明治二十二年俳哲をして「道灌の死して山河や春の草」と咏せしめたる邊りの農家に生る資性技工に富み幼時既に「器用の兒」として巨人を驚かせし天能的技能を有す氏も亦之の天與の才能を利し名を成さんと志を決せり。

當時東京に於て技量無比の稱ある斯道の大家岡村

梅軒及郡司様所に師事し一意専念業を修め技大に進み二十一歳の時既に師の勸に依り獨立して店舗を開きしも攻究力に熱き氏は更に妙奥に達せんと欲し毎に東京に通ひ汎ゆる名匠を訪ひ研鑽怠るなく遂に自得入神の域に入り明治大帝御崩御前一二現地に開業せるに至りたり。

天既に此の才能を氏に恵む更に之を衝動するに文學趣味の旺盛と共に彫刻印像の趣味大に勃興の機運を興へたり氏の名技に於て盛に擧る遠近傳へ聞えて其門に入り教を乞ふ者前後相踵ぎ獨り縣下のみならず遠く静岡に及ぶ其遺弟十數人就中堂々大店舗を有する五人に及ぶ數々平和博覽會、美術協會等に出品して常に賞讃を博せり其技量の非凡なるを知る可し氏は曾て國勢調査委員、町内役員、神奈川印刻業組合理事等に推され信望淺からざりしが惜む可し昭和五年四月長逝せられたり家には未亡人ちさ子氏に當主の外二息三嬢あり。

岩本七藏氏

横須賀市小川町五

氏は千葉縣君津郡秋本村平田一五二醬油醸造業長谷川隆治氏の六男坊に生る。郷里小學校卒業後木更津中學校に學び更に進んで早稻田大學商科の課程を履修す。資性偶異にして而も思想穩健、輕佻を去り着實に就くの士、懇請せられて大正十年十一月親戚關係になる岩本七藏氏の養子となる。養父の死後七藏を襲名す。先代七藏氏は若くして埼玉縣より來賀し時運に乗じ當市に活躍せる最古參者の一人なり。來賀の當時若松町にて酒類商を營み、爾來着々繁榮に向ひしが、湘南電鐵敷設工事の爲同所を買収せられ現所に移轉す。炯眼、時勢を見るに敏なる氏は、斯かる轉機を利し和洋食料品店を營む傍ら大正六年

大瀬町に同酒店を開き自己商品の運搬を掌中に收めて以て運賃の輕減を計ると共に他面顧客を利するを忘れず。否人を利して而る後自らを利する氏の經營的才能には以て學ぶべき點多々あり。其後當地の經濟的發展に伴ひ同濟事業を擴張し、自己商品のみならず、市中商品より東京横濱須賀實業團諸官廳のサイビスをも一手に引受く。現在支店を東京日本橋區箱崎町二ノ一四に置く。學識豊かなる新人、當主七藏氏を得るに及び事業は飛躍的發展を遂げ、海路に第一、第二神子丸の發動汽船を有して東京横須賀間を一日一回宛定期航行し、陸路にはトラックシャッシー一臺を有して當地貨物集散の重要任務に盡瘁せらる、食料品部の得意先は諸官廳病院學校を主とし店舗小賣を營み、使用人十人を擁して一ヶ年賣上高十萬圓より十五萬圓を計上す、賢夫人千鶴子氏との間に二男一女あり、家内和氣鬢々たり。

宮澤嘉平氏

横濱市神奈川區青木町栗田谷二五六

仙臺は東京以北第一の都會にして伊達家の舊城市なり古來武名を以て天下に鳴る宮澤家の祖は獨眼龍政宗公に事へ世々伊達家の近臣たり當主嘉平氏に至る迄二十七世を経たり先考宮澤謙吉氏藩の火番組の家に生れ幼より劍法を好み柳生眞影流の達人狭口新五右衛門に學び精力群を抜く門下の麒麟兒と稱せられ其蘊奥を極め維新前後藩政多端なるの時特に命ぜられて藩主側近の警護に任ず維新後暫く時勢の變遷に鑑み耕耘の間に隠れしが西南戦後再び士風武藝の新興に立ち武藝師範教導として學校軍隊の啓蒙に努め沛然として氣運大に起る實に斯業再興の大恩人と稱せられしが大正八年九月宮城縣武道發展史上を飾

る可き七十三年の幕を閉ぢられたり。

當主嘉平氏は明治元年十一月十五日仙臺市の中央北二番町堤通りの邸に於て謙吉氏の長男に生る資性淳朴剛健にして一見古武士の風あり流石に名士の血流たるに耻ぢざるの感を抱かしむ氏は青年の頃より身を官界に投じ前後相通じて四十八年永く職を宮城縣廳に奉じ明治三十年神奈川縣廳に轉じ衛生課に入り縣衛生上の行政に力を盡す事十數年に及ぶ此間終始一貫して高潔の行爲に依り俯仰天下に耻ぢざるの精動を續け今や官界を退き横濱の自邸に閑居せらる。

令夫人たまき氏は仙臺市古内家より入り四女換嬢に養嗣子兵吉氏を迎へ目下東京第一高等學校教授たり照子嬢東京高商教授酒井氏に嫁し芳子嬢女子醫學專門學校にあり。

松本丈太郎氏

横濱市中區本牧町二八二



松本氏本姓は藤原氏明治初年松本氏と改む當主延

太郎氏に至る迄實に三十二世延太郎氏は氏の長兄にして父君を忠雄氏と云ふ氏其

三男なり世々横濱市中區笹木町字松本に邸し神職を勤む父君も亦世職を襲ひ七十二歳の壽を得て卒せらる、氏は明治二十八年八月十七日を以て生れ遠祖藤原不比と生日を同じくするは眞に一奇と謂ふ可し。氏の教育界に志を立てしは松本氏代々寺小屋教育に従事し父君忠雄氏特に教育上の熱誠家なるに感化を受けしに基因せしものにして家職の一般を繼承せ

しに外ならざるなり大岡小學校を出で神奈川縣師範學校に入學し明治四十一年三月同校卒業、大岡小學校訓導奉命、後磯子小學校訓導に轉じ更に第二日枝に移り大正十三年七月大島小學校首席訓導任命、昭和三年四月尋常高等瀧頭小學校新築開校と共に同校々長に榮轉以て今日に及ぶ此間に於て昭和三年第一回功績章を受くるの外本市理科教育に對し功績顯著なる廉に依り功績章並賞金を授けられ又今上陛下御大禮記念章等の下賜を受けたり而して趣味生活と兒童教育方針等の趣味教育思想の感を有し「饒の言葉」なる小冊子を編纂し處世訓を示し人世の基礎を造り太陽に向て進め、毎に明るく善處せよ健康に留意せよ、健全なる趣味、感謝の生活特に女子の爲に、母校を忘るゝ勿れの諸項目に就て意義ある訓話を懇切叮嚀に解説せり夫人ちか女史は縣立高等女學校出身の淑媛にして勇雄君健三君文子嬢あり。

鈴木謙一郎氏

横濱市保土ヶ谷區神戸上町七一二

鈴木家は元代々三河國土居藩に仕へ國老職の家として權勢州中に比ぶ者なかりしが當主より七世前鈴木右門氏故あつて事に座し海道の名宿保土ヶ谷に來り醫を業とせり子孫相承け家産も亦加る祖父清三郎氏の代に至り維新の大變革に際するも能く財政上の變動に災せられず依然として廣大なる土地の所有主たる傍ら質屋商を營む里人の氏に對する父の如く里人に對する子の如く百姓總代となりて當時繁雜なる村政の事に當り大に盡す所あり六十一歳終焉の幕を垂れらる。

其子熊藏氏後を襲ふて立ち明治二十一年二月市町村制發布せらるゝや先づ選れて収入役に選ばれ辭任

後引續き町會議に推さるゝこと數回年老るに隨ひ信

望愈々深く同地の市に編入せらるゝ迄凡百の公務に奔走殆んど寧日なく今や一切の公私關係を絶ち悠々自適靜かな愛孫の撫育に餘生を送られつゝあり。

當主謙一郎氏は熊藏氏の長男にして小學校卒業後在原中學に入り體育に特色ある同校に依り健全なる教育訓練を受け卒業後父君の業を繼ぎしが震災後質商を廢し傳來の土地家屋を以て安全にして且つ平穩なる生計を送らる氏も亦保土ヶ谷町最終の収入役たり父君の初代収入役たりしと對比する時は偶然ならざる感あり往年菩提寺大蓮寺に奉納せし具足は建武年間の作にして當時の將軍着用せし物なる證左あり而して父君母堂共に健在せられ夫人せい氏に要藏君登君かな子嬢國枝嬢あり福祿壽共に備りし家庭とや謂ん。

飯島利八氏

横濱市中區本牧町五一六



氏の生家は内藤氏後入て飯島氏を繼ぐ明治二十一

年戊子の歲秋
十月六日神奈
川縣相模國足
柄上郡中村篠
窪の里に生る
篠窪は箱根翠

習の底に在り地幽に水清く人情純真にして風氣健實なり、内藤家は村の豪農にて嚴父亦耕耘に従ふ六十年の生涯を平和の郷に於て平和の生活を終らる氏は其四男たり氏既に此土に於て此の父を有す加るに附近歴史的由緒の地に富む氏の濃厚高潔にして剛毅篤學なるは蓋し環境の感化醸製より起る結果に外ならざる可きか故に君子は居を選ぶの語あり。

氏は夙に小學校の業を卒へ神奈川縣師範學校に入り明治四十二年三月同校卒業直に横濱市元街小學校訓導兼元街商業補習學校訓導に補せられ以來二十年間同校に於て子弟の教育に従事し昭和三年西前尋常高等小學校校長兼同校内横濱工業學校教授に任ぜられて今日に及ぶ。大正八年五月十個年動續の廉に依り時計一個授與、同九年十月國勢記念章下賜、同十三年五月十五個年動續に付き銀杯授與、昭和三年二月郷土教育資料調査等の功績に依り表彰狀並に金一封同三年十月元街小學校滿十九年九月精勵格勤功勞顯著に付き記念として禮服一着の贈與を受くる等枚舉に遑なし。

氏の趣味は甚だ汎く音樂、文藝、俳句、和歌俗謠等凡て文學的の嗜好を有し殊に川柳に至つて深く其堂に入れり要するに氏は奮闘の人たると共に趣味の人にして高潔珠の如き人格の持主たりはな子夫人に安之君正之君利之君孝之君千枝子嬢松枝嬢の子福者なり。

田中治助氏

横浜市神奈川区神奈川町西ノ町一



神奈川は由來海道の要衝に當り市街長く街道に沿ふて發達したる宿場なりしが安政元年米艦再び浦賀に至り幕使之を其地に抑る能はず交渉地を神奈川に移してより幕末對外の歴史は此地に於て面白き發展を爲し暫く外交の談判地たり田中家は此際文久元年六會村より出でて當時の神奈川宿に家に移し酒類商を創始して以來代々酒類業を營み五世の今日に至る七十餘年の歴史ある老舗なり祖父市五郎氏堅實勤勉の人田中氏の家礎愈々定まる祖父後幾松と稱し業を父君市五郎氏に譲りて隠居

す父君は幼名を藤助氏と云ふ霸氣英邁にして商機に通ず大に商勢を張り家運を興し壯年の頃より北米パンクーパー等に向つて雜貨を輸出して貿易の事に従ふ當時未だ北海道に鮭漁發達せざりし以前にあり依て代價輸入物として鮭の鹽藏物を移入せしに大に時好に適し忽ち巨財を作れり。父君の長子忠七氏其後を承け盛に羽二重及び雜貨の貿易を營みしも大正十二年の震災に會し家を舉げて神戸に移り今や頗る隆昌を極めつゝあり氏は先考市五郎氏の二男にして忠七氏の令弟たり明治二十二年二月九日を以て神奈川の邸に生る風に神奈川小學校を卒業し縣立第一中學に入り明治四十年同校卒業後父業の一部たる酒商を繼承して以來着實なる經營振に依り一步一步漸進を續け遂に今日の大をなし西ノ町衛生組合長として令名あり輕浮なる趣味を好まざ閑かに盆栽に勞を慰す夫人さみ子氏に基治君智江子嬢あり。

佐藤眞司氏

中郡平塚町一六四



平塚町の有する唯一の製糸場たる佐藤製糸工場の創立は遠く先代佐藤久次郎氏の時にあり佐藤家は世々中郡大山村に在りて農を業とせらる久次郎氏農業の傍ら繭買入を營む是れ今日佐藤工場あるの發端なり久次郎氏沈着にして豪膽大に商才を有す能く時運の推移を察しつゝ副業的の繭仲買より製糸業に移り一步は一步を進めて茲に佐藤製糸工場の地歩を確實に固むるに至りたり。氏は明治十年西南の戦雲正に酣にして薩軍僅に熊本を退くも尙ほ人吉に據るの時「鶯の老けり箱根關

の趾」なる五月二十六日呱呱の聲を擧げ稍長じて明治二十九年佐藤家に養はれ入て其家の嗣子となる氏は天才的に商才を有し其家を繼ぐに及んで一業務の擴張を謀り所謂日進月歩の進展振りを示し事業大に擧りしに際し偶々大正十二年の震災に會して一時頓挫の止むなかりし立場にあり。人間の勇氣は何物も之を拒む能はず直に工場の設備を整へ八十臺の製糸機を以て盛なる産出能力を發揮して今や男女工九十五人一日平均十二貫を下らざる盛況を呈し亞米利加向専門の蠶糸を製出して横濱を経て輸出しつゝあり殊に同工場の誇とする所は品質の優良なる點にあり亞米利加絹業博覽會を始め内外の博覽會若くは共進會に於て一等賞牌を受くる數回其他の賞狀賞牌を受くるは常例の如くなる一事なり神奈川縣製糸同業組合評議員たる二十年蠶糸同業組合中央會協議員に推舉せらる令夫人けい子氏に勝司君久子嬢百合子嬢あり。

八龜熊次郎氏

足柄下郡湯ヶ原町宮上六一三

天下の名勝湯ヶ原温泉の元祖として知れたる箱根屋旅館は明治二十一年の創立にして先考梅次郎氏より起る其泉質は曾て東京帝國醫科大學教授理學博士眞鍋嘉一郎氏並に石谷醫學博士の一ヶ月間に亘る精密なる分析試験の結果多量のラヂウムを含有するを立證せられ其の効驗に至ては一般に認識する所となりて驚く可き發展を遂げ其狹隘を感ずるの時四間に二間の大プールを設け浴客百五十人を入るゝに足る新築の別館落成を告げ茲に箱根屋旅館の暖簾に一段の光彩を加ふるに至りたり。

當主熊次郎氏は元治元年十二月二十四日の出生にして當年六十七歳の圓滿なる老紳士なり氏は教育界

の元老にして又各種公共事業に盡瘁する處甚だ多し明治二十一年教員檢定試験に合格すると同時に湯ヶ原小學校に職を奉ずる事實に三十一年に及び村會議員、郡會議員、郡參事會員、小田原町外二十五ヶ村組合常設委員、赤十字社特別社員、足柄下郡植林分區委員長、湯ヶ原保勝會役員等の職に在りて專念當地開發に餘念なし而して氏の功績中最も特筆すべきは道路の改修と町制の實施にあり由來湯ヶ原道路の狹隘は今自動車往復の廣幅路に化せしは全く氏の力に在り。

長男武男氏縣立師範出身にして現福浦小學校長たり次男彌一氏は山口高等商業卒業後現三菱倉庫勤務中なり三男理而氏は慶應大學理財科卒業現日本鑛業會社にあり四男征平氏は東大法科出身現京都府事務官たりふく子きく子千代子末子節子の五嬢は小田原高女出身也。

杉崎精治氏

横濱市中區本町八一五



杉崎家の遠祖は鎌倉の武士より出づ初代松崎次右衛門久敬氏相模國中郡比々多村串松に來住して農に歸す時は明正天皇の御宇徳川家光の治世にて島原落城し男女三萬人を誅戮せし寛永十五年にあり爾來星霜二百九十年代を累ぬる十三世連綿正系を失せず以て當主精治氏に至る家の菩提寺日蓮宗妙藏寺に家譜を存す氏は明治十九年三月十八日父君國太郎氏の次男に生る父君は不幸短命三十歳にして歿せらる氏時に僅に三歳専ら賢母ひで刀白の手に長ず母君氏をして醫家と教育家の二途を選ば

しむ氏遂に教育家たらんと志し明治四十二年神奈川縣師範學校を卒業し直ちに中郡尋常高等金目小學校首席訓導を命ぜらる同四十四年准教育養成所講師囑託兼任、大正二年横濱吉田小學校轉任、同校附屬商業補習學校訓導兼任同校にある十三年間其間讀方國語教育科の研究を重ね大正十四年石川小學校首席訓導兼附屬夜學校訓導兼任、昭和四年七月尋常高等立野小學校長拜命、立野青年修養團團長、女子青年會會長兼任して今日に及ぶ此の間に於て大正十二年十年勳績賞狀及賞品、同十五年滿十ヶ年皆勤功績章並に表彰狀、昭和三年滿十ヶ年勳績賞、同四年國語地理教育に付き横濱市より功績章金一封並に表彰狀授與せらる。氏は資性溫雅にして勤恪流石に名家の出たる風格を存し其教育方針は實質的人格の養成を主眼として身を以て徳化せんとするの觀念を有せらる而して家には令夫人さだ子氏に千代子嬢孝之君弘之君敬之君あり。

大澤徳太郎氏

横濱市中區元町一丁目

古來卑賤より出でて名を成し、功を遂げし人鮮からず、徳太郎氏は即ち此の例に洩れざる成功の人なり、氏は元町に在つて一介の労働者たりし淺吉氏の長男として明治十三年六月九日に呱呱の聲を擧げ、窮境に育つて節を枉げず、削骨裂肉の功あつて遂に今日を招致せるなり、氏は明治二十年石川小學校に入り、同校尋常科を卒業後直ちに元町なる大立商店に徒弟となる、同店に在つてレース、リンネルの製作に専心すること實に十有五年、此間に豊富なる經驗と優雅なる技巧とを體得す、斯くて推されて工場監督となるや氏の努力は舊に倍し、刻苦勩晝夜を分たず、能く同店の爲めに活躍す、斯る激務に身を

投ずと雖も好學の氏は寸暇を利用して青年會館に通ひ語學を學ぶことを忘れず、外人を顧客とする現在の素地を獲得するに至る、名工場監督として任に在ること五年、名聲噴々裡に同店を退き大正三年三月積年の經綸を提げて谷戸坂に店舗を設け獨立し、爾來好況期と外人顧客の増加に棹して大いに見るべきものありしが彼の大震火災に遭遇するや、積年の財を一朝にして焼失し、再び裸一貫の身上となりしが困苦缺乏裡に身心を鍛へ來れる氏は毫末も、悲鳴し歎嗟して、應變の處置を忘るゝが如きこと無く、慘跡未だ去らざる十二月初旬、元町の一角に店舗を再設するに至れり、其後倍舊の精勵と努力とに依り着々舊に復し隆盛に向ひつゝあり、夫人ハマ子氏との間に光雄君、文雄君の二君を有し、本宅を本牧に構ふ。

石黒保義氏

横濱市鶴見區鶴見町八〇一



鶴鶴原遠月孤明、欲出關門且駐行、應惜平生廣陵

散、鐵衣風露
夜吹笙、と詠
史の吟あらし
めたる相州足
柄の地は雅談
哀調千古に傳

ふ可し氏は實に此地の人明治十五年壬午金風古關を渡つて月に嘯ぶく仲秋九月十三日足柄上郡中井村井の口の豪農石黒松太郎氏の嗣子として生る石黒家は八代名主動績の名家なり。

郷校中村小學校卒業後神奈川縣師範學校に入り明治三十七年三月同校卒業直ちに附屬小學校に教鞭を執り同四十年四月横濱第五高等小學校訓導奉命、同

四十一年尋常高等戸部小學校訓導に轉任、翌四十二年西戸部小學校訓導大正八年四月西戸部小學校校長任命、西戸部青年訓練所主事及西戸部女子青年會會長兼任更に南吉田小學校校長兼南吉田青年修養團長就任、同十三年三月二ツ谷小學校校長兼青年訓練所主事女子青年會會長に轉じ、昭和四年七月尋常高等根岸小學校校長任命、根岸青年訓練所主事、女子青年會會長兼任以て今日に至る此間大正九年國勢調査記念章、大正天皇並に今上陛下の大禮記念章奉受、十年間皆勤教育功績章等を受くる事列記に餘なし。

氏は教育上時勢の進運に順適す可く且つ他校教風視察の爲め足跡殆んど遠近に汎く東北方面より關西方面に達し更に昭和二年五月南洋群島方面の教育狀況の視察見學する等苟くも校務の餘暇あれば此を善用して始終一貫席の暖る暇なき努力を拂はる氏の如くして眞に生ある教育家と稱す可きか而して令夫人を千代子氏と云ふ則義君利夫君あり。

茂木正吉氏

横浜市中央区本牧二五二〇

趣味は人格の反映であり、多端なる業務の傍ら閑暇を得て、園藝讀書に親しむ悠々たる心境を持ちてこそ、海外活躍の雄圖は完成さる。斯くして我が茂木正吉氏の偉大なる人格の閃めきを窺知し得可し。氏は足利市東町茂木喜一郎氏の三男、明治十八年三月の生れ、長じて横浜商業學校を卒業するや米國ニユーヨークにある茂木桃井商店に赴任し、海外發展の雄志を實現すべくスタートを切れり。同商店は、氏の長兄喜太郎氏が明治二十三年の頃、桃井氏と協力一致のもとにニューヨーク市東十六通りに開業し日本陶磁器、絹綿物、雜貨類を主輸入販賣に従事せり。長兄喜太郎氏も幼時より海外雄飛の壮志を抱き

渡米するや刻苦精勵、屢々襲はれるノスタルジアと戦ひつゝ、桃井達雄氏と共に奮闘し遂に今日の基礎を築き上げ、同地日本商店の第一流として信用を博するに至れり。新に正吉氏の之れに參畫するや、愈々歩調を一にして業務發展に盡瘁し、支店を横濱、神戸、名古屋に設け、日本内地との連絡を圖り益々聲價を發揮せり、大正四年氏は在米十年にして歸朝し、横濱支店に在りて内地支店を統一し、輸出品の選擇に意を注ぎ、大正十一年長兄病歿後は、よく桃井氏と協力發展に厲心し、年一回必ず渡米して意志の疎通を圖り萬全を期し、慎重堅實主義を以つて事に臨み、遂に今日の隆盛を見るに至れり。家庭には母堂八十三歳の高齡を以つて鏗鏘とし、夫人みき子氏よく家を守り氏の雄志達成を念願とし貞淑の譽れ高く二男一女あり。

森富太郎氏

横浜市神奈川區宮田町二二三五



尋常高等磯子小學校校長森富太郎氏の先代森榮助氏は鎌倉郡永野村永谷の出身にして滿四十年の生涯を教育に献身せられたる神奈川

縣教育界の功勞者にて都築郡三俣川村今井尋常小學校校長在職中昭和二年四月五十九歳を一期として長逝せられたり現夫人松枝女史は實に榮助氏の第一女なり。氏の生家は山本氏後森家に迎へられ其姓を襲ふ明治十七年甲申一月十八日御歌會始の祝ふべき日を以て生る父君を山本直次郎氏と云ふ直次郎氏温厚篤實

の人大正十五年七十四歳の高齡を得て歿せらる氏は其次男なり尋常科を星川小學校に高等科を川島小學校に學び神奈川縣立中學校に入り同校卒業するや直ちに東京に出て修學年あり明治三十七年二月尋常高等程ヶ谷小學校訓導奉命爾後同校に精勵すること十一年其間學務委員其他學務に關する公職を兼帶す大正四年星川小學校長を命ぜられ後尋常高等西戸部小學校首席訓導の職に在ること六ヶ年後大岡小學校長に任ぜられ滿五ヶ年令名を博し昭和四年五月尋常高等磯子小學校校長に榮轉して今日に至る。氏は常に教育上視察を怠らず餘暇あれば必ず遠近を巡學す關西方面の如きは數回に及ぶ昭和二年八月北海道、樺太地方等の教育視察を了す而して十年勳績表彰を受け其他教育會より十年及二十五年勳績記念品として銀時計並に表彰を受けし外教授上功績顯著なりとして賞狀授與ありし事一再ならず夫人に愈君節子嬢和子嬢の外義弟迪之助氏義妹清嬢あり。

木村政廣氏

横濱市中區本牧町一七九一



氏は俳人正岡子規を産みたる伊豫の人明治十八年
乙酉蜥蜴も睡
むる八月二日
邦内最古の温
泉地道後と程
遠からざる愛
媛縣喜多郡滿

穂村に於て生る父君木村熊次郎氏の長男なり父君は
堅實眞面目なる豪農にして能く公共自治の爲に盡さ
れしが五十二歳にして永久歸らざる眠の床に就かれ
たり。

郷土の小學校卒業後愛媛縣師範學校に入り明治四
十一年三月同校卒業、翌四十二年體操科の文檢に合
格し、同年秋山高等小學校訓導科四年間同校勤務

同四十五年九月宇摩實科高等女學校に教鞭を執り國
語及體操科擔當して大正三年十一月に至り一朝感ず
るありて決然鎌倉山下の家を擧げ横濱に出づ。

同年横濱市本町小學校訓導科兼任、横濱商業學校專
修學校助教諭兼任、同十年三月大島小學校訓導科兼任
同十二年四月同校首席訓導を命ぜらる、同十三年六
月日枝第一小學校首席訓導に轉勤、同四年六月尋常
高等杉田小學校校長に榮轉、市立杉田實業補習學校長
青年訓練所主事、女子青年會顧問、屏風ヶ浦青年團
副團長等兼任して今日に至る。

氏は曩きに五年勤績表彰を受け尋て十年勤績表彰
を授かり又十五年勤績表彰を受け昭和三年十一月大
禮記念章下賜の外校名にて神奈川県道路愛護共進會
に參加し成績優良に仍て表彰せられたり而して其趣
味は運動一般の外園藝易學等に涉り就中易學の造詣
頗る深し資性孝順にして母堂つねよ刀自に事て至孝
を盡す夫人ふく子氏に正生君正喜君の外二嬢あり。

戸塚慶次郎氏

横濱市中區元町

維新以來の本邦産業開化史上燦として独自の地歩
を占むるものに衛生工業あり、當市に於ける該業の
普及と開發とに卓功ありし人は、即ち吾が戸塚慶次
郎氏其人に外ならず。氏の家は代々南太田町に在つ
て農を業とせしが、當市の著しき發展の爲め畔路が
化して舗道となるに及び、尊父吉藏氏は農を廢して
米穀商となりしが、大正二年、是も亦辭して閑居す。
氏の斯界に關する來歴は、氏が年齢十七にして水道
局に入りしと共に展開す。水道局に於ける六年間の
修養期を了ふるや、氏は關西地方に遊學して斯業の
研鑽に盡瘁すること更に二年半、明治三十九年四月

遂に該業を自營するに至る。之れ當市に於ける衛生
工業の呱呱の聲なり。當時に於ける當市は未だ衛生
思想極めて幼稚にして、斯業に對する理解を缺除せ
るため、其販路は狭少にして、外人及び上流階級に
限定せられしが、横濱市の漸進的開發と氏の不撓の
努力と相俟つて、着々斯業の進路は擴大せられ、此
處に於て氏の見と勤勞とは報復せらるゝに至り、
遂に氏に今日の隆盛を致す、氏は斯界隨一の勤功者
にして、現今該業を營むもの陸續として出現し、驚
異的發達を見るに至れりと雖も、之れ皆氏の先鞭に
負ふところなりと稱するも過言に非るべし。氏の業
歴は極めて廣範圍に亘り當市に於ける大衛生工事に
して氏の手目を経ざるもの無し。夫人キノ子氏との
間に三女を擁し家内和氣充滿す。長女シゲ子氏は神
奈川縣立高等女學校の出にして琴に堪能なり。

秋山兵三郎氏

横濱市磯子區磯子町五四五



上毛に三個の名山あり榛名赤城妙義此れなり妙義は山容の怪奇を以て開ゆ妙義の北麓を確井と云ふ確井峠は古來中仙道第一の天嶮

と稱せらる氏は群馬縣確井郡秋間村大字西上の豪農秋山藤七氏の次男として佛山確井途上に「積雪古關を埋め、山は深くして歳未だ還らず」と詠せしめたる明治丙子九年一月十有三日に生る父君は純真其儘なる篤行家なり天壽八十四歳を得て歿せらる。

秋間小學校卒業後群馬縣師範學校に入り明治三十年同校卒業、母校秋間小學校に職を奉じ同三十六年

九月東京高等師範學校入學、四十年三月同校修身教育専修科卒業、直ちに埼玉縣師範學校教諭兼舎監任命、同四十三年六月大分縣師範學校教諭に轉任、同校附屬小學校主事を兼ぬ、大正六年七月横濱市尋常高等小學校校長に轉勤、同校商業専修學校校長兼任今日に至る此他市教育會幹事、司法省少年保護司囑任、市學務委員、教育講習所講師に任ぜらる大正九年教育狀況視察の爲め歐米各國へ出張翌年歸朝、明治三十六年教授管理超是に依り授章、大正二年叙從七位、大正四年大禮記念章下賜、大正六年高等官七等待遇、大正十年國勢記念章下授、大正十二年奏任官待遇、昭和三年大禮章下賜、同時賜饗場に於て饗饌を賜る、昭和四年天皇横濱幸行の時縣廳に於て拜謁を賜る、同年勳八等瑞寶章下賜、昭和五年復興記念章贈與、同年教育内容研究改善を圖り功績顯著に依り功績章併に金封贈與せらる而して夫人さと子氏に三嬢あり。

三村庄右衛門氏

横濱市神奈川區淺間町七四一

淺間町が其昔東海道の立場として街道を行く人此所に草履の紐を解きて茶を啜るの時必ずや豪農二ツ家の噂を茶亭の老婆より聞きつらん、則ち同家は淺間町草分けの舊家にして元御村と呼び中頃改めて三村と稱す、素封家而して村夫子、世を改め代移りても尙變はらざるはこの天與の恩恵と特權たりしなり則ち庄右衛門氏は明治二年一月二十九日戸長に推されて自治の大父となり數多の善政を布き治績の見る可きもの少からず、地租調査委員となりては未計の地を量りて開化の第一階梯を踏み進めし功亦没す可からず十二年又選ばれて戸長に就任、十四年に推されて學務委員に十六年更に芝生村學務委員に斯く學

事教育に奔走盡瘁する氏を俟つて可能なる事多く、芝生學校設立の際はその功遂に黙止し難く贈るに木杯を以てす、十九年コレラ豫防に狂奔して町民を愛する赤心は認められて又木杯を、齡古稀に達して尙且斯如し、七十七歳數多の偉功大業を奠めて去れり、嗣子なく長女キク子氏に正信氏を迎へて嗣子となす、正信氏襲名して庄右衛門を稱す、夙に育英界にありて業績尠なからず、准判任官十等迄なりし氏は多年の教壇を降りて芝生小學校世話係をなし亦下星川和田村佛向阪本の戸長となりて岳父と共に並び稱せられ鼎の輕重誰か定むるを得ん、六十歳の圓熟せる人格を以て惜しくも逝かれたり、キク子刀自今や静寂境に三昧して餘生を送られ戸主マサ子氏に未來を託さる、噫一世の傑物君子相踵いで去る、積善の家に榮光あれ、榮光永へに燦たれ!

熊谷藤作氏

横浜市神奈川區青木町一五四



俳聖芭蕉は「荒海や佐渡に横とふ天の川」の名吟あり「佐渡は真い國黄金の國よ」佐渡は黄金の代名詞なるかの感あらしむる耳己ならず歴史的にも名所舊蹟の探ぐる可きもの亦妙からず眞野陵眞野宮黒木の御所をめぐりて順徳院の古を偲べば感慨無量のものあらん。氏は新潟縣佐渡郡相川町字下京町の人明治十二年三月十八日藤山富五郎氏の次男に生る後明治二十三年年齡十三歳母堂の實家熊吉氏を相續し其姓を襲ふ明治三十一年海員を志望し日本郵船會社米國航路船

に火夫として乗船し業務實習の傍ら獨學航路術を研究して同三十八年遞信省海技免狀試験に合格同四十二年機關長に合格以後神戸野口汽船株式會社及東京古河商事株式會社所有客船及貨物船の機關長を歴任し日本沿岸より支那、印度、歐洲、濠洲米國等世界的航海を連續せられたり。後思出多き海上生活を鎖ぢ大正十一年横浜市星野町鈴木孫太郎氏經營の元鈴木造船鐵工所に技師として聘せられ船舶修理に従事中東京栗林商船株式會社の信用を得て同社の汽船十三隻の修理を託され超て大正十五年同社後援の許に神奈川區千若町に熊谷造船鐵工所を設立し造船及船舶修理を目的として營業し爾來同社の專屬工場たり永年本社機關長の重職に就き實地の經驗豐富なる特色を有するが故に設計の完全と仕事の親切なるを各船主及技術監督者の認むる所となり發達今日在るに至る令夫人久江氏は神戸女學院出身なり長女郁子嬢横濱眞女學校卒業の才媛なり。

伊藤三之助氏

横浜市中西區西戸部町九一六



明治十八年此頃より維新の變亂により度外視せられたる文學漸く勃興し傾向一變して從來中古語メータの制限を受けし和歌は洋詩の形に倣ひスタンザを數列せし所謂新體なるもの出て小説亦古來人格を重んぜざる奇傳小説は變じて實寫小説行はれ政府は此歳再び教育令を改正し義務教育の制を設け小學より高等の學府に及ぶ諸制度を確立せり氏は此の教育上意義ある年の十月二十一日を以て生る眞に教育家としての生時を得たり。夙に郷里の小學校を卒へ神奈川縣師範學校に入り

明治四十年三月同校卒業後直ちに川崎尋常高等小學校訓導となり精勵七年を経て大正二年九月尋常高等戸部小學校訓導に轉動し居る九年にして同十年四月尋常高等女子安小學校首席訓導に轉じ昭和二年再び戸部小學校首席訓導となり同四年四月現尋常高等西戸部小學校校長に榮轉し同校女子青年會長を兼任して令名今日に至る。此間大正九年十月國勢調査記念章授與を受け大正十二年五月十ヶ年勤績に付き表彰狀並に金一封を贈られ昭和四年十一月大禮記念章下賜せらる而して氏は縣下橋樹郡生田村字生田の人父君徳次郎氏の次男なり伊藤家は永く此地に住し世々農を業とし篤行の家風を以て遠近に聞へ父君又堅實穩健の人にして今歳七十九歳の高齡を以て本邸に靜養せられつゝあり氏の趣味は園藝に在り僞華の享樂を好まず家庭の圓滿は言ふも更なり神奈川師範出身の澤夫人に長男正夫君あり。

溝越他久太氏

横須賀市旭町三二

氏は山形縣北村山郡福原村の人父富次郎氏は米穀酒類商を営みしが八十歳の高齡を以て遠逝せられたり氏は其次男として明治十年十一月十二日を以て明治三十三年日本法律大學に入り卒業の後他の學生の如く媚を權貴の門に呈し交を各會社等に結び東奔西走就職に没頭し而して其求めんと欲する所を得ざれば或は佻達自ら輕薄兒に陥るもの往々是れあり氏は敢て其徒に倣はず野にありて書籍文房具商となり勵精刻苦斯業に従事し其結果として商運逐日隆盛を極め目下横須賀中學校三浦中學校實業補習學校工廠見習所横須賀高等女學校實科女學校湘南義塾夜間中學校横須賀商業學校其他の小學校教科書の一手販賣を

業とせり名譽職としては神奈川縣書籍組合常任幹事及横須賀市文房具組合員神奈川縣中等教科書販賣所取締役に選ばれ皆其職を曠ふせず夫人すみ子一男一女を擧ぐ長男清一氏は家に在て父の業を補佐し孜孜として精勤日も亦足らざるが如し長女しん子は横須賀高等女學校出身にして三味線琴曲生花等一流の名家即ち佐藤美代勢川瀨里子等に從つて研究數年皆其堂に入る家庭團樂溫情掬すべし要するに氏の家庭の如きは奥羽の天地よりこの殷賑な都會に出て郷里獨特の質直なる氣風を失はず勤儉以て家を理め商業に熱心なる外他念之れなく社交亦商業界に在つて頗る圓滑なりしを以て許多の役員に選れ敢て其任を辱かしめざる如きは氏も亦計算の一商賈に非らざるを信ず今より後益々業務を勵まば他日の發展期して俟つべきなり。

長野 宏氏

横須市中區本牧町三三四



氏は明治十三年一月十四日神奈川縣都築郡中里村成合の豪農長野市藏氏の四男に生る夙に神聖なる教育界に立んと志し尋常鐵小學校を出て神奈川縣師範學校入學、明治三十六年三月同校卒業、中里小學校訓導奉命、同年九月同校校長並に同校補習學校校長任命、明治四十五年八月尋常高等新田小學校校長兼同校補習學校校長就職、大正四年八月久良樹郡尋常高等三分小學校校長兼同校補習學校校長補任、大正六年四月津久井郡視學奉命、同八年五月鎌倉郡視學に轉任、同十年四月尋常高等大島

小學校訓導就任、同十二年五月同校校長並青年訓練所主事兼指導員、女子青年會顧問、同窓會會長に就任以て今日に至る。曾て九州一圓の視察を了し昭和二年更に海外視察として朝鮮、滿洲、支那、露國、沿海洲方面に及ぶ又明治四十年神奈川縣模型に付き時の縣知事周布公平氏より褒狀を受け大正二年滿十年勤績章を表彰され昭和三年勳八等瑞寶章を授けられ同月大禮記念章を受く。氏は讀書と園藝を好むも子女の教育を最大なる趣味とし又最大なる義務と信じ力を注がる、や大なり令夫人なか女史は縣立高女第一期卒業の才媛にして長男壽男氏は縣立第一中學を経て東京商科大学卒業後三菱銀行本店在勤大男勉氏は縣立第一中學を卒へ東京商科大学在學中長女靜嬢は神奈川高女出身中山工學士に嫁し二女信子嬢は横濱高女卒業後横濱女子專修學校卒業目下家に在り三女幸江嬢は縣立高女在學中四女節子嬢小學校勉學中なり。

飯島壽一氏

中部平塚町新宿二四七



國府津は由來名勝の地なり萬株の翠松一路長く連りて相模灘の綠波と相映帶する邊り光風謂ふ可からず曾我兄弟の産地たる曾我の里も一里の内にあり箱根に遊ぶ者伊豆に入る者皆此地よりす飯島家は國府津に名高き豪農にして歴代繼續地方銀行取締役の席位を占め且つ漁業權の所有家たり昔より諸侯往復の御用商にて代々名主を勤め威勢双ぶものなく嚴父善助氏の如きも明治二十一年二月市町村制發布當初より二十有餘年の間町長に推され國府津發展の爲には多大なる努力を盡され現に同町

の素封家にして名聞高き舊家たり。
氏は明治二十三年五月九日先考の五男に生れ幼時聰敏不羈にして常に群童を壓す後下田家の養子たりしも氏の霸氣横溢なるに災せられ養家に在つて意の如くならず即ち去て自營自立の謀を策し決然人生行路の難に就き具さに艱難を嘗め或は埼玉越ヶ谷の萬壽屋吳服店に或は東京前川吳服店等に轉々し惡職苦闘を連續する茲に年あり後東京深川に合資會社尾張屋吳服店を創立して其代表社員となり又横濱伊勢崎町に移り堂々たる店舗に依り經營一年半思ふ所あり之を解散して大正六年國府津に歸り飯島吳服店を開き同十四年平塚町に支店を置きし以來氏の活躍は眞に目覺しきものあり今や平塚を本店となし第一位の吳服店たり氏は徹頭徹尾自立の人なり努力の人なり曾て困苦の時に處し巨萬の資力ある實家の援助を請し事なき氏の誇とする所に屬す夫人ひろ氏内助の人眞人に恥ぢざる賢婦人なり。

(734)

内田秀松氏

府下在原郡田園調布四四七

我國財界の巨擘大倉喜七郎男の社長たる大倉商業株式會社の出張所として四十年前横須賀に創立されたる當所は海陸軍の官廳病院學校等へ需用品の納入を目的として經營せられたるものにして今年を逐ふて發展の盛運に向ひ現に一年數百萬圓の巨額を管掌せらる内田氏は其主任として勤務せられたり氏は東京府の人竹岡善兵衛氏の三子として明治二十年七月十一日を以て生る後内田善吉氏の養嗣子となり依て内田氏を冒す二十五年家を承く四十五年慶應大學理財科に入り研鑽數年風夜懈らず業大いに進む卒業の後大倉商業株式會社に入り横須賀出張所詰を命ぜらるゝや其學ぶ所を實地に施す才氣煥發自己の手腕

を發揮せしが遂に選拔せられて浦鹽斯德出張所の主任となる氏は直ちに命を帯びて赴任せられしが能く地方内外の形勢を察しなす所往々機宜に當らざるなく大いに我國商界の面目を顯はす其功績偉大なるものあり大正十一年亦横須賀出張所主任となる氏は忙中閑を偷んで「オール」を操るの趣味あり夫人淑子は岐阜縣大橋樹太郎氏の長女にして東京女學館の出身なり一女を譽ぐ夫妻和樂家庭誼如人をして羨歎に堪へざらしむ世には學術の割合に其の手腕を運用するに乏しきものあれども氏の如きは大いに然らず北濱千里の浦鹽斯德に在て能く外人と樽俎の間に折衝し能く彼我の間を圓滑にし名實共に辱めざるは大倉組一方の重鎮と云ふを憚らざるなり氏は今後國家のため財界のため練熟せる商略と學力とを以て之を事業に應用せば社運の發展計るべからざるを信ず。

(735)

櫻井久三郎氏

横濱市中區羽衣町一ノ三〇



氏は明治八年二月十五日埼玉縣秩父郡原谷村の舊家櫻井家に生る家は遠く元祿以前より此地に住して名聞あり世々久三郎を襲名とす氏の幼時を鶴太郎氏と呼ぶ父君歿後其家を繼ぐに及び久三郎氏と改む先代久三郎氏の三男にして今や横濱斯業界の重鎮と稱せられ神奈川縣藥種賣藥商同業組合副組長の職に在り又町内の長老として伊勢崎町衛生組合創立當初より組合長の席に就き社會的信望殊に厚し。

先代久三郎氏青年の頃横濱に來り具さに辛酸を嘗

め奮闘努力の結果明治十八年伊勢崎町に藥種賣藥化粧品卸商を開き揮身唯だ家勢の進展を計り眞に不休不眠の艱勉を繼續して商勢大に昂り隆盛比なし大正十一年七十九歳の高齡を以て永眠の床に入らる氏は其二男なり。氏既に其家を繼ぎ其業を承く夙夜孜々度々父君の偉業を失墜せざらん事に勉め加ふるに天性の穎敏なる商才は社會の進運に順じ縦横自在に發揮して取引益々擴大を來し神奈川縣一圓より東京府下靜岡縣千葉縣方面に涉り伊勢崎町の店舖狹陋を告ぐるに及び遂に羽衣町一丁目三十番地に壯大なる卸部新館を設立するに及び尙ほ進々の勢力を持して今日に至る。氏は書畫と骨董に深き趣味を有し其鑑定に於て一家眼を有し子規の所謂「虫干や芭蕉の偽筆掛にける」の域を脱せりと聞く而して夫人せい子氏又内助的の賢婦人にして殊に長男喜一君二男俊男君の教育に力を盡され喜一君は帝國大學醫學部に入り藥學専攻中にあり俊男君は第二中學の秀才なり。

石渡 保氏

横須賀市若松町三七



若松町は横須賀市景勝の地にして前面遠く房總の連瓦を望み近く走水の海岸を眺め濃淡其の宜きを得てしかも碧藍色を呈したる一大池の如き東京灣内には富津の海堡猿島の飛石あり巨艦大船悠然と出づるあり漁舸小舫の歸帆風を孕みて入るあり眞に畫中の畫なる所是れ我石渡旅館のあり所なり。

氏の生家は淡野氏後現浦賀町長石渡秀吉氏の女婿となり其姓を冒す淡野家は山梨縣東山梨郡山村の名門にして實父を淡野榮助氏母堂をやよ氏と謂ふ氏は

其長子なり實姉かめ女史は名ある書家にて書道教授を以て聞へたり由來甲州は山峻に人俊なり信玄の如き其代表的一人にして遺風今日に至て尙ほ存す風治り浪靜かなる現代に於て大小の成功者相輩出するは偶然にあらざるなり氏も多く此氣風を享け資性俊髦闊達機を視るに敏なり殊に稜々たる俠氣人に接するは蓋し氏の特色なり。

氏は明治二十四年十二月二十日を以て現地に生れ八幡山小學を経て開成中學を卒へ横須賀工廠會計課に後退廠して以來十九年官納業を營む今重なる取扱先は明電社電力電燈諸器械三越家器家具綿布、山田木工所木工諸器械、本城鐵工所工作工具諸器械ラヂオ器械器具一切、江戸川莫大小製造所莫大小製品等にして宿屋同業組合副組長、評議員、町内睦會幹事に推舉せられて令名あり。

夫人ふみ氏は長井の人淑徳あり夫君と共に實母やよ刀自に孝養を盡さる長女ふさ江嬢二女榮子嬢ありふさ江嬢は横須賀高女にあり。

古平敬爾氏

横濱市中區大橋町三ノ六六

川柳の文句に「先生と云はるゝ程の馬鹿でなし」馬鹿を捉へて先生と云ひ白痴を見て大將といふ蓋し一種のアイロニカルには相違なきも教育家の尊嚴を冒瀆するも甚しといふべし今金港教育界に於て十指に屈せらるゝ横濱市立共進尋常高等小學校長古平敬爾氏は神奈川縣久良岐六浦莊村三分の産先考は同村現八十九代變名の多額納税者相川文五郎家の門より出でし古平吉兵衛氏にして氏は其二男と生れたるも十歳前後兩親に死別せるを以て叔父相川氏の許にて養育され何不自由なく三分小學校を卒業せるも氏幼にして既に穎敏焉んぞブル階級の御曹子を以て甘んぜんや當時二宮尊徳の苦學力行深く鑑みる處あり獨

立自營を志し神奈川縣師範學校へ入學すると同時に相川家よりの仕送りも殆んど辭して苦學力行明治四十二年三月卒業するや母校三分小學校を振り出しに大正三年十一月第一講習科修了後四年十二月久良岐郡富岡尋常小學校校長兼附設實業補習學校長となり七年三月大岡川小學校長に轉じ九年三月再び思ひ出多き三分小學校へ校長として錦を飾り四年五月久良岐郡視學十三年五月横濱市吉田小學校訓導青年訓練所指導員を歴任して同十五年九月現職に榮轉同時に同校内共進工業專修學校長をも兼任し今日に至る夫人まつ子女史は神奈川縣女子師範出身の女優にして横濱元町裁縫女學校共進小學校裁縫科を経て目下は東小學校に教鞭をとりつゝあり長男長女は夭折し二男逸郎氏は大岡小學校六年在學中、趣味は園藝讀書運動特に劍道に長ずといふ。

北山喜太郎氏

横濱市中區根岸町三〇二七

氏は明治十四年二月二十日埼玉縣北葛飾郡八代村字長間に名高き舊家北山久兵衛氏の長嗣子として生る明敏穎悟夙に身を商業界に立んと志し明治三十六年氏十三歳の時郷里を後に横濱に來り扇町に化粧品雜貨卸商店として名ありし安齋商店に入り粉骨碎身主家の爲に盡し傍ら商術を實地に修得すること四ヶ年幾多の辛酸を體驗し明治の末尾に至る。

安齋福太郎氏外四氏の匿名組合は大正六年五千圓の合資會社組織となる氏尙ほ之に與り異數の發達を遂げしに大正八年大火に罹り同會社及有力出資者二三烏有に歸し慘狀見る可からざるに至る氏此に於て敢然蹶起し災後の丸共合資會社一切を繼承して揮身

を捧げて奮勵し以て復興の事に力む漸く舊勢を挽回するに及び大正十一年五月内容を改善すると同時に資本金を七萬五千圓に増加し更に陣容を整へ一路發展に邁進せり。

十二年の大震災は再び不幸なる同會社を襲ひ又起つ能はず同年十二月解散せり剛強不拔なる氏は再び奮起して苦闘八年の後昭和四年資本金三萬圓を以て會社を組織し丸共會社當時の繁榮を示し神戸大同燐寸株式會社と約し神奈川縣内一手販賣をなして遂に今日の大成を致せり氏や眞に奮闘の人と謂ふ可し。

氏は斯る繁忙の間に處し根岸町山本町衛生組合理事、根岸町共睦會會長、小學校教育獎勵會理事等に推され公共の事に盡すや深し而して賢夫人たつ子氏に一郎君福三郎君照嬢久代嬢あり照嬢既に他に嫁せらる。

犬山善助氏

横濱市青木下臺町六八



犬山家は元鎌倉郡中川村に住し舊家を以て聞へたり曾祖父銀次郎氏此に移り難穀鹽等を商ふ當時此地海濱に臨み唯一の舟着場にして關西と江戸の仲介場として殷賑を極む曾祖父介在取引を營み倉庫數棟を有し絶大なる盛況を呈す曾祖父歿後祖父周藏氏其家を繼ぐ祖父文學を好み俳句和歌に長ず祖父早く歿し先代嘉助氏幼時家を繼ぐも不幸四十四歳にて歿す。氏は明治九年九月東京府下荏原郡六合村の名門鈴木氏の分家鈴木淡次郎氏の次男に生れ二十三歳犬山家に入り犬山姓を稱す先考淡次

郎氏温厚着實の名望家にして村會議員に擧げられ最初の學務委員たり氏は頗る父君に類し重厚穩健にして徳望あり既に犬山家に入り大に家産を興し家聲を擧ぐ而して地方發展に關しては劃策盡力至らざるなく常に私財を沒して貢獻する所なし殊に今の松本町は當時迄白鷺趾跡を化する水田なりしを氏が不斷の努力は今日町制を布かるゝに至らしめ又之に通ずる道路の開設及修繕等毎に自費を以てし今縣に移管するに及びし等其一例にして眞に隠れたる町發展の大恩人なりと謂ふ可し衛生組合制發布以來數回其副組長組長に推され國勢調査委員、失業調査委員、方面委員等に擧げらる夫人はな子氏二息六嬢あり。

長男銀治郎氏は慶應大學出身にして熱心なる日連研究者たり宗學に通曉し通俗一致異體同心に住し宗化の宣揚を體し毎月數回宗教語學の講座を開き信徒學徒集團をして傾聽依心しつゝあり一家清肅の修養も此邊より來る。

田中豊三郎氏

中郡平塚町新宿一四四



平塚町唯一の紙卸商店にして而も高潔なる人格懇切なる取扱を以て一種異様の特色ある商店として聞えたる田中豊三郎氏は郡内秦野町の人なり秦野町は州内の舊邑にして田中家は秦野町の名高き舊家なると共に素封家なり初祖以來綿々三十代を算し星霜幾百年を歴し昔よりの大地主たり近世に至り傍ら紙類雜貨商を營む現主は氏の長兄なり。

氏は明治二十四年橘薫る六月斯かる名家の次男に生る父君を田中金次郎氏と謂ふ金次郎氏は光風清月

の如き晶玉的の人士にてありき氏も亦頗る父君の資性を享け幼時より玲瓏珠玉の如く而も意思周密事に當りて要意周到なるあり今昭和五年を去る十年前分家して別に平塚に紙店を創營せり元來頭腦明晰なるに加へて少時より紙類取扱の裡に長じ紙質の撰定販賣の方法より製造の技術に至る迄造詣至らざるなく注意達せざるなし故を以て毫末の支障一回の蹉跌なく開業以來「春潮滿帆風、既入港頭東」の概を示しつゝ商勢は信望と共に高く今や斯界羨望の的となるに至る。

平塚町紙文具商組合長として同業間の親和と發展を謀り又秦野同郷會會計幹事として郷黨の親善向上を加へんと努力しつゝあり而して「宗教は修養の母なり修養は人格の父なり」氏は深き基督教信者にして常住坐臥神に感謝の念を忘れず事々物々悉く天恵を歡ぶの念に滿ち人格は求めざるに此邊より來れるならん家庭には夫人千恵子氏長男豊勝君二男正志君長女三恵子嬢あり。

露木藤藏氏

横浜市神奈川區青木町八六九



氏の生家野地氏は神奈川縣相模國足柄上郡金田村金子に開きたる舊家にして曾祖父を菊右衛門氏祖父を藤藏氏と謂ふ共に質實温良にして篤行の農家たり父君野地喜太郎氏又農を業として徳望ありて深く郷間に重んぜらる氏は其次男にて明治十六年十月十五日父君の家に生る幼より才氣ありて農事を喜ばず稍長じて其才能愈々顯はれ四圍亦矚目せり。

金田小學校高等科を卒うるや小田原在住の叔父植田又兵衛氏の許に居し師に就て漢文學及數學を學び

頗る修得する所あり植田氏は土地の名望家にして町會議員に擧げられ材木商を本業とす隨て氏も亦此を見習ひ大に同業に興味を有するに至り終生を斯業に投ぜんと思を決し十九歳横濱に出で大膽にも諸戸に於て同業の經營を始め此の勇敢なる少年店主は無知の地に於て縦横手腕を揮ひ數年にして既に頭角を顯はし若武者姿甚だ勇しかりき。

當時斯業界に隆名高き神奈川飯田の露木佐代五郎氏大に氏に矚目し自ら勸めて現夫人たの子氏と婚せしめ露木姓を冒し東神奈川驛前に材木店を開き獨立したる店舗を有せしむ時偶々日露戰後になり爾後奮闘努力十七年結果は茲に著大し商勢大に張り露木材木店は全市に認めらるゝの時昨昭和四年地下道設置の爲め氏の敷地狹縮せらるゝに依り現地に移り今や堂々たる大店舗たり氏の年齒亦不惑を越ゆる七歳圓熟せる好紳士として稱讃せられつゝあり。長女長男共に夭折し次男英次君三男督三君次女詮子嬢三女愛子嬢あり。

櫻井昇策氏

横須賀市山王町一六



今横須賀市に於て奮闘家たり努力家たり人格家たり而して徒手空拳にして起り異數なる發達異數なる成功異數なる信望を併せ備ふる人を擧ぐれば氏は確かに其一人たるを失はず氏が半生の歴史は悉く是れ平和の血戰史なり商界の汗涙史なり氏の郷土茨城縣の農村より白面の一青年にして横須賀に或る望を抱いて來りたる明治三十八年より昭和五年の今日に於て横須賀米穀仲買組合十一人中に就き自他共に許す中堅株に至る迄の經路を縷述すれば蓋し一編の立志傳にして豈に小傳的且つ字數

限りある本編の能す可き所にあらず況んや氏も亦好まざる所なるが如し。

櫻井商店の一ヶ年取扱ふ米穀高は實に八萬俵内外なりと謂ふ其販路は市内より三浦郡全部に涉り尙ほ浸々して水の流出せる其如く日夜を棄てず各方面に進出しつゝあり氏は明治十一年の生にして今年正に五十三歳の齡を迎ふ今や人生中知能人格共に圓滿發達せる時期に屬す横須賀市の爲め氏が既往の貢獻を謝すると共に將來期待矚望する所甚だ多かる可し願くは尙ほ一段の自愛と奮勵を望む。

氏の努力は獨り自己運命の開拓に於けるに止まらず市政に參與して市會議員に當選する事四期に及び財政調査委員を始め凡そ市に關する處の各委員に其名を列せざるなく又商工會議員として市商工の發展に任じ教育界方面に於ては教育會賛助員等に擧げられ教育興振の事に力むる等枚舉に遑なし家には賢夫人よし氏長男昌司氏二男秀雄氏三男晃氏あり。

池谷新之助氏

横濱市中區伊勢佐木町一丁目二九

水明樓主池谷新之助氏は神奈川県橋樹郡大綱村の人なり池谷家は維新以前迄代々取見役を勤め苗字帯刀御免の名門家にして父君池谷國太郎氏も亦自治村政上貢献せらるゝ所あり氏は國太郎氏の長男にて明治六年癸酉三月を以て生る幼時より不羈にして偉才あり往々巨人を驚かす然れども至孝父君の業を翼け電勉大に勤む泣て陋巷に届して三十一歳に達す。氏既に自立の齡を過ぐ茲に父君と議し六百金を父君より受け旭村駒岡の地に新橋亭支店と稱して料亭を開く氏の氣宇豁く膽力大なるは能く此種の業に適し又殆んど天能的に割烹料理の道に通じ自ら好んで事に當り斯道の研究に據り新味の考案を加へ開業後

日未だ淺きに係らず夙く繁盛の域に入る居る數年の後機を見るに敏なる氏は新子安に海水浴場を設け之を經營するの傍ら眺望最好の地を卜し所謂山紫水明の所に料亭を開き名づけて水明樓と云ふ此舉頗る時機に適し新子安海水浴の名京濱の間に名高し以て氏の手腕を量す可し。大正十二年の震災は氏の築き上げたる基礎を根底より轉覆したりしも氏は灰燼の裡に興る蘇鳥の意氣を以て直ちに回復の策を講じ伊勢佐木町に宏壯麗美の新築を了し水明樓支店として開店し遂に八年後の今日大成を見るに至りたるは氏の膽力の程恐る可し。子安二業組合創立當初より同組合長に推され組合發展に盡されたる處尠からず家にはあや夫人に明好君とます惠嬢あり嬢は川崎高等女學出身にして生花と琴に堪能なり。

大塚眞之助氏

中郡平塚町新宿一〇六一



歐米人は謂ふ「日本は能く自轉車に乗る國の人なり」と聞くならん歐米先進國に於ても其普及日本の如くなるものなしと都會の中心より山間の孤村に至る迄家として自轉車なきは稀なるが如し一步郊外に出づれば徒歩の人数よりも自轉車走る數多きを見るなるべし今や流行的の物にあらずして實用上缺く可からざる家具の一つとなれり蓋し日本人の敏捷なる天性は自然に自轉車を輕快に赴かせしものにして時好に適したりと謂ふよりも寧ろ實用に適したりと云はん氏は此業に従へり。

大塚家は同郡豊田村に於ける古き農家なり父君大塚鎌藏氏素朴強堅舉村の先輩たりし人氏は其二男にて明治二十五年八月の生にして始め織物業家たらんと志し十三歳の時織物業見習の爲め家を出でて人生難の體驗を初めたるも氏の性資は該業の内的職業に適せず中途目的を變じて自轉車業に入る之より先長兄既に自轉車商を開店し盛に利得を占む氏此に意を決し斯業に投ぜしならん。大正七年氏は別に家を分ちて豊田村に卸商を創め震災直後當平塚に來り大に店舗を張り専ら部分品の販賣を始めしに目的其中心に當り廣く縣外に進出して益々氏の勇躍を鼓舞し奮戦大に努め今や凱歌を奉じ豊田に製作工場を設け平塚を本店として同町自轉車界に異彩を放てり而して平和タイヤ神奈川配給所の特約店たり氏兄弟八人中五人共に自轉車業に従ふ盛なりと謂ふ可し家庭には夫人つる氏二男昌司君長女静子嬢あり。

松村元治氏

横濱市中區伊勢佐木町一ノ二九

松村家は元豆州熱海に住す彼の温泉情史に有名な
る小暮甚太夫
氏は即ち松村
家中祖の主な
り後江戸に出
で日本橋本町
三丁目居を

杉おえん

移す同地に於ても商家の名門家として知られたり先
代已之助氏三十二歳の壯年銳氣に驅られ新興氣分物
々たる横濱に來り伊勢佐木町に店舗を開き半襟袋物
類の販賣を營む。
時は明治十二年の頃にあり西南戦役前後財政の失
當より來れる瘡痍未だ癒えず不況の底にありしも氏
の非凡なる才力と異常なる努力は克く其障害を排超

して駭々たる進展を續け創業未だ日をなさざるに早
く不動の地盤を築き得るに到りしに大正二年卒然病
を得て五十七歳にして歿せられたり。

元治氏は父君已之吉氏の長男にして明治二十六年
十一月横濱の家に生れ氏も亦先考の血脈を享くるの
人意識剛健の半面に愛すべき温容を有し先代生前に
は其片腕となりて能く業務を翼け先代歿後には其遺
業を受けて克く商勢を進め幾度の財界不況も空前の
大震火災も氏の驚く可き反撥力より起る奮闘には此
を征服する能はず進出に進出を繼ぐる幾十年遂に今
日の盛を招くに至れり。

氏は俊敏なる快腕家なると共に温厚篤實の好紳士
にして社會の信望篤きものあり現に伊勢佐木町々會
並に衛生組合に於ても重要な職に推舉せられ町政
及町保健の事に盡瘁せられつゝあり其趣味は落語と
水泳にあり共に好技の人として稱せらる喜代夫人は
頗る音楽を好み自己又一家を成さるゝに至る。

岡田 豊氏

横濱市中區本牧町一五三



自然の雄大を誇る火の山淺間を以つて夙に知られ
居る信州松本
は、吾が岡田
豊氏にとりて
懐しき産土な
り、氏の生家
は代々松本藩
士にして十三代に當る岡田寛正氏の三男なりしも故
あつて家を繼ぐこととなり、東京にて養育さる、明
治二十一年氏の二十二歳の折、横濱に移り住み、二
十五年同地輸出入商サミエル商會に入り輸出部擔當
となるや、輸向き美術手藝品の製作に研究苦心し
リネンパテンの加工、レース加工、手藝品の歐米各
國への販路を圖り、素破らしく業績をあげたり。其

後支配人に任用され、益々輸出貿易の發展を考究し
努力を惜しまぬ爲めサミエル商會として氏の令名は
愈々高まりたり。氏はからして繁雜なる業務の半面
には理科工業に興味を持ちかたはら電信機械の輸入
にも従事し、此の間凡ゆる苦心を経て、從來の英文
通信機なるものを和文通信機に變更することに着眼
し、直ちに右品を考案し、米國に注文して製作せし
め、逓信省其他に納入せり。實に之れ大正七年のこ
となり。大正十五年サミエル氏英國引き上げる事と
なり、氏は茲に獨立し、東京府下大森に於て、電信
機械の製作、優秀外國電信機械會社と特約して其の
販賣をも兼ね、精勵業務に奮闘せり。氏の努力の汗
の一粒々々は徐々に結晶し、現在にては、逓信省納
入品たる和文電信通信機、和文鍵盤鑿穴機、和文送
信機等の特許を得、目下同品の製造販賣に従事せり
之れ實に通信界の一大功績にして、國家的偉大なる
事業であることは論を俟たず。氏は静子夫人との間
に三男四女あり、長男貞雄君は明大卒業後現市社會
課に、二男辰雄君は又水泳の名選手にて早大卒業後
體育協會の役員に三男は未だ勉學中なり。

土屋爲吉氏

川崎市雨町八三

氏は川崎市御幸町南河原に於て、明治六年七月十日を以て生る、嚴父を和助と稱し農を營みしが、後「見晴らし」と稱する料理店を開業せり。

氏は其の長男にして、幼少より父の業を手傳ひしが、當時料理業界の忌まはしき風潮を慨し、一時他の職業に轉ぜり、後小林伍助氏の經營せる藤屋貸座敷の跡を繼承して開業す、斯くて大に家運を起し、彼の大震災にも大なる損害を受けざりしは幸なりき。

氏は平素使用人の待遇に意を用ひ、彼等が教養低くして稍すもれば樓主の待遇を惡意に解して疑を抱き、或は他地方より來る遊客の爲に煽動せられて自

由廢業等の舉に出づるを歎き、力めて樓主と使用人との間の意志疏通を計り親善を進むる爲、一時金錢の貸借を傳票制度として、一々必要の理由及び月日等を記して過誤なからしむる方法を取りしが、後種々なる事情あつて現在は帳面制度に改めたりと云ふ。

氏は又娼妓廢業後の健康状態を調査して一般短命なる傾向を發見し、右は在樓當時の睡眠の不足なりしに起因するを察し、常に彼等をして充分なる熟睡を得せしむるに注意し、其他遊廓制度の改善に就きて常に研究苦心しつゝある模範的樓主なり。

嚴父和吉氏は七十九歳の高齡を以て壯健なり、夫人は八重子と云ふ、長男銀次氏は慶應商業出身にて目下農工銀行に勤務し、次男彦次郎氏は市川野戰重砲兵隊を出でし人、外に三男藤三郎氏四男茂氏あり。

故岡村一氏

小田原萬年町四ノ五七三



明治七年八月十五日仙臺の藩邸に於て武田肩吉氏

次男に生る武田家は世々仙臺侯に事ふ維新當時岩手縣一ノ關に轉住す氏十六歳の

時群馬縣士族岡村家に養はる岡村家は舊中郡安中村に在り氏一の關中學校を出で仙臺に來り宮城縣衛生課に奉職する事三年偶々天然痘流行あるに會し防疫醫某氏は氏の溫雅なる風容と高潔なる人格は醫師として將來あるを看破し多大の援助を與へ東京に出でしむ氏は大に力を得て長與翁の經營に係る濟生學舎に入り刻苦奮勵優秀なる成績を以て卒業するや横須

賀海軍病院に入り程なく外科主任に拔擢せらるる以て氏の外科的手腕の非凡なるを知るに足るならん。

後當小田原に當時より有名なる仁天堂醫院に聘せらる仁天堂は舊小田原藩主大久保家の典醫を勤め外科の大家として一世に冠たり氏が職中院主病歿の不幸に會す遺命に依り仁天堂を繼承し明治四十三年改めて業を開くや外科手術の力量は一般の認むる所となり患者市來し僅かに三年にして病室の狹隘を感じ現地に移轉せり其設備建築總て模範的なるは慶應義塾病院の型に據り完全を極めたり惜む可し昭和四年十月七日焉然として逝かれたり慶應大學病院内科部長草野博士は氏の死を聞き嘆じて曰く實に學界の大損失なりと。

仁天堂醫院は戸田氏に於て中繼せられ現に日本醫科大學在學中の俊彦氏の卒業を待て機に應じて繼承せらるゝの遺言ありと未亡人秀子氏俊彦氏の外一息五娘あり。

輕部雅太郎氏

横濱市保土ヶ谷區保土ヶ谷町二六二六

教育事業が至難の術たる事言を俟たずと雖も就中學校教育中兒童教育たるや極めて重大且つ最難事と云ふべしこれに従事する教育家の勞や又大なり吾人が教育家に對して絶大なる敬意を拂ふ所以亦實に茲に存す。輕部氏は横濱市保土ヶ谷町二六二六輕部金三郎氏の長男にして明治十七年七月三十日の誕生なり幼少の頃より惻愍な子供として近隣の評判者となり小學校を首席で卒るや神奈川縣立師範學校に入學明治三十八年三月同校を優秀な成績を以つて卒業し直ちに母校保土ヶ谷小學校に奉職し茲に教育家としての第一歩を踏み出せり。真く兒童の師となり父兄となり精勵恪勤同僚の模範となれり。

同小學校に勤むること八ヶ年大正二年三月神奈川小學校に轉任し、大正十年三月其の學識と精勵を認められ平樂小學校首席訓導となれり異數の拔擢と云はざるべからず。大正十四年三月に至り紅吾田小學校首席に轉じ、御大禮に際し地方饗饌の光榮に浴せり昭和四年三月校長に昇進し今日に及べり。常に溫容を以つて部下の教師を指導し過誤なからしむ。今や校内外の信望を一身に集め學事の研究に校内の行政に寧日なき有様なり。然も尙綽々として餘裕あり趣味として繪畫を能くし、其の技は既に道に入り大家の壘を磨すると云はる洵に敬服せざるを得ざるなり夫人又溫雅にして貞淑三息一女ありて常に一家團樂和氣瀟々たり。

田中七造氏

川崎市雨町

氏は東京府下大森町字濱端吉五郎氏息として明治二十四年十月二日に生る、嚴父吉五郎氏は海苔製造仲買商を營み、土地に於ける舊家の一なり、氏は少時家業に服しつゝありしが十一歳の時父君を逝ひ、爾來祖父兵藏氏の手により教育を受けたるも、大正十一年祖父歿せらるゝや、氏は當時川崎市にありたる令姉の勧めに従ひ、大正十一年七月現住所に於て現業を開始せり、一力の屋號は現業開始の礎を定められたる祖父兵藏氏が生前不動尊に信仰厚きに基き付せられたるものなりといふ、關東大震災に遭遇、多大なる打撃を蒙りたるも不屈不撓の氏は決然として、復舊の業に精進せられ其の功は次第にあがり、

着々其復興の實を見つゝあり。

従業員に對する氏は眞に慈父の思ひあり、彼等の教養に注意、素養の機會を與ふると共に、環境改善に努力、彼等の將來の光明を大ならしめんと努力を續けらる、又廊内諸施設の改善策につきても鋭意考究をつゞけ、他市のそれを見學し、或は先輩の意見を聽き、又は同業者の協力を以て、新時代の方策に誤りなからしめんとする氏の勞苦又案ずべきものあり、母堂くに子氏は七十歳の高齡を以て健在、夫人雪子氏との間に二男一女あり、雪子氏は母堂への孝養と子女の育成に力を致すと共に、家業をよく治め氏に後顧の憂なからしめんと期せられつゝあり。

金子政次郎氏

横濱市神奈川區淺間町打越九九三



横濱教育界の功勞者にして元老を以て推敬せらるる幸ヶ谷尋常高等小學校長金子政次郎氏は横濱市鶴見區矢向町に生れ所謂の純粹の濱つ見なり温分たる風丰の内に爛々たる眼光を放ち嚴分たる性格の間に切々たる情熱を見るは蓋し濱つ見氣質の學問に依て醇化されたる者ならん氏は明治十一年三月四日を以て呱呱の聲を放たれたり今先づ先生の學歴と經歷を語らんに
明治三十三年神奈川縣立師範學校卒業、明治三十七年三月神奈川縣師範學校訓導拜命、明治三十九

年三浦郡北下浦小學校長拜命、明治四十五年横濱太田小學校長拜命、大正六年西平沼小學校長拜命、大正十三年横濱市學務委員、昭和三年六月六日附奏任官待遇、同年九月十五日は正七位に叙せらるる同年十一月幸ヶ谷尋常高等小學校長以て現在に至る其他横濱市教育會幹事、神奈川友松會幹事、横濱體育協會理事に推舉せらるる。

先生は此の如く滿三十年の久しき星霜を専心一意教育會の爲に盡して餘念なく趣味として目錄を有する劍道家たるの外唯だ自分の保育せる兒童の績々と社會に顯はるを觀るを唯一の娛樂となし業務の繁を知らざるが如し而して先生の教育は一に人格主義の方針にありて先づ身を以て範を垂るゝの人也。

夫人は間宮五兵衛氏の妹君子氏と云ふ長男實氏は外國語學校支那語出身今縣立商工實習學校教諭光子嬢は高女卒業他に嫁したま子嬢は高女卒業後女子職業學校に在り二息一嬢あり。

高塚大助氏

川崎市南町八二



氏は川崎市向ヶ岡の人にして、安政六年を以て生る、明治十九年貨座敷高塚樓を開業せり當時は舟崎、新宿、砂子等に散在せる樓數二十三軒ありしが、明治五年京濱間鐵道開通の影響を受け非常に衰微に陥りたり、明治三十六年南町に指定地決定して、六十間に百二十間約一萬一千坪の敷地定まりし時は、吉田屋、荒井屋、玉木屋、高塚、三浦屋、藤屋等僅かに八軒なりき、後轉々移り變りて現在十九軒に増加したり。
氏は古くより營業して基礎を築き上げ、後次女と

よ子を分家して「新高塚」を營業せしめたり、其後彼の大震災に會せしも僅少の損害にて濟みたるは幸なりき。

氏は平素より使用人に對して家族的待遇を以て臨みつゝあり、氏の意見によれば、彼等娼妓は生れながらの運命なるを以て、其の多くは教育程度低く、且つ一般貧家に立ちし爲偏見多きのみならず、其の將來を考慮せずして唯日々無意識の中に暮すを以て廢業後は明日の生計にも困る者多し、然れども樓主の言を信頼して同意せる者は皆相當に生活し居るを以て、常に其の教養に深く意を用ひ居るに拘はらず往々樓主の情誼を裏切る者あるは遺憾なり、而して其の結果は皆悲慘の境遇に落つと云ふ。

氏は又遊廓の改善に付、服裝、結髪、建物構造の點迄注意研究しつゝあり。
内室かの子氏は大正十五年中六十八歳にて歿せり、長女定子に聲養子を迎ひ、附近にて高塚病院を開業す。

小川寅次郎氏

川崎市南町九五



氏は縣下鶴見町の出身にして慶應元年七月七日を以て生る、父君は三郎左衛門と稱し農を營む、氏は其の長男にして夙に横濱に出でて荒物雜貨商を營みしが、明治四十年森谷卯之助氏の經營せる森谷樓に管理人として入る。森谷樓は元森谷氏と前島氏と共同にて經營し前島樓と稱せしが、前島氏は營業不振の爲に森谷氏に譲り、以來森谷樓と改稱せり、森谷氏は嚴正なる人なりしが、小川氏も亦義理人情に篤く且つ清廉潔白なる人にて、管理人時代には收支決算を嚴格にして些

少の過ちも無かりき、森谷氏は之に月給を與へんとせしに、小川氏は元森谷氏の世話を受けし恩義の爲に盡すと稱して受けず、唯僅かの小遣錢を受けて十八年間の永きを献身的に盡したり、而して今や其の跡を繼承して經營の衝に當れり。

氏は縷主として娼妓の待遇に深く意を用ひ、常に家族的の情を以て優遇せり、然れども彼等は却つて之を裏切る者もあれど、其の末路は何れも悲惨なり蓋し彼等の無教育に因るものにして、或は厚遇優待に乗じて益々増長する者あるが如き實に遺憾なり、地方より來る私娼上りの者は公娼となつて其の衛生設備に感心し、一命の助かりし如く悦ぶ者多しと云ふ、氏は此等の點を見ても常に遊廓内部の改善に心を注ぎ居れり。

内室はけい子氏と云ひ、六十歳にて健全なり、長男清次君、長女はつ子嬢あり、一は小學校に通ひ一は家事を手傳ふ。

小野芳三氏

横濱市程土ヶ谷區保土ヶ谷岩間下二二六〇



小野氏の遠祖は人皇五代孝昭天皇の皇子天足彦國押入尊に創まり年を歴る事二千五百年代を重る事七十餘世連綿として當代に及ぶ而して現今保土ヶ谷の當家は今より三百五十年前即ち天正十一年に歿する小野能智氏に創り茲に十一代を閱せり先代は幼名留次郎長じて忠右衛門と稱す酒造業を營み家道を興せり又岩間町組頭代議人(最初の議員)驛用係獎學收税及び岩間町總代兼小區會議員及消防世話掛を勤む且つ學校費傳染病豫防藥料等を寄附したるにより縣より賞狀を受く明治二十年四十六歳を以て歿す當代芳三氏は其長男として十七年一月二十五日を

以て生る夙に横濱實業學校より進んで東洋大學に入り教育科を修む卒業後家に在て貸地貸家等を營みしも後専ら貸地業に従事し屋敷を篠原屋と稱し小野家總本店たり氏亦崇祖の念厚く近江國にある遠祖小野妹子朝臣の墳墓を修築するに當り廣く關西の同志と一致協力して其功を奏するの一斑を見ても推知するを得べし氏の趣味としては實に多方面に涉り花道は池の坊の流を汲み淡海亭篠風の號を用ひ書道は道風流を學びて雪篠學人淡海と號す斯く雅號を淡海と稱するは蓋し遠祖の淡海國造なりしに因せるなり又漢詩に於ても造詣深く淡海の名詩壇に喧しく其詩は曾て大正詩文に鈔録せられ天覽及び各宮殿下台覽の光榮を得たり尙ほ劍道は一刀流小野派と稱す加之氏は社會奉仕の念厚く目下公職としては岩間町衛生委員岩間町委員程ヶ谷町學務區委員並びに小學校建築建築委員に列し其功勞により知事及び町長より褒狀及木盃を寄與せらる其他耕地整理組合總代たる一方日本赤十字社特別社員兼終身社員大日本武德會正會員海員救濟會特別會員明治神宮奉贊會贊助會員神奈川消防協會贊助會員帝國在郷軍人會名譽贊助會員等凡ゆる公共事業に參與せざるなし尙ほ氏の嘗て賦したる漢詩一首を掲げ以て如何に斯道に造詣深きを示さん。 海山輝映入新春 瘦甲蒼髯儼有神 仙鶴一聯雲五色 併將瑞氣繪清農 海邊松

半田林藏氏

横浜市中区尾上町二ノ二四

半田林藏

人は誰も他人を垣間見て幸福と見る農夫の辛苦に充つる労働も詩的に見ゆる現に一流の肥料商として金港實業界に時めく半田林藏氏も他所目には唯一幸福兒と映ずやも知れざれど其成功たるや權威に阿諛せず財閥に倚らず腕一本一本に終始せる奮闘の實にして其間所謂る七轉八起世路の辛酸を具に嘗めしは論を俟たざる處氏は栃木縣宇都宮市高田町半田源吉の長男にして明治十九年四月三日を以て生る家は代々肥料商なるを以て氏も父祖の業を襲ぐべく學校卒業後同市一流の肥料商上野松

次郎商店に身を奉じ主家の爲犬馬の勞を盡すこと十有餘年其間一意肥料に關する知識と經驗の體得に努む明治四十四年辭して獨立するに當り主家と地を同じうするを慮り當時地方に對する問屋を缺きし横濱市に着眼し常盤町に居を構へ英米獨佛の商館に入して肥料を購入し之を地方に供給するに至る當初は資金の不足を來す事屢々なりしが地方の需要種目に對する該博なる智識と商館に對する誠意に加ふるに財界不況の爲めストック品過多にして人物不足の際とて比較的順調のコースを辿り大正六七八年の好況時代には數百萬を擧げ當時子安にビーナツツの製造を開始し税關私設假置場を設けて業績大に揮ひしが大正九年のバニツクに大創傷を蒙りしも剛腹なる氏は敢て怯まず一意回復を圖りし結果昔日に倍する盛運を招來す然るに又復大震災の爲身一つとなりしが力戰邁進克く禍福を轉換す現在不況に鑑みて肥料を中止し専ら三菱化學試験所の專賣特許品ライトプロックの販路擴張に努む夫人キヌ子氏も宇都宮の出身にして内助の功頗る多し。

大高俊雄氏

横浜市神奈川區青木町九〇



金港實業界に於ける新人として將來を囑望さるゝ大高俊雄氏は房州の名門福田家の出明治二十三年二月二十四日を以て生れ風に大高家を嗣ぐ抑々同家の淵源を温ぬれば祖先は代々濃州大垣戸田藩の城代家老として家門の譽れ高く殊に九代の祖金兵衛喬度は海道一の名將と謳はれ飛ぶ鳥落す權勢ありしが十一代拾栗に至り偶々維新の風潮澎湃たる時勢を洞察して十數代數百年來連綿たる老職を捨て、一介の平民となる長男幸一郎氏は天折し次男達郎氏後を襲ふて同家を襲ぎ中頃縣下保士ヶ谷

に移住し外國商館に勤め老後隱棲して靜かに餘生を樂しむしが不幸にして大正十二年九月一日の大震災に不慮の横死を遂ぐ達郎氏亦嗣なく依て福田家より氏を迎へて三女藤枝に配し其後嗣となす氏は安房中學を卒業後横濱生糸株式會社に入り主として棉花の買入方面を擔任し東洋諸國特に南洋方面に飛躍を試み殊に孟買にては同社マネージャーとして獨特の靈腕を揮ひ漸く斯界に其存在を認めらるゝに至り大いに將來の活躍を期待されしも大震災直後同社の閉鎖と共に歸朝し獨立して貿易商の店舗を開き劃策大に當りしが昭和三年聘へられて内外編物株式會社に入り社内屈指の敏腕家として今日に至る氏年齢不惑を越ゆる僅かに一歳縦横なる才氣の中に高潔拘すべき人格を藏す其小成に安んぜず益々努めて倦む事なくんば更に獨白の大を成して斯界の明星として瞻仰さるゝの日期して待つべし夫人藤枝氏は縣立高女の出身ピアニストとして令名あり長女和子(六歳)を儲く。

井上治兵衛氏

横浜市神奈川区青木町一〇五六



資本金一億圓世界的大會社にして三井王國の金穴たる三井物産の支店長級と云へば重役候補として堂に入るべく縁側位々の榮職なりと雖も支店長にして取締役を兼ねるは獨り現同社横濱支店長井上治兵衛氏あるのみ氏は舊都の名家として知らるゝ京都二條油小路通り上ル先代井上治兵衛氏の長男として明治六年六月十二日を以て生れ京都市立商業學校を卒へるや初め一高を経て帝大工科に學ばんとせしが生家と三井家とは古來膠漆も管ならざる密接なる關係あり爲めに同校卒業後直ちに三

井物産に入り平社員よりスタートして上海天津倫敦漢口神戸の各支店更に本社詰續いて横濱生糸部長横濱支店長とコースは豫定通り進んで遂に重役陣にゴールインし今や我財界一方の雄たり而も現在我輸出生糸の大半は氏によりて取扱はるゝのみならず彼の大正十二年の大震災直後滿目荒涼の焦土と化せる横濱に敢然起つて生糸界の爲め身を賭するも辭せざりし其勇猛努力は全く筆舌に盡せず財界稀にみる美談として斯界に喧傳さる氏は一面實に横濱復興の恩人といふべし資性敦厚人に接するに温情春の如く而も事に當るや公私を明にして情實に拘泥せず從容迫らざる裡に電光石火の機才を備へ如何に複雑なる事務に對しても裁斷流るゝ如し蓋し近代横濱の代表的人物として將た又我財界の重鎮として理想的大器たり趣味としてテニス將棋を能くす夫人チカ子氏の間に男進(横高商在學)二男泰女千代(搜真高女卒)二女(同校在學)三女(同上)の二男三女を儲く。

吉岡操氏

鎌倉郡由井ヶ濱三丁目



大奈破翁は嘗て伊太利遠征の途次アルプスの嶺を踏破せんとするに際し「不能なる文字は我が辭書になし焉んぞ我れを妨ぐるアルプスあらんや」と壯語し豪快の意氣天を呑むの概あるを示せるが縣の一角鎌倉の電氣事業界に其人ありと知らるゝ吉岡操氏も未だ嘗て不能の文字を知らず一度び意を決して起てば白刃一閃人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を斬り縦横無碍の快腕を以て必ず其目的を達せずんば止まざる意氣と確信を有する俊魁として知らる氏は福井の人明治十九年二月五日を以

て呱呱の聲を擧ぐ明治三十年頃笈を負ふて上京し勉學幾年螢雪の苦成るや海軍省製圖部に職を奉じ日露戰役に從軍す凱旋後遞信省に轉じて精勵正に十一年一日の如しされど實業界に轉じて雄飛の念止み難く虎視耽々機の到るを待ちしが先づ株式研究の必要を痛感し蹶然身を輸贏市場に投じ撃拆場裡虚々實々の體驗を重ね是れ實に財界波瀾多かりし大正八年の頃なり氏が明察機略の巖然群を抜く故なしとせず創業の當初は外國製石油焔爐日本一手販賣權を得て三越白木屋松坂屋等を始め全國に販路を開拓し基礎漸く成れるに偶々大震災の爲本來の空に歸す然れども百折不撓の氏は勇猛不退轉の意氣を以て直ちに後圖を策し挽回に努めたる結果家運は隆々曙光の東天を破るが如く日に／＼向上の一路を辿るに至る氏は鎌倉町に於けるラヂオ商の元祖にして現に東京電氣の特約代理店たり尙氏が現放送局常務新名氏の後援の下に本年内に創始する或電氣事業(名稱は特に秘す)は斯界に異常のセンセーションを起しつゝあり。

福田庫文司氏

横須賀市中里町



シセルローズは「政治家たらんと欲せば不世出の人格を要す」と喝破せるが政治家に限らず何事を爲すも人格第一たるは論を俟たず横須賀法曹界の異彩にして市會議員たる福田庫文司氏は富貴も誘ふ能はず貧賤も屈する能はず、火に入つて焼けず水に入つて溺れざる當代稀に見る人格者として知らる氏は明治十年一月埼玉縣比企郡吉見村に生れ明治三十五年東京帝國大學法科を卒業するや身を軍籍に投じて海軍主計となり日露戦役に出征して武勳赫々たるものあり爾來累進して海軍主計大

佐に陞り現に正五位勳三等の位階勳等を有す大正十二年豫備役に編入されると同時に辯護士を開業す傍ら工廠工友會顧問を囑託され大震災直後横須賀市及市民の爲に貢献せる業績に至つては枚舉に遑あらずと雖も就中大濫理立問題稻楠土地交換問題等の圓滿解決を見たるは實に氏の先見の明に依る處多し昭和四年市民一致の重望を負ふて市會に出馬し而も初市會に於て堂々豫算編成方法の改善を叫び爲に市財政調査會の設置を見るに至る以來正義と人道に立脚し熱と誠を以て横須賀市政の改善を圖りつゝあるは市民の深く推服措く能はざる處にして近時綱紀の類廢政治家の墮落其極に達せる今日氏の如き硬骨主義の士を市政壇上に見るは大に意を強ふするに足るものと云ふべし夫人美知子氏との間に三女あり長女春野(日本女子大學文科出身)は海軍機關中尉柿沼氏に二女正子(同上)は銀行員後藤功に執れも嫁し三女園子は目下小學在學中。

中田宇之助氏

横濱市中區本牧町七〇三



世に事業の種類は極めて多く國家的なるものあり個人的なるものあり千差萬別なるが就中海運業の如きは一國の獨立的基礎を確立する上に又國民利福を増進する上に最も重大なる關係を有する國家的公共事業の最たるものと云はざるべからず而して終始一貫該事業に献身的の努力を續け人格手腕の優れたる實業家として將た又精勵格勤なる活動家として斯界の王座を占むるものに東京灣口第一の港屋回漕店主中田宇之助氏あり氏は風光明媚の地として名ある神奈川縣久其岐郡屏風ヶ浦の産中田長五郎氏の二男として慶應三年十二月十二日を以て呱呱の聲を掲ぐ齡十七歳の若冠にして夙くも海運界に身を立つべく志し蹶然家門を辭して横濱に出

で山形屋回漕店に入り拮据勉勵する事實に十數年大阪商船專屬船部主任緒明汽船曳船主任として縦横無碍の快腕を揮ひしが明治三十五年獨立して合資會社港屋回漕店を創立其代表社員となる時に三十六歳而も先天的事業家としての着眼と手腕とは忽にして異常なる發展を招來現に東京灣港に於ける唯一の撫順炭輸入取扱店たり大正三年從來冷遇されし横濱曳船業者の大同團結を主唱し其組合成るに及んで組合長に推され大正十三年迄勤績し該業者の景仰を一身に聚む宜なる哉これぞ彼等に社會上の獨立と安定を與へたる横濱開港史上一大エポックを劃せるもの十二年六月港屋を個人經營とし別に合資會社中田回漕店を北仲通りに創め東京深川佐賀町に出張所を置き傍ら日本鋼管株式會社出張所を兼ね爾來幾星霜遂に京濱間の第一人者となる震災直後十三年陸軍運輸部復興建築材料たる米材輸入の爲神奈川長延寺に出張所を設け殆んど半額の運賃を以て其の使命を遂行せるは大なる國家的貢獻と云ふべし十四年多額納稅者に列す斯くの如く氏は赤手空拳克く今日の巨富と地位とを贏ち得たる立志傳中の偉材たると共に又稀に見る仁俠にして而も温厚なる人格者たり敬神崇佛の念篤く如何なる宿縁にや過去に於て鳩の爲に危難を免れし事屢々ありとは頼朝石橋山合戦の故事も偲ばれて興味津々蓋し古今兩雄自ら靈犀一點の通ずるありか夫人をもよ子氏と呼び淑徳の豊高し。

秋元太四郎氏

川崎市南町九一



同じ紳士階級の中に在つても花柳社會の人は何となく奥床しさの少く感ぜらるゝは如何なる譯か思ふに彼等の多くは只管物質慾に眩惑して精神の世界あるを知らず個性の尊重社會の公德といふが如き事を棄て、顧みざるの風ありしが故に一般堅氣方面より侮蔑の眼を以て見らるゝに非るなきか然るに我が新相模樓主秋元太四郎氏は全然彼等と其選を異にし常に個性の尊重と人格の修養に重きを置き其心事の高潔なる實に當代稀に見るの士と云ふべし氏は明治十一年十二月十二日川崎大師川

村秋元染吉氏の長男として生る家は代白屋と號し代々米穀商を營む舊家なり八歳にして父に死別せしが幼時より既に俊敏を以て稱せられし等は年齢僅か十一歳にして東京に上り某米穀商に身を奉じて精勵大いに努む偶々日露の役起るや御用商人として從軍せんとせしが新相模樓を經營する伯母の漸く老いて嗣なき爲め迎へられて其養子となる同樓は明治五年の創業にして我が國に於ける最も古き貸座敷たり氏爲人温情に富み使用人を遇するに恰も慈母の愛兒を撫育するか如きものあり遊廓の改善向上を以て畢生の使命となし今日まで貢獻する處頗る多しと雖も特に取締役當時樓主對娼妓の融和策として時間制度を一時より十二時に變更せる如き或は從來娼妓四分樓主六分の歩合を娼妓六分樓主四分と改めたる如きは蓋し最も顯著なる功績と稱すべし川崎遊廓亦縣下の模範的遊廓とせられ十年以上の勤績者には木杯一個十五年以上は同一組二十年以上は銀盃を贈つて使用人を優遇する等々斷然他廓を抜く夫人よし子氏との間眞に伉儷相和し一女高子を擁して鬻々たり。

井坂孝氏

東京市麻布區富士見町一七



氏は茨城縣士族井坂直幹氏の三男にして明治二年十一月八日を以て生る、二十九帝國大學法科を卒業し法學士の稱號を得、同年分家して一家をなす、天資英敏にして才能あり、東洋汽船横濱出張所長として、敏腕をあらはし、事業の敏活を計り、能く責任をつくし、其名を世上に知らる、大正三年同社を辭して横濱海上火災保險會社に入り、推されて専務取締役となり、益々其の才能を發揮し、社長となる其の他、横濱興信銀行副頭取大成社長、横濱取引所理事長、關東興信銀行頭取、

ホテルニューグランド社長、横濱生命保險、東洋電機東京報知機、横濱工業、横濱帆布、日本無線電信、復興助成、常盤火災海上、共益不動産、安田信託、南成公司の各取締役東京麻糸、日本香料、松尾鑛業横濱船渠の監査役。

原善一郎氏



氏は明治廿四年本牧三溪園に産る紳士原富太郎氏の長男なり先代原善三郎氏の嗣子となる夙に早稻田大學に學び大正二年三月米國に渡航し、ハーバート大學に入り螢雪の苦を積み大正六年十月十日を以て歸朝年原合名の代表社員となる。

渡邊 劍治氏

横濱市中區常盤町二ノ一五



長真川の上流に臨める岐阜縣武儀郡美濃町は渡邊家發祥の地なり祖父は宗助氏と呼び父君は盛吉氏と謂ふ代々米穀百貨商を営む氏は盛吉氏の長子にて明治二十三年六月二十六日を以て生れしが不幸七歳にして父君歿し九歳にして母堂を失ひ加ふるに土地家屋共に賣却せられし爲め策々たる無告の孤兒となり尋常小學四年にて退學の悲境に立てり十二歳岐阜市紙商松井商店に入り具さに苦酸を嘗むる十年間辭して横濱に來り輸出絹物商神谷商店に入り薄給三圓を以て勤むる事半ヶ年。

福富町に間借をなし業を創めんとせし時携ふる所二十圓雜費を控除すれば殘金僅かに六圓を餘すのみ此を唯一の資本として始めしに半年の後既に三百圓を利し得たり後二十圓の月給を以て辻商店に入り氏の手腕と精勤は此處に認められ一年後は百三十圓を給せらるゝに至り約十ヶ年間の勤績をなし店主より其勞の賞として數千金を與られしも震災の魔手に襲はれ九死に一生を得るの不幸に遭遇せり。

流石の快男子も一度は神戸岐阜等を流浪せしも再び横濱に歸り中村町に六間々口の大店舗を構へ荒物の卸小賣を始め縦横無盡に大活躍を試み二年の後雜貨店を廢し輸出絹物商を営みミルトンゴールドバーク氏の注文二萬圓を基礎として漸次大成を招き萬代町一丁目の現地に新築し遂に今日の渡邊商店を見るに及ぶ異日横濱の立志傳を編する者あれば氏は必ず其一人ならん家に精練の夫人カワ氏あり文江嬢正丞嬢光子嬢好江嬢を有す。

伊澤 長次郎氏

横濱市中區山下町一八七



伊澤家は往時より今の中區杉田町に邸し代々農業とせり先代九三吉氏學あり才あり而も剛堅篤實の士にして横濱開港當時よりアイザック、パン商會に入り危険なる迫害に抗し慘酷なる猜疑と闘ひ精勤實に四十有五年専心商館の爲に盡す貢獻甚だ大なるものあり昭和二年六十二歳の老來を以て同商會を引退するや商會は多年の功勞を偉なりとして此を表彰し今に至るも尙ほ俸給の支給を受けつゝあり館主の情誼誠に感ずべく流石文明先進國の商人なりと首肯せしむるも此れ偏に氏の至純な

る忠勤の報酬なりと謂ふべく此種の美事眞に現代勞資兩間の龜鑑とするに足らんか。

氏は九三吉氏の次男にして明治二十九年湘南の梅信に春先づ動く二月盡日二十八日に生る天性豪快にして意思身體共に剛健なり杉田小學校を卒へ十八歳にして海軍に入り尋いで横須賀機關學校普通科に學び明治四十二年同校卒業後再び横須賀海兵團に歸り大正七年一等機關兵として滿期除隊せらる歐洲大戦の起るや金剛艦乗込員として布哇一帶の保備に當る戦終りて功に依り勳七等に敘せらる。

大正七年東京電機會社横濱支店土木課に職を奉ぜしも同十三年職を退き現業品の復興に必需なる可きを察し伊澤兄弟商會を起したるに販路狭少にして苦心を嘗め前途を疑れしも氏は此に努力奮闘を續け遂に今日の繁榮を招き得るに至りたり氏に趣味廣く自働車の如きも運轉の免狀を有し又狩獵に長じ犬を愛せり夫人タミ子氏大正十一年に婚す。

杉原増太郎氏

横濱市中區北仲通一ノ三



氏の家は代々神奈川縣海部郡開治村に於ける屈指の舊家たりしが、今を去る四十年前、氏の嚴父善藏氏の時に家を舉げて名古屋市末廣町に移り、麵類業を営み、現在、氏の令兄藤之進氏之れを承けて繁盛を極む。増太郎氏は善藏氏の四男として明治二十四年七月二十五日に世に出て、同市立商業學校を明治四十二年に卒ふるや、將來軍人たらんことを意圖して歩兵第六聯隊に現役志願兵として入營し經理部下士に進みしが、肉體的に不適なることを悟ると共に實業家として名を爲すべきこ

とに想達す、即ち除隊後東京市京橋區尾張町なる竹村貿易商店に入り、此處に勤務すること十有星霜、入店後數年にして支配人に拔擢せられ、商業視察として支那、北米、ハワイ等遠隔の異郷に雄飛すること數次、當店の爲めに盡瘁するところありしが、當店の離散に會するや、直ちに震後の横濱市に出で、元濱町藤岡商會内に貿易、運輸、並びに東京國分商店、萬壽油荷扱業を獨營するに至る。其後昭和三年五月現地に移り、誠心誠意、身心を傾倒するところあつて、遂に今日の地歩を確立す。尙氏の業績は之れのみならず、商界の不況に依る店員の不安なる將來を憂慮して、神奈川町中川に空堀空樽商を兼ね營みつゝあり、氏の商業界の進出は無一物を以て始り、孤軍奮闘の末、今日を招來せるものにして、杉原商店の充實せる内容は萬人の衆知するところなり氏は性豪放磊落にして、徒弟を愛すること厚く、營業方針の如きも江湖の好資料たるべし。

須賀甚藏氏

横濱市神奈川區子安町二〇一六



平沼銀行を代表し同銀行を一身に負荷して立てる平沼銀行常務取締役須賀甚藏氏は横濱銀行業界の重鎮にして横濱財界に聲望高く實業家中稀に見る偉大なる徳望の人として一世に知られ此が一代の成功史は立志傳中の一頁を飾る可く芳香並なき人と謂ふ可し財界の偉傑平沼專藏氏の衣鉢を完全に繼承し得たりと稱せらるゝの一語に盡く氏は鎌倉郡小坂村山の内の農家磯貝家の三男に生れ後鎌倉の名刹建長寺の管長須賀箕山師の養嗣子となり由緒遠久なる須賀氏を冒す夙悟剛健異童の稱あ

り其横濱に來るは實に明治七年にして横濱市の初期にあり氏も亦十三歳の小童なり當時本町三丁目に在りし芝屋手塚清五郎氏の店に入る店は生糸賣込商五軒中の一なり後清五郎氏歿せらるゝや平沼專藏氏其跡を繼承するに當り氏の平沼家に入店するは條件の一なりと謂ふ平沼家は洋糸織物引取商を營めり明治二十五年平沼家の主稱に依り横濱銀行並に貯蓄銀行の設立に及び氏は副支配人たり後平沼銀行の創立なるに當り氏は常務取締役の席に就き爾來銀行方面の事は一切を擧げて氏に委嘱せられ今日に及びたり眞に偉人偉人を識ると謂ふ可し。

此間大日本水道木管株式會社取締役、港鐵道株式會社取締役、末吉殖産株式會社取締役下野煉瓦株式會社取締役として實業界に雄飛せらるゝ所多し夫人淳氏東京小泉保直氏の令嬢なり長次兩息家に在り長嬢既に嫁し次嬢はフェリス女學校卒業後共立女學校に在り。

久我菊司氏

東京市外調布町鶴ノ木二一五

明治大正昭和三世に亘る事業界の偉人淺野總一郎翁は赤手空拳より起つて一代の大富豪とされるだけあつて人物鑑識眼亦嶄然群を抜き従つて淺野王國を繞る帷幕の士には豪あり鋭あり駿あり老巧あり孰れも一騎當千の將器揃なるが中に現淺野物産株式會社横濱支店長久我菊司氏は將來其一黨の中堅たるべく大地を打つ槌は外るゝとも外る事なかるべく期待せらる氏は千葉縣長生郡豐岡村久我彦助氏の四男にして明治二十一年五月二十二日の生れ明治四十二年東京錦城中學を卒業するや商科大學の前身東京高商に學び大正三年一つ橋を巢立つと東洋汽船に入り横濱

支店詰を振出しに同社桑港支店貨物課長に進み更に紐育支店貨物課長として在米六年大に快腕を揮ふ大正十三年香港副支店に拔擢され巨銀縱横の活躍を期待されしが偶々同社が日本郵船と合併成るに及び同支店の殘務整理に當り十四年完了と同時に同系の淺野物産株式會社に轉じ本社詰となる時に同年十二月一日十五年四月同社横濱出張所が支店昇格最初の支店長たるの榮を擔ひ赴任匆々現社の社屋を新築擴張し内外名實共に支店並支店長の貫祿を示し以て今日に至る趣味も道樂も悉く社務の中に投げ込み社業の外には何ものをも顧みぬ程の熱心家強ひて求むれば園藝位が唯一の趣味ならんか夫人貞子氏は金澤の人貞淑の譽れ高く長女芳子(目下小學校に在學中)二女香三女悠紀子の三女を擁し和氣霽々眞に文字通り地上の天國を現出す。

堀 榮 助 氏

横濱市神奈川區淺間町九〇〇

由來富豪名家の子弟は動もすれば懦弱嬌逸に流れ研學修養に留意せざる結果複雑なる社會の事情に通ぜず浮世の艱苦辛酸を知らざるが故に血も涙もなく社會民人を觀る事塵芥奴僕の如きものある中に我堀榮助氏は「藍より出で、藍よりも青し」とせらるゝだけに之等富豪特有の因襲に囚はれず社會民衆に對して理解ある事は單り富豪の品位を高むるに止まらず延いて近來陰惡に赴きつゝある社會思想を緩和するに足るものと云ふべし氏は縣下の大地主として知らるゝ千萬長者堀家の先代榮助氏の長男として明治四年五月を以て生る初め三郎と稱せるが同三十五年家督相續と共に榮助を襲名す明治二十五年早稻田大

學の前身東京專門學校政治科の出身にして現に神奈川縣多額納稅者なり氏は道がに名門に生育せるだけに其氣品と云ひ人格と云ひ常人の到底及ばざる高雅優美高尚なる風格を有し人に對するや懇篤にして寛容常に對者をして一種の温味を感ぜしめ而も一面には凛として冒すべからざる權威あり親しむべくして狎るべからざる眞の君子人の面影を有し人をして思はず敬虔の念を禁ぜしめざるものなり夫人はつ子氏(澁谷幸次郎孫)との間琴瑟甚だ和し家庭圓滿敦氏(明三三生)喬氏(明三七生)襄氏(明四二生)充氏(明四三生)邁氏(大二生)幹氏(大七生)護氏(大一二生)匡氏(大一四生)光氏(昭二生)妙子氏(大元生)播子氏(大一〇生)等九男二女の子福者として知らる吾人は氏の如き深淵なる學識と實社會に對する理解とを有する富豪の健在を衷心より喜ぶと共に一般富豪も資つて氏を模範とせん事を望んで已まず。

平野藤太郎氏

川崎市南町八四

氏の嚴父營吉氏迄の數代川崎在に於て油問屋を經營す初代は明治初年大津屋と號し揚屋を業とせしが中興より三浦屋と改號し明治卅三年指定地決定後現在の場合に移る迄數代を經し舊家にして大正十五年家督相續する等遊廓營業も三代に及ぶ。氏は生來温厚篤實夙に學を慶應義塾大學に受けたる新智識の好紳士にして理財の手腕に富む、日夜遊廓改善に意を注ぎ時には他の人々と協力して娼妓の家庭的待遇策を講じ又彼女等の教育程度を高め常識普及等を計るべく檢診日には僧侶を事務所招聘して精神講話を聞かしめ或は又氏自身の持論として公娼制度が私娼に比し遙かに衛生設備充實し惡疾病感染の恐れ無く

同遊廓に一興する者を後顧無からしめんと盡力せる効果は空しからず現在に於ては自廢問題の紛議起りし事無く他遊廓に優るとも遜色無し、震災後父の名義にて取締役を務め目下代表取締役として同業間を統治し各營業主とは努めて共和的に相談を爲し新しき意見を傾聴しては遊廓改善に盡瘁する結果當川崎遊廓組合殊に他の組合に比較して萬事共同一致の態度を以つて進み推して氏の人格を知るに足るべし。氏の家は震災に依りては幸に倒壊を免れ十月十六日再び營業を開始せり、且又前川崎市南町青年團長を務め更に今回市會議員に當選する等多方面に活躍中なり。

相澤英二郎氏

横浜市中西戸部一本松八五〇



氏の實家は東京麻布にて内田主典守正學の家老職を勤め岡野周吉氏は槍術の指南役なり。明治維新後板橋に隱棲し茶舗を構へり。母堂房氏は信州荻生侯の愛嬢にして當主英二郎氏は其の大男として生る。幼にして敏悟叔父なる維新の大學者西周氏の許にありて嚴格なる教育を受く故森岡外博士の如きは此の時代共に薰陶を受けたる一人なり。又中村敬宇先生の社に年餘更に東京高等師範學校に入り明治拾九年卒業す、爾來福岡師範學校教諭。栃木縣の郡立小學校長。東京府師範學校附屬主幹として在職四年。後鹿兒島師範。香川師範。等を歴任

し石川師範學校教頭七年後遂に三重師範學校長に赴任し八年間銳意教育に盡瘁せり。氏が同地にて古代文學研究上の資料を提供する處多し。其後大正二年本縣女子師範學校長となり又同時に高等女學校長として二校數千名の女子教育を双肩に擔ひて立ち拾年間其の重任を完了し其の功績や顯著なり。國文學の權威者であり、人格者として賞讃すべき氏は今や縣教育界の元老者宿として縣民の尊敬厚く正五位勳六等の榮位を得て其の晩年を養ふ。趣味として和歌は舊友佐々木信綱氏の關係よりして竹柏園流の温雅な歌風を好み、國語學者「谷川士清先生傳」の著述は洛陽の紙價を高め其他「竹川竹齋翁」の共著あり、教育書として普通教育學、新式教授法、學校管理法地理教本、明治讀本等拾數卷の大著は多年氏の蘊蓄を傾注せしものなり。

氏には四男一女を有し、長男高亮(卅八歳)は工學士技師次男英夫(廿四歳)は早大出東京モス社員、三男巖夫(廿四)は京大出にてランニング競技日本記録保持者として令名高く四男尙夫(廿一)は早大文科出長女君代(卅五)は他家に嫁せり。

松井 鎧三郎氏

湯ヶ原温泉



空高く聳ゆる
「稱徳碑」を見
るならん。こ
れぞ遠州屋旅
館経営者たる
松井鎧三郎氏

の半生を自治公共事業に貢献したる大なる功績を如
實に物語るものなり。

氏は明治十九年先づ箱根役場吏員となり、明治二
十一年収入役に選ばれ、明治三十二年郡會議員に推
され、郡參事會員となり、越えて三拾八年には助役と
して親しく事務執掌し、明治四十年箱根町、元箱根
蘆ノ湯組合町村長に又箱根消防組頭、青年聯合會委

員、其他の公共的生活を送ること四十年の長年月に
及び、その盡瘁の勞により、屢々金杯銀盃等を授與
されたる事あり。氏の遠祖は江州伊井藩士にして元
和元年の頃流浪轉々の後三島方面より來りて箱根に
上り、爾來土著して十數代を経たる名門の舊家なり
氏より三代前の當主はじめて箱根關所前に遠州屋旅
館を創設し兼ねて關所吟味役として知られたり氏は
先代利兵衛氏の長男として安政五年四月呱呱の聲を
あげ、長ずるに及んで家業を繼ぎ鋭々努力すると共に
幾多の社會公共事業にも意を注ぎ、大いに活動し
たる功績は永久に止めて衆の範とすべく、「稱徳碑」
として表彰さるるに至れり。斯くて氏は湯ヶ原温泉
の將來を着眼し、大正六年十二月同地に移り、遠州
屋旅館を開業し其の發展に全力を傾注し、堂々三階
建の宏壯なる構へ、室内設備の完全を圖り、尙滞在
客の無聊を慰さめる爲め、プール、湯瀧等を設ける
外娛樂機關を備へる等頗る腐心する處あり、今日で
は百五十人の多數を收容出来る準備は、全く整はれ、
湯ヶ原温泉中の雄なるべし、東都よりの遊客非常に
多しと謂ふ。

富士屋ホテル株式会社 富士屋自動車株式會社

一國文化の程度は旅館の良否に依つて識別される
と云ふ。されば文化先進國に於ては競ふて旅館設備
の完璧を期せり。旅館設備の善美は單に外客を誘致
するに止まらず、彼我國情を明らかにして、國交親
善の大使命を基調とせり。この大理想により經營さ
るる我が國ホテルの數は實に寥々たる感あり。其の
中にあつて帝國ホテルと又格別の風致を以つて知ら
れたる箱根富士屋ホテルこそは雄たるもならん。そ
の宏壯にして優雅、而かも華麗なるは人目を驚かさ
ず、其他大食堂、大宴會會場、ダンスホール等一切
の設備まで完全し、翠峰紫雲、風光明媚なる函嶺と
相俟つて其の名は世界に誇るべきものなり。

かくして富士屋ホテルを想ふ時、その創立者とし
て鋭意腐心したる山口仙之助氏の偉大なる功績を看
過するに忍びず。氏は明治十一年米國より歸朝する
や、諸設備不完全なるホテルを以つて、觀光客を誘
致することの至難なるを洞察し、彼地にありて多年
見聞研究したる智識を以つて、箱根藤田旅館を買収
し、之れに十分なる改善を加へ、「富士屋ホテル」と
命名し、我國ホテル業の先驅として開業したり。明
治二十三年鍋島侯爵其他有力者の協賛を博する處と
なり、物資の圓滑を圖ると共に、大飛躍を試みるこ
ととなり、専ら外人客ホテルとするべく諸般の設備
に苦心し、大增設を加へたり。之れ現富士屋ホテル
の基礎と云ふべきなり。明治三十六年七月商法實
施せらるゝや率先して株式組織に變更し、氏は推さ
れて社長として全責務を統一し、着々發展の途につ
けり。又溪流の水力を利用して自家用電燈に使用せ

り。之れ關東地方に於ける電燈の嚆矢なりと云ふ。氏は一面、自治公共の發達にも傾注し、明治二十二年村長に推薦され引き續き十六ヶ年 孜々として村發展に盡瘁し、其間湯本、宮ノ下間の新道開鑿事業を遂行したる等、顯著なる功績は數ふるに餘りあり。明治三十九年、勳七等を賜はり、大正三年には特に藍綬褒章を授與され多大の榮譽を膺ひ、その信望は嘖々として喧傳されり。

現ホテル經營者たる専務取締役山口正造氏は、夙に先代の遺志を繼承し、亦卓越せる識見と手腕を揮ひ業務に腐心し親しく歐米に遊て彼地に於てホテルに關する研究を遂げ、其の發展の資となし、努力にため今日の地位を築くに至りたるものなり。氏は又新に傍系會社たる富士屋自動車會社を設立して、國府津、小田原、横濱、沼津、三島、湯ヶ原、熱海、伊東、網代等十五ヶ所の樞要地に各出張所を置き自動車網を張り、將來の發展を期待されり。自から社長として社務を閲覽し、令弟山口堅吉氏を専務取締役として一切の衝に當らしめり。令弟堅吉氏は明治四十一年早大商科を卒業したる秀才にして、初め日

本郵船會社に入り、歐洲航路濠州航路に事務長として令腕を誦はれしも、明治四十四年退社後は令兄を援けて富士屋ホテルの經營に傾注せり。大正三年新に富士屋自動車會社創立を見ると共に、専務取締役の要職につき着々その手腕を發揮せり。其間大正九年米國に赴き自動車業視察をなし、斯業に造詣深く、前途氏の努力に喝する處多し。又大正十一年より村長に選ばれ四ヶ年を勤績し、偶々かの大地震災に遭遇するや銳意専心して箱根復舊に奔走して寧日なく、箱根復興會を起し、森格氏を會長に氏自ら副會長として、全く献身的の奮闘の結果完全なる復興なり、舊に倍する今日の盛況に至れり。

斯くて富士屋ホテル會社に、富士屋自動車會社に協力一致して衝にあたり、益々發展に盡瘁し、昭和三年には新に横濱乗合自動車會社を設立し、又、横濱海岸ニュー、グランド、ホテルの經營一切を繼承し、更らに横濱税關構内棧橋、岩壁、横付け自動車の認可を得、横濱、宮ノ下間の乗合自動車運轉を開設する等、躍進に躍進を重ね、正造堅吉兄弟の令名は汎く業界に喧傳されたり。

寺村 富次氏

東京中目黒九四六



寺村家は世々川越藩に仕へ藩の財政を掌る家柄なり。祖考富造氏は居を近江にトし舊幕時代には京都に出仕して朝廷の御用を務む先

考富榮氏は明治維新後大阪に在て時代の先覺者として又大阪商工會議副會頭として各方面の事業界に活躍し將亦有名なる五代友厚氏と共に斯界に奮闘したる人なり氏は其第二子として明治十一年七月廿九日を以て生る夙に大阪中學に入り卒業後帝國大學に於て電氣工學を研究し業成りて大阪電燈會社に入り調査掛管理課長となり後電燈製作所の所長として電機

機關の製作に従事せり其後同所が大阪市に買收せらるゝに及んで修繕工場として整理をなす事となれり。大正十一年外國電氣事業視察のため歐洲に遊び大いに得る所あり歸朝後十二年十二月日本電力會社に入り營業部次長兼營業課長となり又某水力電氣會社の取締役となり昭和二年十一月小田原電氣鐵道株式會社の日本電氣會社と合併するに至るや氏は小田原に在任する事となり相武電力も合併となり同年八月箱根登山株式會社を創立して取締役となり電燈電力事業を統一するに至る昭和三年後氏は前記合併後横濱支店長となり同時に因幡水力電氣株式會社の監査役に推されたり夫人松江子氏は京都劉家の出にして世々朝廷の典醫たる家柄なり一男二女を生む長榮一氏は立教大學商科在學中にして長女綾子氏は麻布第三高等女學校に次女道子氏は番町小學校にあり氏の趣味としては古代建築美術に對する鑑賞と古代佛教美術に對する造詣深きものなりといふ。